53-206
1200600870296

話の核結

O複写

醫學博士
有馬賴吉著

始

ヒバ藥局
文庫

結核の話

醫學博士
有馬賴吉著

有馬藏書

序

この本は大阪毎日新聞社の和氣律次郎君と私との共同の産物である。この本を成すに就ての私と和氣君との關係は、私が獨樂であれば和氣君は鞭を持つ御者である。よくまわるかまわらないかは獨樂にもよるが、おもに紐による、馬が馬車を曳いてよく走るか走らないかは馬にもよるが、大に御者の手腕に在る。

こんな譯でこの蕪雜な書物の出來た主な責任は之を書いた私よ

53
206
I種
W
1200600870296

りも私を鞭つたり、ぶん廻はしたりした和氣君の方に餘計に在ると私は思ふ。

實際此本は前後の順序も、重要、不重要の區別もないお粗末な産物であるが、今更之を筋目立つたものにする氣力が私になく、和氣君も之れ以上私を鞭つて夫をさせる興味もないやうである。つまり馬車馬がくたびれて動かなくなつた態である。致し方がないからこのまゝ本にして終ろうといふ次第で、世間に對しては相濟まぬことではあるが、私共としてはこれで精一ぱいである。

また、私は曾てこのやうな通俗の書物を讀んだことがない——この點がまたこの本の碌なものにならなかつた原因でもあろうが——のでこの全篇をなすにも和氣君の鞭鞭を外にしては、一切他人の智惠を用ゐた覺えはなく、他の書物から飜案、反譯したことはない。すなはち全部自分の頭腦から絞り出したものであることに瑣かな自慰を有つものである。

大正十二年七月下浣

どろばうも清風もよくはいる攝津打出の濱邊

不讀書房にて　有賴生誌

結核の話

目次

1 それは謎であつた……三
2 「死刑の宣告」ではない……八
3 都會人は皆結核だ……一四
4 引導役が救ひ主に……二一
5 煙草は菌を殺さぬ……二七
6 葡萄酒は血にならぬ……三三
7 知春期と結核病……三八
8 N君とそのお母さん……四六
9 結核恐怖病……五二

10 傳染させない用心……五八
11 咯血の養生とその豫防……六三
12 「轉地」でなく「轉氣」療養……六七
13 結核の早期診斷と早期治療……七五
14 結核病者の食餌……九二
15 我輩の素性……九七
16 子供の結核……一二〇
17 家族結核とは何か……一二五
18 K夫人への消息……一三一
16 「啖ふ」といふ事……一四二
20 病室は何うすれば良いか……一六三
21 肺患と轉氣療養……一七〇
22 乳兒の急性肺結核……一七六
23 安靜平臥療法……一九〇
24 いろ〳〵な結核療法……二〇〇
25 結核の化學的療法……二〇六
26 カルシウム療法と炎症……二一三
27 カルシウム療法……二一八
28 結核とはどんな病氣か……二二四
29 結核の人工免疫……二三五
30 列車中の紫陽花……二五四
附錄 結核豫防の根本策……二七五

（終）

結核の話

有馬賴吉著

1　それは謎であつた

私は唯今結核病について世間の人にわかるやうな本を書かうと思つて筆を執つて居る。そして自分にも表現することの出來ない怖ろしさを新たに感じて、躊躇して居る。實際私は――自分の研究業績を發表する論文などは別として――本を書くことには今まで永らく非常に臆怯であつた。

大阪毎日新聞社には私の知人が可なりに多いが、中にもとりわけ懇意な人があつて、私に結核のことを書けと勸めて吳れ、私も一つ書いて見ようとお約束をしてから、早小一年にもなる。併し私の本を書くことに就いての怯懦病は到底手盛りの藥位では治りさうになかつた、併し今度といふ今度は到頭、重い萬年筆を取り上げた

次第である。なぜそのやうに己れが專門として携はつて居ることを書くのが臆劫なのかと諸君は不思議がらるゝてあらう。

有體に言へば、私は永年結核を專門として居り、可なり熱心に研究もし、多少は自啓する所もあつたが、しかし、他人に向つて之を說いて見ようとか、一つ世間を敎へて見ようとかいふ勇氣がなかつたのである、力は勇氣を生ずといふから、私の塲合は逆に、力がなかつたことになる。實際私は年を逐うて結核についての智識を積めば積むに從つて、益々結核病が難解の謎であることに驚かされて、當惑し、逡巡し、恐怖し、果ては萎縮して仕舞つて居たのである。丁度、摑みどころのない大石を提げて行かねばならぬやうなもので、力にも素より叶はず、どうしてといふ思ひ一ッかずに居たのである。實際今日迄結核に關する病人を診た際に凡ゆる確信を以て、病人なりその家族なりの質問に滿足な答へを與へることの出來る醫者があつたらうか。若し是れありとすればその醫者は或意味の幸福な人であらねばならぬ。

病理學の泰斗アショッフ氏が言つたやうに同じ結核像は二つない、百人千人全くおなじ容體の人は二人ないのであつて、それが治療法に對する注意も、嚴密に云へば皆違はなければならぬはずである。それを筆に表はす塲合には出來るだけ大勢の人々に共通のものとしなければならないのであるから、六かしいこと此上なしである。私が結核病のことを筆を執りかねて逡巡して居たのはざつとこのやうな譯である。それを今日から續きものとして讀者諸君と目見えることになつたのは、私に取つてかなりに辛いことでなければならぬ。が、併し、一日筆を執つた以上は最早詰らぬ泣言は並べぬ。

今から數年前である。ある大新聞社の講演會で私の畏敬して居るさる醫科大學の敎授が、『謎としての結核』といふ題で、かなり念の入つた講演を試みて居つたことがある。その要點は『結核病は治癒すべき筈の病氣である。癒らなければならぬ理窟であるのに實際は治らぬ。さうして多數の同胞が年々それが爲に殪れて行く、

『これには何か吾々の知つて居る事だけの以外に大きな不明の點が隱れて居るに相違ない。だからして吾々には結核病は謎だ』、と云ふ風であつたと記憶する。私はそれを傳聞してしみ〴〵情なく思つた。

一番數が多くて、おまけに一番の難病たる肺病が醫學の歷史に載つてから二千年以上になる。中世紀の混沌時代は判らぬとして、近世紀に入つてからの醫學といふものは半ば以上肺病卽ち結核の記載で持ち切つて居る。殊に十九世紀から以後の醫學は外の一般の科學の進歩と俱に長大足の進歩をしたと思はれて居る。コホといふ大先輩が結核の病源たる結核菌を發見して世界の學者を驚かし、その承認を經てからでも早や四十年を過ぎた。この四十年は人類の歷史からは極めて短かい一期間であるに過ぎないが、醫學の歷史から見ると過去數千年に幾倍する程重要な期間であつて、其間の醫學の進歩は殆ど世界醫學の全體と謂つて可い程の嵩を持つて居る。學者の出たことも空前であるが、業績の積まれたことも亦莫大である。就中、結核

病の研究は年々歲々積んで山を成すと謂はうか、滾々滔々として長江の流れの如しとも謂へよう。さうして、今將た奈何の狀ぞやである。大學の某老敎授は『結核は謎だ』といふ。幾ら研究などしても其本性が判らぬといふ意味だ。

七八十年の昔は天然痘は世界中の人類を脅かして、人面を破壞し、人口の增殖を制限して居た。今は世界中の文明國には天然痘は無いといつて可い。醫學進歩のお蔭である。十四世紀の終りに歐洲の人口を三分の一に減じたペストは今は歐洲には絕對にない。歐米文明の都市では『チーフス』や『コレラ』はまた全く其の跡を絕つた。之も亦醫學進歩の賜である。その醫學の研究と進歩は結核に對して、さて何を寄與したか。醫學進歩のお蔭で世界人類の幾分でもが、ホントウに結核から免れて枕を高うして居るてあらうか。どこの國にか現在結核病の慘害から免れて居る國民があるか。いや、どこの國にか現に結核患者を親類緣者の中に持つてゐない人が唯の一人だつてあるてあらうか。決してない。而して所謂進歩した醫學は結核病

の剿滅を遂ぐる爲めには今迄は餘りに無力であつた。『結核病は謎だ』、いや『謎であつた』。

2＝『死刑の宣告』ではない

現今日本だけでも年々十五萬人ほどは結核の爲めに殪れる。之を時間で行けば、私がかう書いて居る三分か五分毎に一人づゝの同胞が結核の爲めに喪はれつゝある勘定である。結核では一人の死人に對して十人の病人があると見るのであるから、前の勘定では日本だけでザッと百五十萬人ほどの病人が現存することになる。この百五十萬人ばかりの人の中には自分で病人であることを知らずに居る人々も素より二三割はあるであらうし、輕い病氣で一向苦にもせずに働いて居る人も一二割はあ

らう。しかし百萬人内外はいづれも病苦に惱まされてその日〳〵を送りかねて居る人々である。中には家庭の事情や周圍の狀況が良くて何不自由なく氣永に別莊や病院などで養生をして居る人々もあらうが、なかにはまた長い養生の資力に窮して居る人も多くあるに違ひない。あるひはまた、青春志を抱いて都會の地に憧がれ上りながら、半歳一年を經ずして、昨の紅顏色褪せて難治の病苦を胸に抱き、スゴ〳〵故郷に歸り行く男女もあらう。最も悲慘なのになると、病んで死に瀕しても一夜の看取りをして呉れる親兄弟もなく冷たい病床に唯だ呻吟して

醫師ひとり死の匂かゞ夜半の冬

と私の友人をして嘆かしめた施療病院の患者などもあるのである。或る人が日本に結核があるとなしとによつて岐るゝ經濟上の計算をして見たらば結核の病氣の爲めに費消する冗費と生産力の減少とで年々三億圓の損失となるといふ。

此所で結核の慘害を之以上に書き立てるべく私の筆は餘りに重い。それでも讀者

の中には私の下手な記述に先だつて、結核の慘憺たる害毒を十分に御存じの方もあらうし、或は傳へ聞いて居る人もあるであらう。それだからして、世間では結核のことを『不治の疾』だと云ひ、醫者に診せて結核であると斷定されることを『死刑の宣告を受け』ると言ふ。だが、實際に結核は不治の疾であらうか。一度結核といふ診斷を受けたならば二度世に立つて人生の快樂を享けることが出來ないであらうか。私は斷じて言ふ『結核は今では最早謎ではない、そして決して不治の痼疾ではない。否寧ろ極めて治り易い、ごくごく性の善い病氣である』と。

かう私が言つたゞけでは讀者は容易に信じないであらう。否、中にはヨイ加減な茶羅鉾を云ふな、といつて怒る人もあらう。私は決して今日理解階級に在る新聞の讀者諸君を捉へてヨイ加減な茶羅鉾を並べる積りはない。何人の前に出ても私はこれだけなことを斷言するを憚らない。去らばとて私は諸君に理由なしに結核が治癒すべき善性の病氣であることを信じて下さいと强要はせぬ。理由なしの信用は宗教の

畑であつて吾々の科學の畑では許されない所である。私は是からその理由を說明しよう。

諸君。——是れから暫く講演體でやります——結核病は治り安い、ごく〳〵性の善い病氣です。これを病理學上から申しても、實際の經驗から申しても必ず治る病氣です。すると諸君は『それでも此病氣の爲めに日本人だけで年々十五萬人も殪れると君は言つたではないか、それで治り易い性の善い病氣と云へるか』と反問なさるでせう。御尤もです。併し諸君。結核はコホの發見した結核菌といふ黴菌による傳染病です、少しく多くの人の集合する大小の都會地は申すもおろか、殆ど如何なる山間僻地でも當今では結核菌のない所は莫いといつて可い程、人間の住ふ場所には蔓延して居る病氣です。同胞五千萬と云はうか、六千萬と云はうか、皆悉く、イヤ、世界人類の十數億の人間が殆ど皆結核菌の洗禮を受けない者は莫いと云ふほど蔓延して居る傳染病です。——私は今お話の混雜を避ける爲めに外國のことは餘

り申さないやうに致しませう――五千萬人の同胞が殆ど悉く結核菌の洗禮を受けた――この理由は後で申します――として、日本中て年々老衰や、その他の病氣て死ぬる人が百萬人づゝありますが、その中の僅十五萬人ばかりが結核て死んだとて比較の上からは大した數とは言へないてせう。

殆ど皆の人が結核に罹つて居る證據があるが、その大勢は格別病氣にもならず、病氣になつても容易には死ぬものてはなし、年々死ぬる人でも九割近くは老衰や、外の病氣て極樂往生を遂げるのてすから、結核菌が人の體内に飛込んだとて容易に病氣にはならず、縱し結核病になつたとしてが、容易にそれが爲に斃れるものては無いことがお判りになるてせう。事實結核菌が體内に侵入した時に卽座に病氣を起し、間もなく死刑の宣告を與へられたやうに不治の病氣になるものならば、私など肺病を專門として診療して居る醫者や看護婦などは、生命の掛け代へが幾ダースあつたとて足りつこはありまん。なんとさうてはありませんか　私共が常に申す『肺

病は怖るべき病氣てはあるが、之を理解して之に接すれば、また怖るべきものてはない』といふのは此處の理窟です。

すると諸君は、五千萬同胞の中から年々十五萬人も結核病で殪れるといふのは數に於て決して少くない。殊に君の言ふ、五千萬人の殆ど悉くが結核菌の洗禮を受けて居るとは信じ難い』と仰やるてせう。私は是には證據があると申しました。慥に同胞の殆ど總ての人々、殊に大小の都會地にすまふ人々は生れて間もなしから大抵十四五歲迄の間に必ず結核菌の洗禮を受けてしまふものてす。けれども皆が皆結核の病氣にはならず、結核になつたとてその爲めに死ぬる人は極仕合せの惡い少數の人だけなのてす。

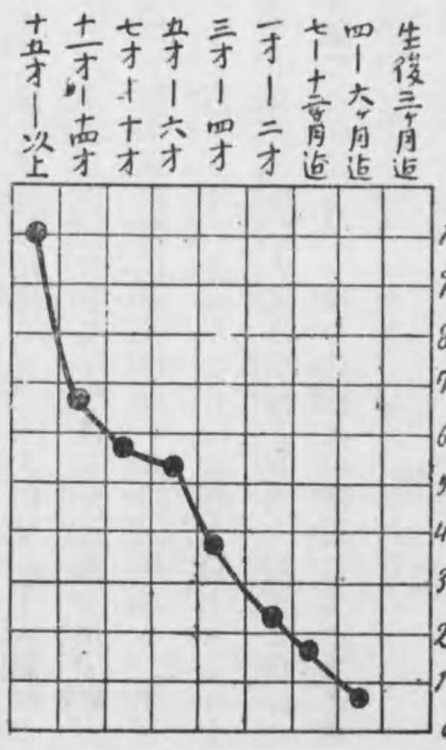
諸君、例を今大阪市に取つて申せば、諸君の日々十數萬人づゝお乘りになる電車の中で、臂へ『たんつばをはくこと、何々右堅くお斷り申候』と書いてあつても、はきたい痰を車外に吐く人は私は殆ど見たことが無いのてす。停車場や、芝居や、

寄席だとか、大きな銀行會社などの中には今ては必ず痰壺が備へてあるのですが、同時に勝手放題に吐き散らした痰が隨分澤山に見受けられるのです。

この吐き散らしの痰は間もなく乾いて、風のまに〳〵、又は人の動くにつれて、八方に飛散ります。結核の黴菌は乾いたとて容易には死なゝい奴ですから、空氣の中に飛び散りては人々の眼、鼻、口から体内に飛び込みます。だから都會地に活きてゐる限り、誰でも結核菌の洗禮を受けない者は無いといふことになります。

3＝都會人は皆結核だ

諸君、ビルケー氏の反應といふ、結核にだけある特別な人體の反應があります。それは『ツベルクリン』といふ矢張りコホ博士が結核菌から創製した藥がありますが、その『ツベルクリン』を少しく薄めて、これを人の皮膚に種痘のやうにして射しますと、一日二日三日位の間に其の箇所に丁度蚋か毒蟲かに螫されたやうな腫衝が出來ます。これの出來る人は幾らかの結核免疫性を持つて居る人々であつて、言を換て見れば、悉く結核菌の洗禮を受けたことのある人といふことになります。――結核菌の傳染とか免疫とかのことは後に申します



このビルケー氏の反應は歐羅巴の都會地に住む人ては大抵十四五歳迄に悉く現れて參ります。ビルケー氏が此反應を發見した最初の報告にある小兒の年齢と此反應の現れる頻度――數の增して

來る度合――とを圖に現して御覽に入れます。

此圖面の中で横に書いた算用數字は數の百分比例でありまして、即ち子供が生れて四箇月か六箇月あたりでは百人此反應を檢査した中で五、六人に現れ千人調べると五、六十人に現れる事で、それがだんだんに、大きな子供ほど此反應を現す數が殖えて、五歳六歳あたりでは此反應を現す者が既に百人中五十人以上に上り、十一歳から十四歳あたりでは百人中六十人以上、千人調べるならば六百人以上もこれを現す者があり、十五歳以上では百人中百人、即ち大人は全部此反應を現すといふことになります。ですから人間十五歳になれば悉く早や結核菌の傳染を受けた者許りであると謂へます。

日本で此反應を一番先に檢査した人は佐多博士でありますが、私と石井もその次の年――明治四十一年――に佐多博士の言ひつけで精しい調査をしましたが、大阪人に於ても矢張り、ビルケー氏が墺國維也納でやつた成績と大差はありません、唯小

兒にも大人にも維也納人よりも少し現れ方が少いだけであります。

諸君。このやうに大阪人でも維也納人でも、詰り世界中の都會人は十四五歳迄に皆悉く結核菌の洗禮を受けた證據を各人が皆有つて居ります。

生きてる人が殆ど全部結核菌に觸れたことがあり、之に傳染してゐる人であるといふことは、結核が容易に治る病氣であるといふことに密接にして重大な關係があるのですから、冗いやうですが今少し御辛抱を願つて、私は、いま一つ最も確實な證據を出します。

十數年前に大阪高等醫學校――今の大阪醫科大學の前身――で、萩谷氏――有名な女醫學者で、今の藤村博士夫人――が過去廿年許りに亘る解剖記錄を辿つて精しく調べた所で見ますると、驚いたことには、何の病氣で死んだ人でも、大人も子供も大抵は皆結核病の痕を大なり小なり有つてゐないのは無かつたといつて可い程なのでありました。即ち大人の屍體に就て見ますれば、其比例は百人では八十人近く、

千人では八百人近くの人が、皆其體内の何處かに結核病に罹つた痕跡を有つてゐたのでありました。伊太利の醫學者ネーゲリ氏が調べた處では萩谷氏の調査成績よりも、モット劇しいのでありまして、總ての屍體はその九割以上も身體の何處かに結核の痕跡を有つてゐることを證明したのです。詰り、人間の生命を奪る定病は何てあつても、生きてゐる間い結核に罹らない者は無つたといふ確な證據です。

さうして此世に生きてゐる限り殊に大小都會地に住ふお互の身では結核に傳染せずには居られぬ、が併し傳染はしても決して皆が皆結核病で死ぬるのではなく、幾らも知らぬ間に罹つて、少しも病氣の徴候を表はさずに、知らぬ間に治つて仕まうのも澤山にあり、又は既に多少病氣の徴候を表はしたのでも風邪引き位で過ぎて仕まつて、矢張りそれとは知らずに治つて仕まう人が國民同胞中の最大多數で、その中結核には免疫になり、天壽を完うして極樂往生を遂げることが出來るか、又は已むを得ぬ他の定病で死ぬる人もあるといふことになるてはありませんか。このや

うに自然に打ちやらかして置いても、澤山に治つて行くのですから、縱令結核病であるといふ診斷を受けたとても、何も悲觀して、死刑の宣告を受けたやうな氣持になつて仕まう必要はないのです、また、幾らも必ず治るのですから。

序ですから私は如何にも結核病は治り易いものである實例をも一つ申て見ませう

明治天皇樣の御病氣が稍や御重體であらせられて侍醫の人々丈ては……といふのでもなかつたが、萬遺漏なきを期するといふ意味て、侍醫以外の名醫もお聘びになる事になつた時に、一番に臨時御用掛として宮中に上られた方は當時の東大の青山博士と三浦博士であつたことは御存じの通りです。その青山博士は先年物故されましたが、遺言によつて東京大學で死體を解剖されました。先生は胃癌で死なれたのですから解剖の結果は勿論胃癌が立派に存在したのです。慥か先生は六十以上てあられたし、曾ては『ペスト』の研究で『ペスト』に感染されたことなどもお若い時にはあつたし、徹底した學者であつて、可なり構はない風の方で、病人を診たとて後で

手など洗ふことも滅多にないといふ方でありましたが、それだけまた、身體は至極健康であつたのです。さうして前に申したやうに胃癌で亡くなられたのですが、驚くべきことには先生の肺に立派な結核の痕があつたことです。それが生前には、お若い時にも結核病らしい徴候も無い至極の健康であつたことに違ひないのです。

肺結核はこんな風に、知らぬ間に罹つて、知らぬ間に治つてしまふこともあり、それに罹つた自覺と病徴があつても時機を誤らずに靜かに適當な攝生と治療をしてゐれば、確に完全に治つて行くものです。此樣な實例は實際無數にあるのです。寧ろ臭迦臭くてこれ以上は書けない位です。可なり重い肺結核になつた人でも現今では幾らもズン〳〵治るのです。私共の預かつてゐる刀根山療養所は、不幸にして重症の人々ばかり入院する所ですが、三年ほどの間にその重症の人々の中から既に百六十人許りも全治退院した人があります、私共にはこんなことは餘りにありふれてゐるので、却て世間に吹聽する氣になれないのです。

4 ＝ 引導役が救ひ主に

結核の治り易い病氣であるといふ事は、また決して肺病許りに限りません。肋膜や腹膜の結核でも、腸結核でも、骨や脊椎の結核でも、皆極めて治り易い病氣です。私はモ一つおまけに骨の結核の、而も甚だ重症の方の實例をお話ししませう。

當時廿二歳の婦人でした。十八の秋に結婚しましたが、その冬から脊椎の結核が出て參りまして、十九の夏にはそれが脊中と臀部の二所に破れて、絶ず膿が出るやうになつて、全く床から離れることは出來ず、兩便の世話を姑さんと御自分の妹さんとでするとになつて了つたのです。御亭主は云ふもおろか、雙方の親類中の心痛は一通りではありませんが、本人の悲觀と心痛と氣兼とは、傍の見る目も氣

の毒なほどでした。諸君このやうな關係を想像して御覽なさい、隨分辛らい慘じめなものです。已むを得ないやうな場合には隨分それで無理を推して動いたりしたものでせう、病氣はだん〳〵重くなる一方です。熱は出て來る、寢汗は素よりのこと食事は行けなくなつて、身軀は痩せ細るとばかりです。

結局親類も本人も諦らめ盡した時に、私のよく知つて居る或る外科の先生が引導役で聘ばれて行つたのが、病人廿二歳の秋口で、發病から滿四年近く經た後です。當時の病氣の模樣を聽きましたが、なんでも、脊中と臀部に二つづつの孔があいてゐて、それから絶えず膿が出るのをガーゼと繃帶で受けて居り、一方の臀部と脚とに床摺れが出來て、熱は毎日四十度以上のさし引きがあつて、秋口の事です、汗と膿の臭氣で鼻向けがならなんだといふ事ですから、重症の程も想像が附きませう。

諸君。骨や、關節や、脊椎の結核――又はカリエス――は他の結核と同じく極く治り易いのではありますが、もと〳〵病氣として現れて來るほどですから、一旦こ

れ程になつたものは、唯譯もなく無暗には治りません。矢張り之を治さうには、それに相應して合理的な攝養と醫療が必要です。それには怎のやうにして此病氣が出て參つて、怎のやうに不攝生をしたから、そんなに重症に陷いつたのであるかを、なることならば豫め知つて置いた方が、私も話が仕易くもあり、之を聽いて眞養生に入る人にも利益です。

全身の骨の中でも一番重いのは申す迄もなく頭の骨です。重い物體は地球の中心に向つて引附けられるのが、**ニユトン**以來物理學の法則ですから、人間の頭骨は絶ず地上に向つて墜ちやうとしてゐるのを、支へて居るのが脊骨卽ち脊柱と足脚の骨です。然る處足脚の骨は、立つて居る時でも、歩く時でも、階段を登る時でも、兩方交代に頭と體幹の重さを支へるのであり、坐るか腰を掛けるかすれば、兩方共休まる事も出來るのですが、脊柱は一本だけですから、頭と體幹の重心卽ち重さの中心を離れることは出來ません。言ひ換へて見れば、體を横たへて臥ない限り常住そ

の一等重い頭骨と胸や腕やの重さを支へてゐなければならないのです。

この脊柱は二十四個の石臼のやうな骨の組立てゝ出來てゐて、皆臼形の骨と骨との間には軟骨といつて護謨のやうに彈力に富んだものが挾まつてあるので、如何なる重荷を負ひ荷ふ時でも、如何なる運動をして前後左右乾坤巽艮に體を曲げる時でも、極めて便利好く出來ては居るのですが、それにしても絶ず重荷を負はされてゐる事は、中々大儀な役目であるに違ひありません。さればこそ、お互に立つて居るよりも坐つた方が樂であり、坐つてゐるよりも横に臥た方が安らかであるのです。おなじく坐るにしても唯坐つて手を膝に置いてゐるよりも、脇息があつた方が樂であり、椅子に掛けても肘掛のある方が安らかです。臥た場合に脊骨が頭と體の重心を放れることは勿論のこと、凭れても、肘を掛けてもこの重心が幾らか脊骨から外れるので、それで全體が樂に感じるのです。

諸君。斯のやうに脊骨は苦勞の絶え間がないので、この苦勞は軈て脊骨に結核病

の多い原因なのです。ですから、骨の結核は脊椎に一番多くして、その次に苦勞の多い足脚の骨と關節が結核に多く罹るのです。さうして一旦病氣にかゝつた後にも此の重荷を負ふ苦勞は取除けられないのですから、病氣が快くなることは措き、惡くなる一方なのも知れ切つたことです。

この譯さへ分つてゐれば骨の結核病を治すことは實に容易いものです。詰りこの骨の重荷を負ふことを出來る限り輕くしてやり、又は出來るならば重荷を取り除けてやることが根本第一の策なのです。

そこで、話は二十二歳の氣の毒な婦人に歸つて、彼の人の家に引導役に聘ばれて行つた外科の某博士は、その婦人の病氣に尙治癒する見込を附けたので、其他の醫師が豫後不良といふ宣告を與へた代りに、『仰山三年豫後佳良』といふ宣告を與へたのです。

某博士の説明が私の言ふ所とおなじてあつたか、ドウかは私は知りませんが、兎

に角言ふ迄もなく親切懇到で又明快であつたのてせう。この宣告は今や生死の境に沈淪してゐた病婦人に、炳然たる生の光明を與へた事を私は疑ひません。その後此婦人の絶對的仰臥安靜は實に文字通りに嚴行されたのださうです。勿論側の人々の看病も行屆き、醫療も最善を盡したのてせうが、一箇月餘りの後には既にボツ〳〵熱が下りかけて、食慾が增して來て、骨の瘻孔から出る膿も減じて來たさうです。

良い養生と治療法が齎らした、此覿面な効顯は、曩の宣告を疑ふともなしにまだ多少不安の心地を放れ得なかつた病人と側の人々に、ドノ樣な感激を與へたのてせう。全快の希望は日に〳〵明らかな光を增し、窮屈な養生に耐ふるの勇氣は時と俱に熾烈になつた事を、想像して見るだけても諸君愉快なものてはありませんか。最後の經過は所謂薄紙を剝ぐやうて日に月に快くなる一方てした。さうして三年仰臥の約束は二年未滿に縮められて、最初の宣告から年を越た次の夏の終りには、再び處女のやうな若さと艶やかさに歸つて、丈夫になつた脊柱と兩脚は、喜びに滿ち

た頭腦を支へて歩けるやうになつたのてす。さうして今日てはモー三人の可愛い子供の母として、圓滿なる且多望なる家庭の主婦として、樂い生活を持續してゐるのてす。

諸君。結核が肺に在つても、骨に出來ても、養生と治療が極めて道理に合つてゐれば、容易に全治するものてあるといふ證據は最早十分にお判りてせう。此諒解を有ち、治癒の希望を捨てずに忍耐を持つて醫療を持續する限り、結核のために生命を奪られることは決して無いと私は確信します。

5＝ 煙草は菌を殺さぬ

諸君。今日は一つ養生のお話を致しませう。

多くの素人の所謂養生法なるものは、私共から觀ては餘り良い養生にはなつてゐないのです。元來養生法の責任は醫者と病人とで半々に負ふべきでありますが、それにしても、大多數の慢性病の病人は餘りに得手勝手です。譬へば、咳嗽をしたり痰を出したり、食慾の進まぬ場合には、煙草を喫むことは大毒なのですが、多くの病人は禁めても、諫めても、いろ〳〵な理窟を附けて喫み續けます。喫煙家の理窟は大抵きまつて居まして、或は商賣の掛引に一寸一ぷくが何とも謂へぬ効能があるとか、或は食後に一ぷくは消化を助ける爲めだとか、酩いのになると、煙で肺の黴菌を殺すなどと申します。而して、それなれば商賣の掛引の時や、食後だけに喫むのかと思へば決してさうではなくて、一日の中に數島三ッ四ッもあけて仕舞はうといふ手合の言ひ草がそれなのです。——これは如何にも憎らしい言ひ方ですが、私は此のやうな手合には同情を持ち兼ねるのですから、ひとりでに憎らしく言ひたくなるのです。——私は今内地に於ても可なり大勢の西洋人——主として獨逸人——

を識つて居りますが、例へば私共が主人側となつて此人々を招待することがあるとして、食事の前の待合はせの間に煙草を薦めるとしても、『食後に戴きます』と云ふ風で、大抵は手をも出しません。さうして、これが皆病人ではない、達者な人々です。日本人の多くの喫煙家が、禁煙電車が終點に、着かない前に卷煙草を咥へて、燐寸を片手に持つて、電車を一足踏み出すや否や、火を摺つて居るといふ意地の穢ないのとは、比較になりません。

諸君。眞の養生の始まりは不養生をしないに在ります。あらゆる不養生をしながら藥を服んだり、滋養物を喰べて見たりしたとて、是が養生とは言へませぬ。併し私は今日新聞階級の諸君に向つて誰も詰さずに、唯『煙草や酒をお廢めなさい』とは申しません。そこで一ト通り煙草とアルコホルの害を申し述べて諸君の御得心を得たいと思ひます。

諸君。煙草の害は第一煙で以て口腔、鼻孔と氣管並に肺迄を刺戟する害と、第二

煙脂の中に含まれるニコチンを主とする種々の有毒成分とが主ですが、紙卷煙草ではその外に、紙の煙が亦可なり強い刺戟性と、全身の血管に有毒作用を持つてゐるのです。

それで肺患のある人又は其他の人に對して、何のやうに有害なのかを申して見ませう。

煙を吸入すれば煙草の煙だけでも、紙卷なれば猶更の事、呼吸器の粘膜——口腔鼻孔、氣道、氣管、氣管支並に肺の最も奥の部分迄の内面をなして居る、大切な細胞層を——刺戟して之を傷けますから、その粘膜が多かれ、少かれ病的になつて、異常の分泌物を出します。是が集まつて咽喉の部に上がつて來れば、咳嗽が出て痰となつて咯き出されます。諸君、日常接する方を注意して御覽になると、煙草を喫人て咳嗽をしない人は滅多にありません。さうして一つの咳嗽をすれば、其咳嗽が又氣管や肺の粘膜を刺戟するから、重ねて痰を作る元となり、從つて咳嗽の原となります。

これだけの事は病人には限らず達者な人でもあるのですが、之れが病人となると此咳嗽と痰を作ることは世にも怖ろしい害があるのです。——劇しい咳嗽が肺病に特別に有害なことは別に説明を致しませう。——兎に角喫煙は達者な人にても痰と咳嗽を起こすのですから、病人の爲めに悪いことは知れたことです。

ニコチンとその外の煙脂の溶解成分は、詳しい事は申し切れませんが、身體に向つてザット二た通の悪い作用をもつて居ます。一つはニコチンが氣管等の粘膜から、口中の唾液に溶て胃に降つて體内に吸收されますと、心臓に行つて心臓の筋肉と神經を害します。そこで心臓の機能がひどく弱つて參ります。肥滿して堂々たる外觀を有つて居る人で、煙草を喫むが爲に咳嗽と痰に苦しみ、心臓が弱つて居る爲に人並に道を歩くことも、家の階段を一息に登り切ることも、心胸が苦しくて出來得ない樣な人が澤山にあります。病人で胸苦しいといふ場合も、大抵は心臓の衰

弱が主なのですから、咳嗽をする病人や、心臟の弱つて居る人に、煙草の有害な事は申すまでもありません。今一つは煙脂が唾液に溶けて胃に嚥み降されたときに――ひどい喫煙家はよく處構はずに唾を吐き散らして隨分厭なものですが、幾ら唾を吐いたとて煙脂が胃に降るのを防ぎ切れるものではありません――胃の粘膜を刺戟し、傷けて、食慾不振の元となり、消化不良を起し、時には下痢さへも起します其外時も選ばずに喫煙すれば、無用の時に大切な唾液を出してしまつて、食事の有用な時に渇れて出なくなるから、ます〳〵消化力を失ふことになり、身體衰弱の原因となります。消化を助けどころか、お話しにならぬ害物です。また煙で肺の黴菌を殺さうなどとは以ての外です。肺の黴菌はそのやうな生優しい相手ではありません。若し黴菌を殺す程煙草を喫まうとならば、黴菌も死にもしませう　が、黴菌より先に煙草喫む人間が燒かれる覺悟が必要です。大笑ひなものではありませんか。

つぎはアルコホルの害です。

6＝葡萄酒は血にならぬ

若アルコホルのあらゆる害毒作用を、個人の體に就て、社會道德に就て、精神的に生理的、病理的に說明しようとならば、一冊の尨大な書物が出來るでせう。併しそれは差當り私の目的とする所ではない。酒害に關して詳しい記述を見たいと思ふ人々は、片山國嘉博士著『酒害の眞相』を讀まれたらよからう。そして私は私の目的に急がう。今私はあらゆるアルコホル含有の飲料をひつくるめてアルコホルと申します。日本酒は素より、ビール、葡萄酒、シャンペン、味淋、燒酎、コクテール、リキユール、ウヰスキー、泡盛、ベルモツト一切のものは、高いのは四〇パーセント低きも二パーセント位のアルコホルを含みます。而して人の之を飲む目的は、アル

コホルの中毒作用によつて所謂陶然たらん事を欲するからでありますが、此陶然は非常に屢々之を通り越して仕まふものであつて、危險も從つて甚しいのです。

肺結核の際に最も怖しいアルコホルの害は喀血を誘發することです。アルコホル性飲料はいろ〳〵の有害作用を有する中に、呼吸器の粘膜並に肺の充血を起して、刺戟と煩衝を造りますから、必ず咳嗽と痰を出す元をなし、また突發的に血壓を昂かめるから、非常に屢々喀血の直接の原因となります。私共が日常遭遇する『初期喀血』は大抵は酒類を飲んだ後の夜中又は翌朝に出て參ります。

『初期喀血』と申しますと、それ迄何も病氣といふことに氣附かない、外觀健康の人が突然右のやうな場合に咳嗽をして痰を出し、それが血であるのを見て初めて醫者の門を叩いたらば、肺に故障があると診定される場合をいふのです。この樣に酒を飲むことは、格別病氣でもなく、前にも述べた通り一生知らずにても濟んで仕まふ程の肺結核を、忽ちにしてホントの病人にする程の害があるのですから、既

に病氣になつて居る人々に取つては世にも怖ろしい毒物なのです。

事實私共の取扱ふ病人達で、思ひも懸ず大喀血を起して來る樣なのを、よく〳〵問ひ質して見ると、内々で一寸一杯やらかした場合がしば〳〵あるのです。或は又親類や友人達から滋養物としてお見舞に葡萄酒を貰つて、ホントに大した滋養になるかの如く考へて、ツイホンの一杯試みたといふやうな時に喀血を起して來ることもたび〳〵あります。

諸君、喀血はもと〳〵肺の病變の輕重に拘らず出て來るもので、病人自身の氣持を非常に惡くするものであり、醫者から見ても可なり氣遣ひな病狀なのです。隨分重い肺病でも、しまひ迄喀血のない人もあるが、肺の病氣が輕くとも隨分大喀血を起す事があるので、喀血が大きいと急に病氣が擴がつて重體にもなり、事によると、平氣で仕事でもしてゐたやうな人が、突然大喀血を起して、その爲めに窒息して死亡したり、或は脱血といつて餘り多量の血液を失ふ爲めに急死したりすること

があります。咯血に就ての注意と養生法を私はまた後に申しますが、兎に角この容體は成るべく起らないやうに注意しなければならぬのですが、私の見るところではこれは大分アルコホルに罪があると思ふのです。その一の證據として咯血は女子や子供には非常に稀で男子の大人に多いのでもこの關係が判ります。だから、

肺に病患を有つ人は輕重に拘らず酒類を口にすることは禁中の禁物です。

それに就て私の常に心憎く思ふのは、酒類殊に葡萄酒商人の狡猾奸譎なる販賣廣告です。酒類の販賣廣告法にも種々あるとして、葡萄酒などを滋養强壯劑なりと稱する一點だけは容赦がなりません。私は新聞や電車内などで、そのやうな廣告を見受けて、その多くは怪しげな混成の葡萄酒が、種々の點に於て世間を毒する外に、肺を思ふる人々をも毒害して、咯血を起さして、病人を苦しめ、醫者を苦しめて居るであらう、と思ふたびに肌に粟を生ずる心持がします。元來葡萄酒を特に滋養强壯劑なりときめて仕まつたのは何時頃何人が云ひ出して、これほどに世間の人々の

頭に滲みこませたものかと私は不思議に堪へません。西洋各國では葡萄酒を滋養劑だなどと思つてゐる者はないので、恐らく日本人だけの考へらしいのです。私の推察する處では、初め西洋人が葡萄酒を輸入して來たのですが、日本人が之を飲まないので、販賣の口實として滋養物として吹聽し始めたのであらうと思ひます。それに恰どその色合が血に似かよつて居て、如何にも飲むだけ血になる樣な氣持がしたので、一般にさう信じられるやうになり、そこに奸商共が附け込んでます〳〵そのやうな考へを誇張させてしまつたのでせう。夫に一層怪しからんのは耶蘇教の洗禮などにまで、『この一杯の葡萄酒は父なるイエスの尊い血潮であり、この一片のパンは云々』といつたやうな愚劣な使用法を敢てしてゐるやうな始末で、いよ〳〵以て莫迦な考へを浸潤させて仕まひ、葡萄酒は肉と卵子に推し並んで滋養物たる金看板を贏ち得るに至つたものと思ひます。

成る程醫者は目的によつてはアルコホル類を藥品として使用する場合はあります

しかしアルコホル劑としての葡萄酒は日本酒の上等品などに較べて、何も特に優秀な値打のあるものではありません。況んや醫藥はその使用法と用途と、量とを誤らねばこそ藥劑なのですが、之を誤れば藥物は全部毒物なのですから、そこの區別を辨まへずに無暗に葡萄酒などをあほるとすれば命知らずといふものです。

兎に角葡萄酒に限らず酒類、アルコホル飲料全部は何等滋養物としての價値が無いのみならず、殊に肺を思ふる人々には非常に屢々怖ろしい咯血を誘發しさ、なくとも疾を造る素となり、從つて咳嗽を劇しくし、咯血をも起こす大毒物である。

7＝知春期と結核病

青年諸君。モット詳しくいへば、肺や肋膜、胃腸等に慢性の病氣を持つて身體の

扁弱なることを苦にしてゐる青年男女諸君、並にその樣な青年男女諸君の兩親や親族達。私は青年男女諸君を特に尊敬し、愛好し、諸君に親みを持ち、諸君を羨ましく思ひ、生存競爭の爲に索莫たりける自分の青春を愍れむと俱に、麗かなる諸君の青春を脅かす害敵を憎み、再び來ることなき諸君の現在を出來るだけ幸福に且は充溢せる希望を以て過させたいの婆心から、今日は特に諸君に關して語らうと思ふ。

諸君、丁度この頃は新綠の若葉に害蟲が附き易いと同じやうに、知春期——普通にいふ春機發動期の——男女は結核の發病と非常に深い惡緣を持ち、屢々性の惡い結核になり易いのである。加之、人生五十年中一番養生をするに都合の惡い時期である——。イツの間にやら言葉が六ヶ敷なつてゐた、しかしまゝよ此儘行かう。——

人間の知春期は身體的にも精神的にも最も不安定な時期であつて、殊に結核性の病氣がこの時期に特に發病し易い。其眞因は未だ十分明かではないが、多くの學者の信ずる所では、生殖腺の發育に關係があるものゝ樣である。少くとも年齢的關係が

それに適合して居る。だから恐らくそれもさうてあらう、併し結核性疾患の發生が生殖腺の發育に關係があるといふことは未だ的確な證明はない、縱し是れありとした處で、その爲めに生殖腺の發育を止める譯にも行くまいから私は今日は此問題に深入りすまい。

それよりも、もつと明かな、見逃すことの出來ない問題て是非共諸君と語つて置かねばならぬことがある。それは『學校と慢性病との關係』てある　現行日本の學制が小學から大學を通じて一年一進級制てある事には、私は永らく二重の不都合を感じて居る。殊に身體の弱い人々に取つては是れほど不都合な制度はないと憤慨して居る。この不合理なる制度を打破しなければ請君の生存權は自由なりとは云ひ難い。一年一進級制度が一方に於ては駿馬をして驢たらしめ、他面に於ては弱い身體を有つ青年男女を傷なふとは實に夥しいと思ふ。私はこの年級制の犠牲になつた、世にも氣の毒な青年男女を澤山に知つて居る。若し春秋の筆法て行くならば、『教育

は人の子を殺す』と謂はねばならぬ。少し激した書き方であるが、私はいろ〳〵な意味に於て此年級制を呪ふものてある。元來この制度は歐洲の中世紀からの持越品てあつて、個性を認めない點に於て制度として既に黴が生えて居る所のものてある。早晩此制度は是非改善せねばならぬものてはあるが、このやうな改造は矢張り黴の生えた現代の政治家などの腕ては到底出來る譯のものてはないから、已むを得ず青年諸君の結核問題も現在を基調として語らねばならぬ。

諸君、諸君にして不幸にも現に肋膜炎や、肺尖加答兒や、慢性頑固な胃腸不振症に惱みを持つ人があるならば、躊躇することなく、逡巡することなく、醫師の忠言に傾聽して斷然として愼重なる生活に入り給へ！諸君が學校に行くが爲めに熱を發したり、疲勞を感じたり、咳嗽を起し、痰を出し、若くは月經不順にして身體が萎疲るかつたりするならば、飾らざる診斷を醫師に仰いて、萬一にも呼吸器に故障あるとを知るならば、決然として愛生の生活に移れ！此際徒らに惡むべき學級制の

囚はれとなつて逡巡し、渾疑し、彷徨し、躊躇することは、懸け換へのなき生の幸福を自ら好んで抛擲するが如きものである。このやうな危急存亡の秋に方つて諸君を誘惑し、諸君を脅迫し、苦しましめ、苛なみ、あらゆる殘忍を恣にするものは例の學級制であることを忘れ給ふな！

私は今や學年の初めにあたり、若くは二三月頃進級や卒業の間際に入つて休養の必要を醫師から聞かされた塲合の諸君に對して洵に同情の涙を禁じ得ないものである。併し青春誰しも覺えはある、青雲の志を抱き、若くは多幸なる前途を有つて、出てては天下の後事を負うて立ち、入つては多望なる家庭の若木として、蚤にも螫せたくない國家の至寶たる青年諸君が、瑣かな理解と斷然たる決心とを缺いて唯一歩を誤るが爲に、紅涙渦く暇もなき重病の床に呻吟して、可惜青春を病褥の間に過さなければならぬやうになることを思へば、私は層一層の涙を以て諸君を眺めなければならぬのである　諸君、諸君が未だ病氣身にあることを氣附かない前なら

ば之は致し方がない。苟くも靜養醫治を要するの病氣となつたならば、多望なる自身の前途の爲めに、多幸なる家と父母兄弟の爲めに、將た又國家と民族若くは世界人類の爲めに、貴重なる諸君の生涯を一旦の失策の爲めに失はぬやうに注意しなければならぬ。青年は人生の春であり、花であり、裝飾であり、光る玉である。青年の身體を不注意に壞し、生命を無意義に消耗することは、啻に祖先と父母兄弟に對して相濟まぬばかりでなしに、生物共存の理に悖り、人類共棲の掟に背くものである。

『身體髮膚は之を父母に享く、敢て毀傷せざるは孝の始なり』と古人は言つた『生を愛し、自らを重んじ、他を益して天壽を全うするは人の生れ出てたるの目的なり』と新生物學は訓へる。

乃て諸君。諸君にして若し不幸慢性病たるの診斷に服しなければならぬならば、願はくは速に明かなる理性の判斷を喚び給へ。さうして卽日敢然として專ら先づ病魔と闘ふの勇氣と決心を振起し給へ。此際誤つて逡巡遲疑して苟くも時期を失す

ることは眞に禁中の禁である。

試みに思ひ給へ。弊馬に重荷を積んで之に鞭つ者あらば賢明なりとは思はれぬであらう。乃ては徐に積載を脱し、梏桎を外して、水を與へ、秣を給して慰撫休養せしめたる上、勢力と勇氣の恢復を俟つて、再び捲土重來の謀を成すに如くはあるまい。

併し諸君。人々各々自己の特別の都合があり、周圍の事情が違ふ。況んや諸君は既に多くは子供ではないから、各自の自由意志を有つて居る、さうしてその都合と自由意志とに從つて行動したいであらう。併し諸君、知春期附近の呼吸器病は至つて危險である。徒らに諸君の自由意志と四圍の都合とに拘泥することは危險此上もない。是非共諸君は誠意あつて詐らざる醫師の言に聽かねばならぬ。

さは言へ諸君は、天下の後事を擔ふ大切なる青年諸君である。何時と限りもなき醫療の生涯に晏然として居る譯には行かぬことは知れてゐる。是處が私の諸君と倶

に語らんと欲する核心である。諸君。初期呼吸器病の治療は、眞にそれが初期であるならば、大抵一箇年で澤山である。

諸君。一年の歳月は長くして短い。一生に比して五十乃至七十分の一である『急がば廻はれ』は古くして今尚生きた詞だ。此一年を誤つて弊馬に鞭つの愚をなすならば、折角生を享けたるの幸福は多望なる未來を殘して覆滅するであらう。茲に覺醒して敢て一年の眞養生に入り、急がず、あせらず、醫治を信賴して、悠々として生氣を恢復するの態度に出るならば、諸君の生涯は誓つて幸福である。初期の結核を治すには現代の醫學は確然たる自信を有つてゐる。結核は病理學上生物學上證明された治癒性の病氣である。之を治さずに仕まふのは其非病菌にあらずして、生を愛しないその人に在ると云はれても抗辯の餘地はあるまい。私は、それにつけて一の病例を擧げやう。

8　N君とそのお母さん

小學校から七年の昔中學の五年級になる迄、今では立派な理學士で、未來の大學教授を囑目されて、某大學で猶研學中の兄さんよりも成績が優れてゐたのでN君は殊に兩親の祕藏兒であつた。姉さんと妹さんがあつたさうだが、不幸二人とも夭折したので、現には二人きりの同胞である。中學でN君は制規の體育法として擊劍をやつた。柔道もその學校で矢張り制規の體育法であつたが、N君が擊劍を選んだのは生來少々細地であつて身輕い運動を好んだためであつたさうだ。痩地の人が擊劍を好み、太宍の人が柔道を選ぶ傾きは大抵な場合にさうであるが、無難な時は先づそれでどちらでもよい。

中學五年の初秋であつた。N君は風邪の氣味で、恐らく多少の熱のあつたらしい日に推して登校し、一週間後に迫つた對校試合の稽古を勵んだ。折惡くその時自分より餘ほど強い相手に對つて右の脇肋に強かなお胴を續けさまに二本喰つて、殆ど眩暈を起して卒倒せんとした位であつたが、やつと我慢して、稽古を終つて歸途に就いた。人間運の惡い時にはいろ〳〵な不幸が重なるもので、途中で狹い四ッ辻を通つて行く際に、韋駄天のやうな伸がN君の避ける方に梶棒を持て來て、終にそれと衝突し、竹刀を喰つたとおなじ右側の脾肋を太かに撲つた。

竹刀を握つて渾身の力を揮つてゐる時には縱令氣息の止まる程なお胴や、お面を喰つてもさほどにこたえるものではないが、不意な時には平手を喰つても眩暈を催したりするものである。N君は其日は既に無理を推して烈しい稽古をし、疲勞は一層で、運ぶ脚も捗々しくない折柄、不意に、而かも竹刀を喰つたとおなじ側の脾肋にひどく梶棒を打ちつけられたので、一時にぐら〳〵と來て卒倒してしまつたので

ある。さうして、兎角して附近の人と警官の世話とで我が家に送り屆けられて歸つて來たのであつたが、その晩から高熱を發して右側の急性肋膜炎に罹つて仕まつたのである。

N君の肋膜炎がその日登校擊劍の稽古をする前に既に始まつてゐたか、お胴を喰つたために起つたか、俥の梶棒で撲つたために起つたかは醫者とて之を明かに知りやうはないが、兎に角惡い誘因が運惡くも重なつたものといはねばならぬ。しかし、その遠因はN君が子供の時に麻疹の後て一年以上も非常に弱かつたのと二人の同胞が夭折したのに見ても生來すでに割の惡い體格の持主であつて、何時の間にか病毒を享けて、肋膜あたりに多少の故障を起してゐたものと見なければならぬ。原因の詮索は兎に角として、N君は約二箇月の間病床の人となつたが、幸に經過良好て三箇月足らずの休學て再び登校することが出來るまてになつた。

が、この『三箇月未滿』の休學てはN君の健康は未だ十分に恢復して居なかつた。

さうして、此際體操と運動だけを休んてといふ條件附きて通學したのは、N君に取つて、仕てはならない第一の無理てあつた。

N君は當時中學五年の十八歳て人生の氣樂な盛りでもあつたし、それに重い病氣が突發したので、學校の事など深く氣に懸けて煩悶する暇さへもなしに病床の人となつて仕舞ひ、病氣が快方に向つて、普通なればそろ〳〵學業の後れるのを氣にかける頃になつても、日頃秀才の自信は難有いもので、比較的悠々と養生をした方てあつて、その爲めに經過も意外に速かつたのてあつた。そして、其儘病後の恢復が完全であれば、N君の將來は、恐らく安全てあつたらうが、例の黴の生えた『一年一進級制』が惡魔のやうな誘惑の力を揮つて、先づ親切なる老校長を驅つて、N君の家に走らせ、『三箇月以上の休學は』來年の卒業の妨げになる、と云ふ譯てN君とN君の兩親の理性を奪ひ、通學に反對する醫師の主張を無理強ひに枉げさせて、N君を危險の淵に沈淪させる爲に、再び通學を始めたのは、折も惡い十二月も早中旬の寒

い時候であつた。そして、此第一の無理は、恰ど物が腐敗しかけると蠅がたかり、蛆が生じてます〳〵腐敗を促すとおなじやうに、非常にしば〳〵第二、第三の無理を生まずには居ないもてある。

N君は、秀才ではあつたが、三箇月近くの休學の後を以て他の學友と同速力で進まうとするには矢張り二倍の努力を要した。俚諺にも朝出た跛者には追ひ着けぬといふ。N君はこの後れを取り返す爲めに少々焦躁り氣味になつた。必要な運動は不足した、火鉢を抱へて室内に蟄居する時間は殖えた。これが私の言ふ『弊馬に重荷』だ。さうして一旦恢復に向つてゐたN君の榮養は瞬く間に悪くなりかけた。生來少過敏な神經はいよ〳〵衰弱に傾いた。しば〳〵安眠は妨げられて、朝の枕は重たかつたが、それでも勉強家のN君は毎朝霜を踏んで學校へ行つた。さうして繰かへし風邪を引いて咳嗽の歇む間はなかつた。年を越えて一月の末になつたが、N君の血色はいよ〳〵悪くなり、身體の痩せは目立つて來て、毎日輕い熱は絶えなくなつ

たが、あと二月ばかりて卒業期が迫つてゐるので、無理に推して學校へ通ひ、頭と體を虐使し續けた。

此狀態を早くも危險と看て取つたN君のお母さんは、醫者の注意を良く訊いて來るやうにたび〳〵N君に吩咐けたが、『自身に醫者の門を叩いてN君の容體を訊ねて來ることをしなかつた』ので、たび〳〵一切を拋つて保養することを勸めた醫者の忠告は、お母さんには通じなかつた。學級制と卒業といふことに囚はれ切つて居るN君は、醫者の忠告に、初めは恐る〳〵、後には反抗的に耳を塞いで、元より、學業にのみ盲進したのであつた。

N君のお父さんは、よくある型の人て、多忙な業務と社交と、生れ持つた呑氣とて家庭はホンの寢るだけの宿てあつて、子供や家政の一切は妻君任せの人てあつた。人の子の父としての此態度には私は感心しないものてはあるが、之は現代社會的の通患であつて——國を醫するの大醫ならざる——醫者の取扱ふ病氣てはないから、

私は今は此お父さんに迚を向けることをやめる。だが、N君のお母さんは私の默して已む事の出來ない通弊を有つてゐた。夫はN君のお母さんの罪ではなくて、從來の醫者の『結核豫防に就ての誤つた宣傳』の結果であり、その誤つた宣傳は二三十年前の古い醫學に根柢を持つて居るので、詰り誰人の罪といふことの出來ない性質のものではあるが、N君のお母さんは醫者の閾を跨ぐことが殊更に嫌であつた。

9＝結核恐怖病

N君のお母さんは醫者の閾をまたぐのが嫌ひでした。

その譯は、N君のお母さんは所謂蒲柳の質であつて、廿歳の時に出來た長男は無事であるが、二番目に出來た娘と四番目の子供とは氣の毒にも夭折した程の弱い體

質であつたし、三番目がN君であるからお母さんの體質が實は餘り良くなかつたので、年中蒼白い顏をして家の内に閉ぢ籠つてゐる人であつて、何時か風邪の時に或醫者から肺尖が惡いらしいやうなことを言はれた事もあつたし、年中チョイ〳〵咳嗽などもするほどであるので、詰り、自身に輕い肺病を有つてゐたのであつたが、醫者と顏を合せると、ツイした事で自分が『肺病だなぞと言はれる』やうなことになりはしないか、或は醫者の門を潛ぐる内に『他人の肺病が傳染りはしないか』といふやうな考へが常に胸中に潛在してゐたので、N君の身體の事は始終氣にかゝり、心配はしてゐながら、N君が學校の歸りに醫者に通ふのに任せて、自身には決して醫者の意見を訊く爲めに出掛けなかつたので、N君が態と醫者の忠告を隱してゐることを知らずに過し、一方には、可愛い息子が日に日に惡い運命の淵に沈んで行くのを看過したのみならず、自身に取つても危險極まる無理解な月日を過してゐた。

N君のお母さんが有つてゐた、この一種の變態心理――現代の智識階級に可なり深く浸潤して居るこの『間違つたる結核恐怖病』、さうして、その結果『結核といふ病名を附けられることをのみ惧れて、身にある病氣を怖れず』に過ごすこの心理狀態――と、すでに『自身に其病氣を有つてゐながら他人の病氣が傳染りはしないかと思ふ』考へは、一般の素人が、殆ど殘らず罹つてゐる通患であつて、その考へが間違つてゐるために、自身に病氣あることを知つてゐながら、初期の間に醫治を受けるの日を延ばし、從つて大切な治療期を逸して仕まひ、いよ〳〵といふ際まで無理を推してゐて、取り返しが附かなくなつてから醫者に診せて、扨てこそ、往々、所謂『死刑の告告』を受ける元となるのである。そこで私はこのやうな間違つた考への人々が速に正しい理解に歸り、間違つたる結核恐怖病から救はれなければならぬと思ふが爲めに、此際是非とも一應その說明をしておきたいと思ふ。

諸君　結核恐怖病は實は日本にばかり流行するのではない。が偶現代の日本に

於いて殊更に猖獗を極めてゐるところのものである。その遠因は申す迄もなく、結核病が怖ろしい病氣であるからであつたが、その近因は、その實體それ以上に、結核を怖れさせた結核豫防法の宣傳がそれである。

結核に罹つて死亡する人々は日本だけでも年々十萬人からもある。赤痢や、チフスはおなじく傳染病であつてもその數は非常に少い。結核で斃れる人が多いから結核は怖ろしいものである。だからしてこれに罹らぬやうに用心せねばならぬ。といふのは寔に御尤もな宣傳であつて一應は世人に知らせておかなければならぬことではある。だが、それが爲に、その年々の十數萬人が結核に罹つた人の全數であり、それに罹つたが最後、再び達者な體に復る事の出來ないものであるかのやうに吹き込んでしまつたことは、結核豫防宣傳の大なる手ぬかりであつた。それで一般の世人はその病氣を怖れ過ぎるの結果、病氣の名前までも怖れるやうになつて、肺病の三期になつてゐることは自分に朧げながら知つてゐても、醫者が唯ホンの氣管支炎

ですなどゝ――いろ〳〵な事情で――識つて胡麻化してゐても、その方を喜んでゐたり、肺病の爲に全身が衰へて、食慾が振はなくなつたのを、胃腸が悪いせいだと説明されるのを自己安心の綱としたり、神經衰弱だと知らされて、マアまだ勝しぢや、などと思つてゐたり、酷だしいのになると、N君のお母さんのやうに醫者の闕を跨ぐのも嫌ふやうになるのである。さうして、始終肺病恐怖を胸に抱いてゐながら、強て一時の安心を買うて身體の無理を續けたり、不適當な攝生に日を送り、大切なる治療時期を逸してしまふのである。譬へて見れば、自分の家が火事で盛んに燃えてゐるのに水の一杓もかけやうともせずに、イヤあれは火事ではない、火事だなどゝ、そんな怖ろしい事を言うて呉れるな、といふのとおなじ事だ。結核病はしば〳〵自然にも治るところの極く性質の善い病氣であるとは言へ、所謂疾膏肓に入つては癒り難くなることも致し方があるまいてはないか。

だが、今迄のところ、それも無理はなかつた。このやうに悪い考へを浸潤させた

のは、前にも斷つたやうに、結核豫防宣傳に、落してはならない手ぬかりがあつたし、その手ぬかりは、二三十年前の醫學自體が餘りに結核病に脅かされてゐて、これを料理するの途を丸で知らなかつたからであつた。

しかし、今後はさうではない。結核病は、繰り返しいふやうに、極く善性な、治り易い病氣であり、可なり進行したのでも、良い養生と、適當な醫治を續けるならば、屢々完全に治癒する病氣であつて、早期に良い手當を加ふるならば、必ず容易に全治するもので、病氣として氣附くや否や、速かに養生生活に入れば、早ければ早い程、迅く且完全に治癒する者であるから――肺病を極初期に知るの徴候を私は話の混雑を防ぐ爲めに遺憾ながら他日に殘さなければならぬ――肺病だとて、是を怖るゝ必要はないは元よりのこと、病名を附けられることを怖れるなど毛頭必要がない。結核は人間の誰でもが有つてゐるものであるから、君は肺病であると言はれることは、君は人間だネといはれるとおなじことであつて、恐れることでも卑下する

ことでもない。だから身に病兆のある人は一日も早く醫治を受けて、なるだけ之れを早く治す心掛にならなければならぬ。壁にあいた雨の孔を早く繕らうことは、時間的にも、經濟的にも、全體の家屋の維持にも心要不可缺てはないか。

疾病の芽はこれを嫩にして苅らざれば終には斧鉞を須ふるも及ばなくなる。

10＝ 傳染させない用心

諸君。今一つ世間の人々がN君のお母さんとおなじやうに間違つた考へに陷いつてゐることは、

『自身その病氣でありながら、他の人のおなじ病氣が自分に傳染しはせぬか』と氣遣ふことである。少し意地の悪い譬を用ふるならば、これは猿の尻笑ひといふものてはありませんか。――私は話に實が入りすぎて、チト固くなり過ぎたやうてしたから、これから文章も解說も少し穩かな調子にかへりませう――實際にさうてす。ですが、この言ひ草は醫者として聊か冷やか過ぎるやうてした。實は素人の方としては、自分に既に病氣がある、それに若し他人の病氣が傳染するならば、兎角して保つてゐる自分の體は、より以上に悪くなるてあらう、だからして他の病人の集まる所へなぞ行かぬに限る、といふ考へは一應ご尤も千萬てす。ですが、この考へ方は間違つてゐます。

なるほど、譬へて申せば、腸チブスの人が肺炎に罹つたり、糖尿病の人が瘍や疔を患らうことは、重い病氣が重なるのてありまして、醫者の辭て申せば重病の合併症てすから、之は出來得る限り避けなければなりません。しかし、おなじ病氣が、その病氣の經過中に二度三度と他から傳染するものてはありません。――結核の重感染といふ問題は學者仲間てはいろ〳〵議論のある問題てはありますが、私は免疫學

上の立場から考へて、一日此病氣になつてゐる人は、他から傳染する事は無いと信ずる一人であります――ですから結核に罹つてゐる人は、自ら早く病氣の身に有ることを知つて、自分に適當な養生を早くすることが非常に必要であり、自分の病氣を他の無病の人々、殊に子供に傳染させない用心をすることは絶對に必要ではありますが、自分の病氣の上に他人の同病が傳染しはせぬかと氣遣ふ事は、全然その所以がないし、その心配の必要はありません。矧んや、その心配の爲めに、醫者に診せたいやうな心持を永らく有つてゐながら、醫者の所へ行くのを躊躇して、彼の大切な治療時期を後れさせ、逸してしまふ事は、その人本人に取つて取り返しのつかぬ損失になります。繰りかへし申しますが、病氣と壁の雨孔は、手當が早ければ早い程、速く、手輕に、完全に直ります。

此所で話はN君とそのお母さんに戻ります。

N君の健康は中學五年の二月に入つて險惡になつて來ました。ある吹雪飛ぶ日の

午後寒風を冒して歸つて來たN君は其晩からトウ〳〵再び病床に身を横たへねばならぬ氣の毒な狀態になつてしまひました。これには道が呑氣なN君のお父さんも當惑したのでしたが、それよりも息子の病氣を半ば吾が身の罪の如くに考へたお母さんは、今更のやうに愕いて、さなきだに弱い體軀を提げて晝夜を厭はずN君の看病に努めましたが、誤つて惡い運命を作つた此家庭の不幸は乘數のやうに殖え重なつて行きました。――私は小説を書く積りではないから、此悲慘なる事實譚を大いにはし折つて記さう――三月になりました、N君の家には二人の重い病人が出來ました。家の事一切はお母さんのお母さんに面倒を見て貰ふことになつて、二人の看護婦が附き切りて病人の世話をしました。N君は此間に荐りと學業を氣に病んだが、それはすでに可能の境を越してゐました。一家悲慘の極に在つた三月にはN君の病氣は肺病第二期であり、お母さんは第三期の初まりで、それに腸結核の疑ひがあるといふことでした。危險といへば眞に危險の極みでしたが、幸なことには此家庭

は今は全く『理性』の支配する所となつてゐましたからして、五月には『一家を擧げて郊外に轉地』して、專ら此惡運を追ひ拂ふことに力むることになりましたが、素より之も醫者の進言に依るものでありましたが、その外の生活法や治療法に就いての注意は徹頭徹尾嚴守されましたさうて、大學の暑中休暇でN君の兄さんが歸つて來た頃には、N君の方は既に餘程快くなつて居り、十月には再び稍活潑に山野を跋渉する事が出來る身となりました。N君の身体が恢復するを睹て、お母さんの氣分も其後大に改まり、嚴重な食養生を守つた甲斐があつて、腸結核の容體もおひおひに快くなりました。N君は其後いよ〳〵本當に全快して翌年三月には矢張り優等で中學を卒業し、其年高等學校に進み、明年は大學を出ることになります。N君のお母さんも其後非常に達者になつて、唯今では病中の飾ろしさ、その前程の愚かしさを昔し噺しにするやうになりました。

11＝ 咯血の養生とその豫防

諸君。咯血は何も肺結核に限つて出て來る容體ではありません。重い心臟病でも度々咯血をする人もあり、急性の肺壞疽では殊に屢々大咯血を起すことがあります、急性肺炎でも劇症では咯血をすることもあり、肺ペストでは往々純血のやうな痰を出します。又塲合によつては衂血を咯血と間違へて居ることもあります。併し咳嗽と一緒に出る血を見た塲合には九割九分迄肺結核の咯血と見ます。

普通に咯血を非常に怖わがるのですが、勿論咯血なぞ無いには越した事はないとして、咯血は實際左ほど怖わがるには當らないものです。

咯血をした素人の方々の樣子を見てたび〳〵感ずることがあります。マア譬へて見

れば、知らぬ夜道を一人で歩いて居る時に、想像して居るお化の大入道でも、眼の前にちら〳〵するやうなものでせう。さうして、はては自身の影や跫音までが身の毛を悚起てる程になるやうな風に懼れ戰いて、周章てさわいだ心地になるやうに見受けます。無理もないことです。眼に見える手足や、皮膚の何所かに少々の創傷を受けて出血したとて、さまで愕く事はありませんが、喀血ばかりは、何所にドノやうな創傷がついてゐて、その上ドノやうに大出血を起して來るのやら、薩張り當人には判らぬのですからネー。その上に喀血は多くの塲合肺結核の確徵で此診斷が定れば例の不治病の宣告のやうに思はれて居たのですから、怖ろしさに迚もかゝつてゐます。

ですが喀血はさほど怖ろしいものではありません。直接喀血の爲めに窒息したり脱血して死ぬる人といふものは事實滅多にないもので、私共の刀根山療養所のやうな重症の人々の多い病院でも五六年このかたに、喀血の窒息死には殆ど出遭つたことがありません。私は先頃去る同業者に吾々の所では喀血死といふものは無いといふ話をしたところ、その醫者さんの曰くには、それは手當が良いからであらう、といつて褒められたやうな氣持になつて居たのでした。が、事實は必ずしもそればかりではなくて、大喀血を起さない主な理由は、病院では病人の方が心掛が良くて、喀血があつてもあはてないからです。事實喀血死は大抵咀嗟の塲合に起るもので、手當の暇なぞはない筈のもので、醫者の手當が善いからといふのは半は嘘です。それよりも、『何時でも良い手當をして貰ふことが出來ると思ふ安心』が此際一番の良藥であり、卽ち喀血の際にはあはてないのが最良の手當なのです。身も心も平靜にして居ることが喀血には無二の治療法なのです。よく、世間でも何か自分に都合の悪い事柄が突發した際に周章てさがすので、却て事柄を惡化させて、事業家などでは往々その爲に再び起つべからざる創痍を負ふさうですが、病氣に罹つた時でもそれと同じで、喀血の時は猶更に沈着でなければなりません。

咯血は肺の何處かに創傷が出來た爲めに起るのには相違ありません。けれども、その創傷は何も肺であるからとて特別に怖わい譯はないてはありませんか。試みに女中がお臺所で指先を傷つけた場合を想像して御覽なさい。その創傷をあはてまくつて、いぢくりさがしたり、又はかまはずに其まゝ無茶苦茶に使つて居ては、出血も止まらなければ、何時まで經つても創傷の治ることもありません。けれども、それを一寸括くつて、ホンの暫らく使はずに居れば間もなく血も止まり三四日も經てば、創も治つてしまふてせう。

肺の創傷とて全くそれと同じてす。殊に血液は血管の内を流れてゐる間は何時まても流動體てすが、一たび血管外に出ると速に凝固つて、後から出血するのを防止ぐやうに自然が仕て呉れてあるのてすから、創傷口を靜かにして動かさぬやうにさへすれば譯もなく止まつて仕まふものてす。それを知らない素人の人々は少しばかり紅いものを見ようものなら、コレは大變だといふ譯で、大周章てにあはて込

むのて、咯血に附け込まれて創傷の塞ぐのを永引かせるのてす。

唯一つ困ることは、肺の創傷は手先や、足尖の創傷と違つて繃帶をすることも、止血の藥を直接に附けることも出來ない點てす。しかし、血液が創傷口で凝固まつて呉れて、次いてその創傷が癒えて呉れさへすれば何の事はない筈てすから咯血の際と、咯血する虞のある人には次の養生を必要とします。

一、肺を震動させる行爲を慎むこと。

之は肺患者には一番大切て有效な養生法てあつて、咯血の時には一層嚴重に心得て置かねばならぬ點てす。私は後に安靜平臥療法の題て重ねてこの心得をお話ししませう。

所謂轉地療養といふ詞は、獨逸人は轉氣療養と言ひ、意味の上からどちらにも得失があり、文字は意味を十分に表して吳れないが爲めに、屢々不都合を起し、住い積りて行つた轉地が却て惡く酬いられることがあるので、今日はこの轉地療養のお話を致しませう。

戲曲にあらはれた蹠り勝五郎は脚氣を患つてゐたので、箱根山へ登つたのが轉地療養になつて、痺れてゐた脚が急に立ち、首尾克く仇を討つことが出來たのである といふ樣なのは、ありさうなことで、殊に低い濕地に發病した脚氣患者が高燥の山地に移れば速に快くなることがあります。そしてこれは文字通りの轉地療養の效能です。

肺患の人でも低濕の地よりも高燥の地の方が良いことは申すまでもありませんが肺患に必要なのは土地の變化でなくして、主に空氣の新鮮なのに在るので、土地は從て、空氣が主ですから、市内地や、狹い家屋などから申して轉氣といつた方が適

當でせう。從つて既に空氣の良い土地に住む人は、それから更に轉地する必要のないことは申す迄もありません。

普通新鮮な空氣と申せば海濱や、綠樹のある所で腐敗物の少い土地の空氣です。若しそれ、四季の變換が緩く穩かで、晝夜の温差極めて少い、白砂青松の地であれば理想的です。この點に於いて關西地方で六甲山一帶の陽側は日本隨一で、世界有數の健康保養の勝地です。空氣の成分は普通では百分比で

	酸素	窒素	アルゴン	炭酸
容量で	二〇、九九	七八、〇四	〇、九四	〇、〇三
重さで	二三、一九	七五、四六	一、三〇	〇、〇五

といふ割合ですが、その外工場地などでは隨分いろ〳〵な成分が混つて來ます。併し普通に空氣が良いとか惡いとかいふのはこの混り物の多少にも關係があります が、同時に氣候の變動の多少や、水分を含む多寡などに大に關係があり、その外に吾々の未だ十分識らぬ、自然の力——ラヂウムやトリウムなどの放射能？——がた

づさはつて、轉地の良しあしが定まります。併し實生活の場合では『酸素が減つて炭素が殖える』のが一番に悪い條件です。閉め切つた室内で、例へば監獄や、工場や、非常に大勢が狹い室に込み合つて寢る場合などでは、酸素が非常に減つて、炭酸が無暗に殖えます。酷い時には酸素の割合が十五又は十三などゝなる場合もあるといひます。そしてその反對に炭酸が增して來ます。人間一人は一晝夜の間に六百リートル、卽ち容量約三石、目方で約八百九十四グラムの酸素を攝り、同時に約二石七斗の炭酸瓦斯を造ります。子供は子供の體に應じ、家畜類も他の動物もそれぞれの體の大きさに應じて、略ぼ同樣の割合で酸素を費消し、炭酸を作つて吐き出します。

又新炭を燃き、瓦斯を燃やすにも著しく酸素を費し、炭酸や、酸化炭素などを造ります。其外普通の地中では物の腐敗がありますからして、隨分多量の炭酸が地中から出て空氣の中に混じます。――人間や動物の生活が、此點で、物の腐敗と一

緒てあるなぞは隨分厭な皮肉ではありませんか――そして是ばかりなれば、人間も動物も間もなく此世のおさらばですが、大自然の攝理は難有いもので、植物は是と全く反對に炭酸を攝り、酸素を吐き出して呉れます。そして世界中の空氣を交ぜては反へす役目をするのが空氣の流通卽ち風の作用です。大阪人の造る炭酸が北風では南洋の綠樹を養つて西伯利の酸素と交代し、南風では濠洲南米の酸素を輸入して炭酸を滿蒙曠野の草木に與へることを知つては、しみつたれた個人主義や、ひねくれさがした黨派心等と比較して、耻かしくもまた難有い、廣大なる自然の愛を感ぜずには居られないではありませんか。

このやうにして空氣は世界の平均を保つものでありまして、大阪の空氣とて全體の成分では郊外の空氣と大した變りはなく、一足大阪を放れるとすると、すでに西伯利や、南米大陸の空氣と餘り悪くない空氣に接することが出來ます。

衞生上から觀て病弱の人々、殊に肺患のある人々が、山紫水明の境、高燥濶望

の地に轉ずることは勿論大いに善いことであります。が併しこの轉地に就いて唯一つ忘れてはならぬ大切な條件があります。それは轉地は必ず『轉住であつて欲しい旅では不可ない』ことです。若し事情が轉住を許さぬならば、少くとも心持だけは轉住といふ落ちついた心持でやつて欲しいのです。

俗にも可愛い子には旅をさせ、といふやうに、旅は隨分不自由な辛いものです。旅の氣分を免れない轉地療養は決して療病養氣の援けにはなりません。私共はこの旅の不自由が折角恢復の途に在る病氣を惡くする實例に、非常にしば〳〵遭遇して、堪へ難い苦痛を嘗めます。ですから旅の轉地は寧ろしない方が可いのです。而して若し轉住の積もりであつても食物に不自由のない、風の荒くない、晝夜の温差の少い所を選ぶことが殊に必要です。達者な人の旅行と病人の轉地とを混同しないことが吳々も肝腎です。

空氣の話の序でに今一つ附け加へて置きたい事は、酸素とオゾーンとを混同してはならぬことです。酸素とオゾーンとは成分は同じですが、成分の組み立てが違つてゐるので、酸素は動物生存上不可缺であり、治病上には肺炎などでは酸素を吸入させたとけで、生命を取り止めたと思はれることもありますが、オゾーンは酸化藥として既に強きにすぎます。彼の海濱や針葉樹林の清淨な空氣にオゾーンが含まれてあるが爲に肺患や、病後の恢復に効き目があると思はれたのですが、實際はオゾーンではなくて、僅ばかりの過酸化水素があるばかりです。そしてその過酸化水素は酸素とオゾーンとの間位な酸化藥であつて、それすら餘り多量に空氣中にあることは強きに過ぎますが、普通には人體に有害なほどの過酸化水素は空氣中にはありませんから、隨つて淸淨な空氣は有効安全です。オゾーンは化學工業上には非常に強力な酸化藥として甚だ有用なもので、衞生上にも將來室内消毒などに用ひられるかも知れません。が、病床でオゾーンを發生せしめたりする事は有用でなく、却て有害で、病室には新鮮な空氣を通はせるだけで澤山です。從來學問と智識の不足か

らして誤つて此方面に力を注いで室内オゾーン發生器などを作つて居る商工業者がありますが、速かにこれは他の有用無害な方面に用途を轉向せしむることが賢明です。私は生物學の分科に與さはる一學徒として、總ての物と事を在るが儘にあらせたいのが大なる本願ではありますが、疾に惱む多くの弱き人の味方をすべき醫者として、療病上の利害を明かにする爲めに、時に少數の人の迷惑となることを忍ばねばならぬことを頗る遺憾とします。此意味に於いて世間に存在する素人相手の何々療聚だの靈藥といつたやうなものが、無知か有意か、偶然にもか、他人の弱味を利用するが如き結果になるは捨てゝは置けません、卽ち之等のものは大多數存在の價値の無いものであることを遺憾ながら表明せずにはゐられません。

これを攝るに禁ずる者なく、これを須ふるに盡くることなき大氣と陽光の惠みに生きて、さうして斯のやうな狹い議論に日を暮らさなければならぬとは、嗟、詰らないことではあるかな。

13＝ 結核の早期診斷と早期治療

繰り返し述べてゐるやうに、結核は始めの中に善い手當をすれば必ず、完全に治る病氣です。さうして肺病と壁の雨孔は手當が早ければ早い程速に且つ完全に治るので、經濟的にも時間的にも、治癒の完全なるを期する爲めにも極初期の間に最善の醫治を加へることが吳れ〳〵も肝腎なのです。乃で醫者の方で申せば『結核の早期診斷』といふ事が最近最も喧しく唱へられ、出來得る限り早く此病氣をそれと斷定して、直ちに適法の治療を加へ、療養をなさしめることが、今日のやうに澤山の重病者を出さない第一の手段であつて、其病人個人に取つて大した仕合せである許りでなしに、重症の人となつて他人に病毒を傳播することもなくなる譯で、詰り

個人的にも、家族的にもまた社會的にも非常に大切なことであるのです。

現に醫學では結核早期診斷の方法がいろ〳〵に研究され、ビルケー氏の法だの、エッキス光線診斷法だの、その外種々な診斷法が知れ亘つてゐて、大抵な醫者の所では是が出來るのですが、肝腎な相手方の方で多くは無頓着なものであるから、手を空しうしてゐるやうな次第です。

だが、その相手方卽ち素人の無頓着なといふのも決して無理ではないので、何事も身體に故障を感じない人が、矢鱈に早期診斷におしかけて行く必要もなければ、そのやうなことになつては醫者とて耐まつたものではないのです。

そこで問題は、『どのやうな人々に早期診斷の必要があるか』といふことになります。私は以下その早期診斷を受ける必要のある人々を擧げて見ませう。但し念の爲に今一應斷つて置きますが、次に書いて見る人々は之から診斷によつてその病氣であるかなしかを確かめるのであつて、何もその病氣と極まつた譯ではなく、縱し早

期診斷によつて初期であると極まつたとした所で、直樣適當な治療と攝生とを加へるならば速に且完全に治る譯なのですから、その爲に心配したり、悲觀したりすることは毛頭ないのです。

そこで、早期診斷を受ける必要のある人々といへば

第一は、生來虛弱で、頸部あたりにグリ〳〵のある風な子供です。

結核の傳染は、主に鼻や口から呼吸や飲食と俱に侵入した菌が扁桃腺や、齦から這入りこんで、先づ頸のあたりの淋巴腺に第一の宿りをなし、それからだん〴〵に深い部分の淋巴腺に進入し、氣管の周圍の腺にはいり、それからして、ごく緩る〳〵と肺に病氣を起す順序なのですから、頸部のあたりにぐり〳〵のある子供は卽ち結核感染のごく初期であるのです。そこで此の時期に早速適當な治療を加へ、殊に後に述べる免疫療法を施こすならば、殆んどほかのいろ〳〵な七面倒な醫治を加へずして、發育盛りの子供等は容易に强壯に歸ることが出來ます。であるから、こ

の子供の腺結核、言を換へていへば『結核潜伏時期』は逸すべからざる大切なる治療時期なのです、これを不注意に看過する親達の多いのが結核を不治病と名けしむる最大原因です。

第二には家族又は同居者のうちに、咳嗽や痰を出すほどの肺患者のあつた塲合に同居してゐた子供や又は齢の若い人々です。

眼に見えない結核菌は極めて隱微の間に人体内に這入りこんで、恰かも盜の夜行くが如くにこそり〳〵と病氣を起して行く奴であつて、人間殊に都會生活をなす者互ひては何時如何なる機會に感染をしないとは限らないが、就中最も危險なるは同居者の咳嗽によつて傳染するに在るのですから、既に多く世間に立ち交はつて、しば〳〵輕い傳染の機會に出遭ひ、身体に抵抗力の出來上つた大人達は、さほど心配は入らぬものではあるが、子供や、まだ若い人達は、家族や同居者からの傳染を一等惧れなければなりません。そこで、已むを得ずか、又は知らずして、痰を出し、咳

嗽をする病人と同居した子供や若い人々は、何等の病徴はなくとも、先づ初期の診斷を受けて、結核反應の有るや無しやを檢査して貰ふ必要があります。そして、幸に何の反應も、病徴も見出さぬならば、安心であり、若しも、それによつて何かの徴候あることを知つたならば、直に適當の手當を加へ、殊に豫防免疫法を施こして、將來の安全を圖ることが、最も策の得たるものです。

第三には姙娠中や、産後に別の故障なしにひどく弱る婦人です。

姙娠と授乳によつて婦人の衰弱する塲合に、結核としばしば密接な關係のある事を私は、別の項でお咄し致しますが、兎に角姙娠と産後は婦人に取つて、申すまでもなく非常な大役であり、此際他の慢性病に侵さるゝことは親子二人の生命に關する大切なる塲合であるから、少しでも結核如き病徴ある人々は、出來るだけ速かに適當な治療又は豫防を施こすことが、忘るべからざる緊要事です。

第四には、次に記す十の徴候の孰れかをもつ人々です。

一、食慾があつても何時とはなしに身體が痩る人。
二、慢性に胃腸の悪い人。
三、身體が疲れ易くて、朝の氣不精な人。
四、永らく貧血してゐる人。
五、朝々輕い咳嗽が幾日も出る人。幷に一と月も二た月も夜になると頑固な咳嗽をする子供。
六、盜汗が幾夜も出る人。
七、午後に熱氣を覺えて手足が萎だるかつたり、輕い熱が長く續く人。
八、月經が不順で幾月もなかつたり、またあつたりする人。
九、若い人々で氣分が變り易く神經の鋭くなる人。
十、初期の咯血。

以上が私の考へて大切な肺病初期の十徴です。この中のドレかに思ひ當る人々は

猶豫なしに所謂早期診斷を受けて、肺に故障のあるかないかを確めさせ、若し是れありとすれば、躊躇せずに直に壁穴の修理に取り掛ることが一身將來の安全の爲めに必要です。

少しくどいやうてすが、この項目は肺の病氣を重くしない爲めに、詰り、本人と家族の悲歎を造らない爲めに、且は國家と民族の損失を未然に防止する爲めに、最も大切な事柄であるから、その一々に就て簡單な説明を加へませう。

諸君。身体の痩せることは、その外のいろ〳〵の塲合にもあることであり、殊に急性に胃腸を毀した塲合なぞては、一日の下痢てもつて、一貫も二貫も痩せることはあるのてすが、食慾があつて、毎日三度の食事を缺さぬ人々が、何時とはなしに痩せ細るといふ塲合は、結核の初期をおいては、外にたんとはありません。ですから、このやうな徴候に氣の附いた人は、先づ速かに早期診斷を受けて、結核の反應又は病徴のあるやなしやを檢査させるが肝腎です。

次には慢性に胃腸の惡い人ですが、

諸君。身體の何所かに故障があつて、休養を要することのある場合に、それが、手足であるとか、腦であるとかなれば、場合によつては又は覺悟次第で、幾日でも必要なだけ休めて居ることが出來ます。しかし、胃と腸ではさうは行きません。

胃腸は年が年中休養の日がありません。胃腸も身體の一部分ですから、例へば肺に故障があつて、それが元で身體が衰弱した場合には、胃腸は平生休養しないだけそれだけ餘計に弱つてまゐります。然るに普通では、身體に衰弱の見えるやうな時には『モット腟かり喰べなされ』といふやうな譯で、却て餘計に働いて貰はねばならぬやうになります。さてこそ、胃腸の故障はいよ〳〵太だしくなり、目立つて覺えられます。元來慢性の胃腸病は少數は内臓神經の疾患に因ものもあり、老人では萎縮腎等の老人病に因つて來ることもありますが、若い人々では、十中九は肺に故障のあると認めます。こんな場合をながく打ちやつて置けば、ます〳〵身體は衰弱して

行き、病魔に對する抵抗力を減じて行くのは當然の理です。

次に身體が疲れ易くて、朝の氣不精な人と申すのは、元來子供や、働き盛りの人人にあつては、何か非常の運動をするとか、無暗な空腹を忍んで立ち働らくかしなければ、矢鱈に疲れ易い譯はない筈のものであつて、日常の仕事や、學業の爲めに幾日も、毎日々々疲勞を覺える場合は、何か慢性の病氣の初期であるかを注意しなければなりません。

また朝の氣不精なことですが、このやうに疲れ易い風の人々が、毎日構はずに事業を取り、又は學業を續けてゐれば、自然と身體も精神も衰弱します。唯だ身體の疲れだけならば、夜の安眠によつて速かに恢復し、朝々は再び爽快な氣分になれるはずですが、精神が身體と倶に打ち續いて疲れた場合には、所謂神經衰弱となつて身體が疲れてゐるにも拘らず、夜の安眠を妨げられます。

諸君。安眠は卽ち完全なる心身の休養であつて、食と倶に必須缺くべからざる生

命保持の條件です。

生命保持の必要條件を通常衣食住と申しますが、衣は寒冷を防ぐ以外には既に生の必要條件ではありません。生きんが爲めに食の第一必要なことは申すまでもないとして、住は食と倶に缺くべからざる生の二條件です。この住居の必要なる所以はもと〳〵金殿玉樓を構へて他人に之を誇らんが爲めでもなく、奴婢妻妾を蓄へて子孫と共に相娛まんが爲めでもありません。詰りは生きんがために食と倶に最も必要なる安眠休養を得んが爲めに外ならないのです。

睡眠は生物にとつてかほど必要なるものであるにも拘らず、神經の衰弱した場合にはその安眠は妨げられ、精神も身體も必要なる休養を充分にすることが出來ない爲めに、朝の氣分が勝れなくなるのです。かゝる場合が幾日も打ち續くことは大抵は慢性病の徴候であり、その多くは肺病の初徴です。

第四にあげた慢性貧血の場合ですが、貧血はまた外のいろ〳〵な病氣によつても

起ります。その最も著しいのは腸の寄生虫、殊に十二指腸虫の仕業であり、婦人では子宮の病氣や、慢性の腎臟病、心臟病などでも起りますが、それ等はそれ〳〵特異な容體があつて、普通でも氣附くはずであり、一應醫師の診斷を受くるならば直ちに解決がつくものですが、別段、子宮や、腎臟、心臟等の故障がなくして、永らく顏色の勝れぬ人々は、一應注意するを要とし、醫術の方では

『原因不明の貧血は先づ結核と思へ』

といふ古い誡言があるほどであるのです。昔は『先づ結核と思へ』などと、なかば、あてすつぽうに結核ときめたのですが、現今では結核の診斷法が進歩したお蔭で、檢査を行へば、貧血であつても結核でない場合と、それであるのとを明かに區別することを得るのであるから、心配をぬきにして先づ一應確かな診斷を受けるのが、ドチらにしても得策であると思ひます。

その次は、朝々輕い咳嗽の出る人、幷に一と月も二月も夜になつて、寢床が温ま

ると咳嗽をし、頑固て普通の醫治でも治り憎い場合の子供達です。

咳嗽が晝夜の別なしに出るやうになるのは、氣管枝炎と肺結核であり、肺病でたえず咳嗽が出るやうになれば、それはすでに初期ではないから、此所で説明をする要はないのですが、朝々きまつたやうに輕い咳嗽の出る人々は肺尖や、又は肋膜に故障のある場合です。だからして、之も成るべく早く醫治を受けるやうに心懸けるべきです。また四五歳から、十四五位までの子供で、夜横になつて臥せつたかと思ふと咳嗽をはじめ、夜中、うつゝにも咳嗽をするのがあります。このやうな子供は大抵皆な、氣管枝腺結核の特徴であつて、こんな子供に限り、朝起きを大義がり、氣不精で學校なども休み勝ちになり、または、家に居ても一日中不機嫌に暮します。すなはち結核初期の徴候であつて、殊にその咳嗽の劇しい場合は肺に病を發して且つ重症となり易いものであるから、出來るだけ早く良い治療を施すことが極めて必要です。

第六にあげた盜汗は、之は誰人でも今では知つてゐる肺病の初徴であつて、盜汗は多くは著しい衰弱と俱に來るものであり、また殆んど毎に輕い熱發と併發するものであるから、これを打ち捨てゝおく人は少ないやうですが、親と同衾しない子供や、女學校、中學校に通ふ青年男女で、人生呑氣な盛りでは、往々無頓着にして可なりひどくなるまで構はないのが多いから、親達は子女の身体の衰弱とともに注意を怠らぬやうせられたいものです。但しまた、身体を餘り大切にし過ぎるが爲めに、ぼか〳〵する春先きにも矢張り炬燵を用ひたり、初夏の候にも冬季の儘の夜具を用ふるが爲めに毎夜、むしつけて汗をかいてゐる場合があります。こんなのはほんとの盜汗を打ち捨ておくのと先づは好一對の愚蒙とても申しませう。

第七にあげた條項は、之れもやはり。

『原因不明の輕熱は結核の初期と思へ』

といふ誡言が古くから内科書にある位であつて、詳しい説明を費やす必要のない

ほどな事柄です。つまり、輕い熱があつて、醫者に診せても別な原因は見附からぬとした時には、肺に格別故障を認めない塲合でも、後には肺病になることが多いといふ次第です。そんな譯で身体が弱るが爲めに午後にもなると、手足が萎だるくもなり、僅かなことで顏がほてつたり、或は寒けを覺えたりするものです。

第八の項は婦人に限ることですが、若い女子殊に女學生あたりの年齢では、身体に慢性の故障のない限り、毎月必ず經血を見るのが自然で且つ生理的であるのですが、慢性の病氣が始まつて、身体の衰弱が起ると、しば〳〵月々のものを見なかつたり、それが後れ勝になつたり、一ト月二タ月もなくして、突然に復たあつたりするのです。既婚婦人にてもおなじやうなことがあつて、月經がないので姙娠であるかと思つてゐると、つわりも起らねば、お腹が膨れもしない、そのうちぼかりと紅いものが出たりするうちに身体の衰弱が目立つて來る、盜汗が出る、咳嗽が出る、といふやうなことがあります。殊に處女の女學生などでは、これを早く氣附いて母

親にても打ちあけることは得しないのが多いから、弱手な娘子を持つ親達は常にこれに注意をして、時期を誤まらぬ要愼をする必要があります。

第九番にあげたのは、若い神經質な人々を注意すべきことを申したのであるが、殊に發育の惡い子供で、日常機嫌の變り易い性質をもち、一寸とした事にも泣いて見たり、又はケロリと上機嫌になつたりするやうな塲合、又は十歳、十五歳にもなつても背中や、腕、脚あたりにうぶ毛をもぢや〳〵生やしてゐるやうな子供は大抵は所謂結核性素質であつて、所謂潛伏結核であることが多いから、早く確かな診察を受けて、若し其の徵候があると知れたらば、速かに良い治療を施すべきです。

第十番の『初期の喀血』といふのは純粹の醫術上の術語であつて、諸君の餘り聽き馴れない詞ですが、これは、多くは二十歳前後から以後にあるもので、それまで何所一つ惡い事のなかつた人が、風邪、飲酒、劇動疲勞等の後で、多くは早朝洗面の時とか、靜かにしてゐて、突然に動いた時とか、氣の詰ることを仕た後とかに、

ッイ輕い咳嗽が起り、痰のやうなものが咽喉に出て來て、吐いて見ると小さい血塊であるといふやうなのを申します。それまでにしば〳〵痰を吐いたり、咳嗽をしたりする人々が、その痰の中に血の線や、血點を混じたり、又は血痰を出したりするのは、既に初期ではないから、此所で申す、初期の咯血とは申せない譯です。

所謂初期の咯血によつて、初めて何か肺に故障のあることに氣附いた場合は、詰り病氣はあるが、それは未だ餘り進行したものではない證據であるから、速かに愼重な治療を受けるならば、これは多くは極めて善性の肺病であつて、速かに且つ完全に治るものであります。世間では、肺患の爲めに紅いものを見ることを無暗と怖がる傾向があるが、それは寔に謂れのないことで、紅いものを見たとて左ほど怖れる必要はなく、殊に初期の咯血がたゞそれだけにとゞまつて、續いて、痰も、熱も出ない場合に、靜かに、眞養生に入ることが出來るならば、手先、足さきの創傷などとおなじやうに、しば〳〵速かに、且つ完全に治つて終ひ、同時に身に多

少の要愼をすべき故障あることを早く知るが爲めに、却て亂暴なる生活を愼しみ、生命を愛用するやうになり、寧ろ幸福の種になると考ふべきです。

以上申し述べた、初期の十徵は、その孰れを重しとも申しかねるものであり、そのうち二つ三つ四つが相重なつて現はれることもあるが、要するに之れ等は所謂初期の徵候であつて、これを氣附くと同時に躊躇せずに醫者の門を叩くならば、現今の醫學では容易に重症の結核になることを防ぎ留めるを得るのであり、速に且つ完全に治癒させるを得るのである、若し逡巡して、此の大切な時期を過し、いよいよ堪へられなくなるまで、愚かな思案に日を暮らすならば、醫術の施すべき餘地を失ひて、取り返へがつかなくなるのです。

私はこの結核の咄のうちて、殊にこの初期の診斷と、早期治療の必要であることを最も重要なる部分であるとして、讀者諸君の特に留意せらるゝことを希望するものです。

14＝結核病者の食餌

醫者が結核病を持て餘して來たことも久しいものです。持て餘し物といふことは言を換へれば本態の知れぬものといふことです。本來空なる宗教が本態が知れないが爲めに、佛、耶、モルモン、新教、舊教、禪宗、天台、眞宗、法華といつたやうに無數の流派があつて、枝葉に走つて幹源が眞闇になつて仕舞つてゐるやうに、結核でも、食滋榮養療法、高山療法、日光療法、横臥療法、運動療法、免疫療法、化學療法、藥物療法、扨ては無言療法などから、――判らないので――X光線療法など迄突き詰めて來たのです。

病氣の原因が判つて、本態が判つて、それに萬全な治療法があるなれば、一病に

對しては治療法は一つになつてしまふのが本當です。ちやうど、ヂフテリアといへば血清、血清療法といへばヂフテリアと、世間一般の人々の聯想に出るやうな具合に。結核では治療法にそれほどの進歩はまだ無いにしても、極初期なれば餘程簡單に治療が出來るし、やがて一病一療法の時が來るでせう。併し既に二期三期に入つては此奴難中の難物であつて、已むを得ず矢張り、さま〳〵な治療の手段を盡さなければなりません。

今日は前回の話の序ですから、病人の食餌のあらすぢだけを話しませう。

健康な普通人が五尺十五貫の體を支へて行く爲めに、例へば蛋白質（主に肉類）百二十瓦、肪脂五十瓦、含水炭素、主に穀類野菜類）――皆水分を除けての話し――を攝らねばならぬなれば、現に病氣になつて日々に衰弱して行きつゝある人々ではその衰弱を堰き止める爲めに、――平たく云へば『病氣が喰べる分をもう一人前喰べる必要があり、十五貫が十一貫位に衰弱してゐるのを取り返す爲めに、尙一人

前を攝るを要するから、病人が普通人の體格榮養と活動に歸るには、ザット三人前の食餌を日々攝る必要がある。これは所謂榮養療法を重んずる學派の主張ですが、なるほど一理窟です。ごく初期で、熱などもない、食慾も十分ある人々はこの理窟を頭においてお腹を損じないやうに徐々にその實行に取りかゝるも妙です。——突然に大食に移ることは危險です——食品の種類は世間に知られてゐる所謂滋養物なれば何品でも構ひません。そして——米を主食と心得て、無暗に御飯を搔き込むことが榮養上不適當であることは今更言ふ迄もありません——食事時間の間隔を十分にあけて、間食をしないこと、食餌が簡單にならないやうにいろ〳〵のものを混食することなどは必要な心得です。此點で昨今國立榮養研究所から出る、獻立は——兎角の評はあるとも——概して所謂保健食の據り所を示すものですから、參考にしてよろしいです。

果物は下痢のある人にはよくないとして、その外の人々は少なくとも一日一回位

は喰べることが必要です。貧血の人々には青い野菜類の多い方が宜しいなどは餘りにありふれてはゐますが、ありふれてゐるが爲に忘れてしまつてはなりません。

熱や咯血等があつたり、又は衰弱の爲めに就褥してゐる病人の食事は、塲合塲合によつて大に趣が變ります。このやうな人々はまた胃の擴張や弛緩症などをもつてゐることが多く、その爲めに僅なことで下痢したり又は便秘することがありますから、それに相應して用心をしなければなりません。このやうな人々には先に言つたやうな飽滿過食主義は危險です。

弊馬に重荷といふ言葉を私は茲で再び使ひます。已に前回にも申したやうに、全身の衰弱に際しては胃腸は殊に甚だしく疲弊してゐるのですから、これに勝手次第な食物を無暗に詰込んで、無理な働きをさせることの危險なことは冗々申す迄もありません。私は今此所で、あらゆる塲合の食物の選擇を一々擧げることは出來ませんが、概して申せば、消化し易い嵩の少い滋養食を時間を定めて攝ることが注意す

べき原則です。此やうな時に米飯でお腹を膨らす習慣は、何としても排斥しなければなりません。又時間が來て、お臺所での用意が出來たからとて、欲しくもないお膳に向つて、無理から幾碗かの食事を平げることは、啻に必要がない許りでなしにしば〳〵その爲めにお腹を傷はし、又は氣を重くする許りです。こんな時には一飯位は抜きにして見ると、次の食事の時間迄には隨分食慾の振ふことがあります。殊に急性に胃腸をこはした場合には、一日位絶食することが醫藥以上に有効な時があります。

此のやうな病人の一番困つたことは食物に好き嫌ひのあることです。

食べ物に好き嫌ひのあるは、その本人に取つては洵に不利益な、辛いことであり、傍から見れば面憎くいやうなものです。殊に病人となつて、喰べ物の種類が制限される場合に、此好き嫌ひがあつては、ドレ程の損であるか知れません。もと〳〵病氣に憑り附かれるやうな弱い軀になつたのも、食べ物に甚だしく好悪があつて榮養

品が簡單になり、從つて全身の發育が不均等であり、機能が不完全であるから起つたことであるとも見られます。食物の好悪は皆な子供の間からの癖であるから、子を育てる親達は子供等の將來の健康の爲めにも、病氣になつた時の要領の爲にも、是非共この好悪のないやうに習慣をつけなければなりません。食べ方のことは別に今少し詳しくお咄し致しませう。

15＝我輩の素性

我輩の素性を人間共が良く識らないのが我輩の附け目だ。我輩の弱味を皆彼等に知られて仕まつたら、我輩の生きる空はない、何故ならば我輩は人間が大好きであり、人間以外には我輩の棲むべき所はないのだけれども、人間は我輩を近頃殊に非常

に怖ろしがつて、嫌つて、さうして我輩を絶滅に導かうと思つてゐるからだ。さう氣附くと我輩も何だか心細くなつて來る。隨分今まで人間の生命を奪つて來たものだから、モーボッボッ年貢の納め時かも知れないテ、乃て今日は一つ我輩の身の上嘶してもして見ようといふ譯だ、イヤハヤ我輩も齡を取つたものだ。

我輩は元と植物界の生れだ。親類はなか〳〵廣い。ベスト菌・コレラ菌・ヂフテリア菌なぞは近親の間柄で、牛の結核菌とは双子のやうな兄弟だ。椎茸だの、松茸だの、圖抜けた大ものでは猿の腰掛で大きさ三尺位なのも遠い親類の中だが、我輩は智恵があるせいか極く小さい。何樣人間の眼にはその儘では見えないんだから小さいとか細かいとかの標準を外れてゐるんだ。遉に我輩も大きさでは威張る積りはないが、人間共の眼に見えない所が我輩の強味なのだ　茲て序に細かさの自慢をやつて見よう。

先づ我輩がアニリン色素で化粧をして千倍の鏡に向つたとすると鏡の中に細かい

チョビチョビとしたものが映る、それが我輩なのだ。人間はよく細かいものゝことを兎の毛の先といふが、若しその兎の毛を我輩と共に千倍の鏡に映したら、堤防か石垣のやうに見えるだらう。以て我輩が如何に小さいかを知るべしだ。

我輩の體重が幾何あらうかつて？莫迦にしてはいけないが、我輩は一匹づゝでは目方にならない。一ミリグラムは一グラムの千分の一だが、我輩が生てみづ〳〵した儘で精微天秤に乘つかつて見るとして、ザット十億匹で一ミリグラムだ。先頃我輩が少し外界の景色を見る爲めに肺の洞穴から痰と一しよに出て居るのを醫者の奴が白金線の先で捉まへて、鏡にかけて數を讀んで居たつけが、結局少し我輩等が無遠慮に出かける時には一人の患者の肺から一晝夜の間に六億位泳ぎ出すんだとか言つて驚いてゐたよ。何のそれしきの事に驚いた日には人間の膽つ玉はないよ。一晝夜に六億許りといふのは、たつた一人の病人の事だから、是が一年思ふとしたら、その三百六十五倍だらうし、日本だけでも現に百五十萬人位の病人があるんだから、

これを世界中に積つて見給へ、算盤の桁は足りはしないや。數の多いことを秋夜の星なぞといふんだが、――星といへば大小微巨の比較に於いて我輩等と星とは兩方の大關だ、ツイ先頃辛うじて發見された銀河の傍の十七等星位の恒星が我輩の極嫌ひな太陽より二十倍とか三十倍とかあるんださうだし、太陽の直徑は八十六萬四千三百九十二哩あるんだから比較もこれ位度外れたのは珍しからう――兎に角天に懸る星の數は今知れて居るだけで漸く十億乃至二十億といふのだから我輩の仲間から見て物の數ではない。世界の人間がたつた十五億人居て、物價騰貴に苦しむんださうだが、我輩の仲間ほど人間の數があるとしたらば麼んなものだ。

我輩の祖先の系圖は殘念ながら良くは判らない。人間が先に世界に出來たか、我輩の血統が先に出來たかは親類中にも知つた者が居ない。ダーヰンの進化論では我輩の仲間を人間より下等だときめてゐるから、事によると我輩等の方が人間共より數千萬年前に生れてゐたかも知れない。さう考へて見ると我輩の祖先が人間といふ

食べ物を發見する歴史も隨分永い間かゝつて居るやうだし、その子孫の我輩達が今日安穩に生きて行く爲めの先祖の苦勞も、コロムブスの亞米利加發見なぞよりも骨が折れたに違ひないテ。

ズツト降つて希臘の全盛期にヒポクラテスといふ顔附の六ケしいのて有名な醫者が、耶蘇降誕の四百年ほど前に『肺癆』といふ文字を使つてゐる所で見ると、我輩の隱れ家は其頃既に人間共に知られてゐた譯だ。加之、その五十年ほど後にはアリストテレスといふ醫者が『肺癆は人から人に傳染する』てな利いた風なことを書物に書いて、我等の覆面は危く取り去られやうとして、我輩の祖先の心膽を寒からしめたものだ。

希臘の文明がその儘に進歩したなら人間共には好都合であつたらう、そして我輩の素性もモツト早く洗ひ立てられたらうし、多分我輩の壽命も今日までは續かなかつたらう。所で、人間共が己惚れるやうに自然は人間を偏愛しないから、彼等の文

化は其後ウンと下落して、我輩の壽命は從つて延びた譯さ。茲に於いてか我輩は大いに耶蘇教の神に感謝するよ。耶蘇教が人間共の間に變挺な區別をつけて二千年近くの間互の爭鬪に日を暮し、科學の發達を極端に阻礙した、あの歐洲文明の暗黑時代が我輩の黃金時代で、同時に我輩の同僚で過激分子たるペスト氏、コレラ君、腸チブス君等の活動時代さ。此暗黑時代も漸く終りに近づきかけた十四世紀の中頃に於けるペスト君の奮鬪振り、横暴振りといふものは實にも目醒しいものであつたよ。その活動振りの一端は彼の有名なる奇書ボカッチョのデカメロシの序文に書き遺してゐるでも知れる通り、幾か數年の間に中央亞細亞から全歐羅巴の人口を四分の一にして仕まつたのだから、人間共が震へ上がつたのも謂はゞ尤もな譯さ。我輩は絶えず持久戰を取つて居るので、表面にはそれほど目醒しい働きは見えないんだけれども、數千年數萬年來、春夏秋冬晝夜の區別なしに、主に屋内生活をやつてゐる人間界に働いて、人口制限を行つて來た功績は、ペスト、コレラなどの氣の短い

手合の到底企て及ばぬ所さ。

それに人間といふ奴は妙な動物で、何事によらず少し變つたことがあるとすぐに大騒ぎをやるんだが　絶えず在る事には、またすぐに慣れて仕まつて、初めは命懸けの仕事でもおしまひには鼻唄で行る奴等だよ、詰り忍耐持久といふ性質に於いて動物は植物に協はず動物が高等になるほど、段々それが乏しくなるんだ。それで我輩は絶えず殆ど無抵抗の間に猛威を揮つてゐるんだよ。それでも醫者や所謂憂國先覺の士といつたやうな者共が時々我輩を目の敵にして大聲を上げて我輩の威力の怖るべきことをならぶのだけれども、心理學者のヴントが言つたやうに、人間共の意識の作用が斷續的なのだから、根氣が到底續かないんだよ。

だからして、苟くも我輩如き强敵を向ふに廻しての戰鬪に勝鬪を擧げやうといふには、僅な名譽心や、パンの爲めにホンの一時勉强して見るやうな、しみつたれた根性では駄目なことだ。何でも餘程人間放れのした奴が出て、本當に奇想天外から

落つるやうな考へを出して、忍耐持久大膽勇敢にやらなければ行けないんだ。――我輩は迂濶と人間共に氣勢を添へるやうなことを喋つて仕まつたが、マア、これも打ち明け咄しさ。

總ての科學といふものは人間を本として、人間共の便利に從つて發達するものだからして人間自身の科學的發達が他の科學進歩の先驅を爲すものであると我輩は思はざるを得ない。見給へ、現代の醫學が遠く二千四五百年前の希臘の文明に淵源してゐるにも拘らず、其後二千年以上もすつかり停頓してしまつて、漸く十七世紀の中葉以後に、覺醒した醫學者によつて、人屍の解剖をするやうになつてから、急速に進歩したではないか。而して此世紀の終から十八世紀の首に亘つて祖先傳來永らく我輩の領地として何者にも窺ひ寄ることを許さなかつた人間の肺の臟は、解剖臺の上で醫者共のメスの尖でほぢくりさがされてしまつたんだ。それでもつて醫者共は、何か人間に不都合な侵入者――即ち我輩――が肺の臟を蝕つて居るらしいこと

に氣が附いたんだが、我輩とて自己を護るに左う無用意ではないんだから、人間共が迷つたのさ。その譯は、我輩は或る時は思ふ存分に僅に數日か一二箇月の間に人間を喰ひ盡してやるんだが、また或る時は極く緩くりと五年、十年、事によると六七十年もかゝつて、樂しんで一人の身體に住まつて、大に子孫の繁殖を圖つてゐるんだ。この急行でやつた時と　念入りに仕上げたのとで肺に出來る工事の模樣も細工も違ふものだからして、人間共の考へては我輩一族だけの仕事ではないと思つたのだ。是が我輩の匿身術であらうとは遠かに醫者共も氣附かなかつたものだ。

然る處だ、我輩の智惠は先祖傳來遺憾ながら餘り進歩しないが、人間共の智識は流石に自惚動物の本家だけはあつて、時代によつて時々斷續的に進歩するのだから蒼蠅い。到頭十九世紀の中頃に樣々に形式を變へてゐる隱家から我輩を捉まへて、兎の體内に我輩の植民地を作つて見たものだ。之が所謂動物試驗といふ手であらうとは、我輩神ならぬ身の氣附かなかつたのが一期の失策さ。我輩は俗臭ふんぷんた

る人間の肺などよりは遙に清新な新樂天地を得たりといふのて、江南湖北の別々の住居から來た同志が、孰れも同じやうな具合な住居を作つて、一齊に無遠慮な喰ひ荒しをやつたものだから、古來人間共の肺に樣式の違つた住居を構へてゐたのは皆我輩の一族てあつたことを、すつかり氣取られてしまつたんだ。若し此手に乘せられるとすると、我輩は今ても矢張り同じことを行るより外知らないんだからして、我ながら淺間しい氣がせんてもない。

それやこれやて我輩も少々氣を腐らしてゐた間に、我が厶微寄生體の同族に取つて、實に語るにしのびない一大破綻が起つた。

それは人間共が光學的機械の製作に其頃跳躍的の大進歩をなしたからてあつて、管に我輩の同族に一大破綻を現出した許りてなしに、我輩とは大小微巨の比較に於て兩極端に位すると我輩の語つた、星の世界の秘密も亦その爲めに悉く探り取られてしまつたのだ。顯微鏡と望遠鏡がそれだ。我輩は機關銃でも、爆烈彈でも、

十八吋の巨砲でも決して惧れたことはない。人類殺戮を共同の目的とする上に於て火藥には寧ろ或る親みをさへ覺ゆるものてあるが、この顯微鏡許りには今もなほ怖お毛をふるつてゐるんだ。顯微鏡が出來た爲めに我輩の同族て一番最初に馬脚を表してしまつたのは、少し總身に智惠のまはりかねたデブ君事脾脱疽菌だ、此野郎はもと〳〵人間の家畜を專門として荒してゐて、時々人間共へ喰ひしんぼうに出掛けるんだが、圖體が我輩などより數倍大きいものだから、手もなく顯微鏡てポレンダーといふ餘り豪くもない男に睨め出されてしまつたんだ。

我輩とて、かうなると賴む木の下雨漏る心地がせぬのてはなかつたが、さりとて脾脱疽菌のやうな棒鱈てはないんだから、保身の道は先祖傳來ちやんと有つてゐた積りなんだ。其は何かといへば、その昔支那に身に漆を塗つて匿れしのんだ豫讓といふずるい男があつたが、我輩も亦ずつと以前から身に蠟と脂肪を塗り込んて身の備へとしてゐるんだ。幾ら顯微鏡を使つたとて、我輩共が素顏てゐる間は人間共の

眼には入らないんだが、黴菌界にも粧し家が多いといふのが情けないかなで、女獅連青だの、金剛紅だのといふ顔料をいろ〳〵安價で見せ附けられると堪らなくなるんだ。一體他の弱點を附け込んで誘き出さうとは人間とも覺えぬ卑怯な仕方なんだが、暗脱疽の野郎がその術に罹つてから同族の誰彼が續々として揚げられたものださても武運も末とこそ覺ゆれだ。

十八世紀も我等の勢威と俱に末に近づいた頃であつたが、數年來我輩に目星をつけて影になり日向になり我輩を附けねらつてゐた男があつた。それは誰かつてかい忘れもやれない、我輩とは其後三十年も恨み重なる仇敵の間柄であつて、つい、十一年前に終に我輩を征伏し得ない爲めに悶え死んだロバート・コホさ。併し怖ろしく天才的で、また莫迦に根氣の強い男ではあつたよ。この男が、日がな毎日、永年の間例の美しい顔料を手を代へ品を代へて我輩の鼻の先に列べ立てたものだ。併し我輩は化粧品に好みが高いのと、迂濶に奴等の術に乗らない自重心があるので、例

の如く臘と脂肪で身を固めて、コホが焦れば焦るほど反對に落ち着き拂つてゐた態度は我ながら遺に見上げたものであつた。

頃しも明治十四年の暑中休暇前であつたが、コホは例によつて日々數百枚の顯微鏡硝子に我輩を招待して、例の如く美しい顔料の安賣をしてゐたものだ。しかし我輩も亦明哲保身の術を完うする覺悟で奴の術に乗らなかつたものだからして、奴さん到頭癇を切らしてしまつて何所かの温泉場へ氣を拔きに行つて仕まつた。元より我輩の載つかつてゐる顯微鏡硝子は、其所らうぢういつぱいに散らばりさがしたまゝ、片附けさせもせずに、帽子を提げて、太息をつき〳〵、鍵をかけて出て行つた態は、敵ながらも愍れなもので、同時に我輩は聲が無いので勝鬪をこそ擧げ得なかつたが、勝利の誇りを感ぜざるを得なかつたよ。その日の夕方のことだ、我輩は獨りて今後の戰鬪方針などを考へてゐると、何處からともなしに得ならぬ香氣が紛々として我輩の鼻を打つてはないかネ。その中その芳香はだん〳〵と身に沁みるやう

に覺えたと思ふうちに、魔がさしたとてもいふんだらう。ウカとお粧かしをして見る氣になつてしまつたんだ。そしてその香氣にひたりながら、手近にあつた女痴連青て塗り立てた化粧姿といふものは我ながら初めての事ではあり、見惚れる位なものであつた。我輩の積りではコホが旅から歸つて來る迄には元の素顏になつて、すましてゐてやる考へであつたんだが、運の盡きといふものは致方のないもので、粧しこんだまゝ好きな香氣に包まれてグッスリと寢込んで仕まつたものだ。何かコッコッ音がして身に動搖を覺えたのでフト氣が附いて見ると、軈て二月も寢て仕まつたらしく、コホが旅から歸つて、またぞろ、例の如く白い仕事着をつけて、我輩を顯微鏡臺の上に載つけて、モウ一生懸命に睨めさげしてゐるではないか。

愕いたのは我輩だが、氣附いた時には萬事已に休す矣て、萠え立つやうな綠の色に盛粧したまゝ、術もなく發見されて仕まつたんだ。

人間の言葉でいへば斯ういふ譯だ、コホは脾脫疽を染たと同じやうに、メチレン

ブラウで我輩を染にかゝつて苦心慘憺したんだが、なか〳〵註文通りに行かなかつた、持ちあぐんで、數千枚の顯微鏡本を放つちらかして旅に出て行つた。休暇あけに研究室に歸つて來て、標本を取り捨てゝ仕まはうと思つたが、念の爲めにとて塵埃だらけな數千枚の標本を今一應顯微鏡にかけて菌を探しはじめた。そして休暇前にはどうしても見付け得なかつた硝子の上で、譯もなく青く染まつた菌を見附けてしまつた、そして幾枚もの標本の中から澤山な菌を發見した。

この發見に就ての要件は、夏の溫度と二箇月の日子で難染の菌が遂に着色したかに見えるんだが、それだけなれば、その以前の數年檢索の間に疾くに成功してゐなければならなかつた。コホは此菌の着色の理由を幾日も考へ通したが解らなかつた。茲に結核菌發見の動機が再び迷宮に入らうとして、偶と氣附かれたのは、コホが旅行前に一本のアムモニアの瓶の口を開けて之に栓をするのを忘れてその室內に置いたことだ。閉め切つた室內でアムモニアは揮散して、メチレンブラウと共同

作用によつて、初めて菌が着色したのだ。其後の事は造作もない。かうして永年不明の謎であつた結核の病原菌は發見されて、我輩は茲に初めて結核菌といふ名を付けられたのだ。コホが我輩を發見した動機が如何にも偶然のやうだが、炙つた鳩が誰人の口にても空から飛んでは來ない、機會は矢張り求める人に與へられるものだ。

我輩はコホには呪み出された怨みもあるが、また名付親たるの恩もある。去らばとて我輩は怨に酬いるに德を以てするだとか、恩を報ずるの心持なんて、人間共のいふやうな萬人不通用なことは、加藤さんぢやないが、考へたこともない。若し我輩がコホに怨を酬いる積りでゝもあらば、直樣奴さんを食ひ殺してしまたつてあらうが、我輩は斗んなことはしなかつた。無論、世間の人間に對すると同じやうにコホの體の中にも幾百回となしに飛び込んでは見た。が、奴さんの體軀の屈强なのには我輩の突擊も無効であつた。詰り、人間の身體が丈夫であつて、必要な榮養を十分

に攝つて生々として生活して居る者には、我輩の齒も立たぬといふことになる　コホの體内に我輩が這入り込んで居たといふ證據はある。奴が『ツベルクリン』といふものを我輩の煮出汁から造つて、自身にこれを試驗して見た時に、我輩も、餘りのことに多少癪に觸つたものだから『我輩は實は萬人の體内に侵入してゐる、貴樣の體内にも亦チヤンと鎭座ましますものであるぞよ』といふ譯て、内部から素的な反應を起して見せてやつた。奴さんはそのせいて二晝夜餘りも人事不省の大病に罹つてしまつたものだ。

我輩の惡戲がチト利き過ぎたもので、コホも弟子共も驚きあがつたんだが、轉んでも、たゞは起きない獨逸の學者だけに此事て以て、またぞろ我輩の尻尾を捉まへてしまつたのだ。

それは、その『ツベルクリン』といふものをほんのちよつぴりと人間に注射して見ると、其人間の體内に結核菌といふ我輩の居るかゐないかがすぐ解るといふトテ

ツもないことを識られて仕まつて、我輩の所在を探る爲めの國勢調査の道具に使ふやうになつて、どゞのつまりは、コホの弟子で、北里博士と一緒になつてヂフテリヤ血液を造つた、ベーリングといふ男が『結核の洗禮を受けない者は人にして人にあらず』といふやうな、新しい人類平等の哲學を提唱するに到つたのだ。事實はそれに違ひないんだからして騒ぎは大きくなるばかりだ。その結果『結核は國民病で、我輩は人類共同の大敵』なりといふ、我輩にとつて見れば、難有いやうな、どちらかといへば、擽ぐつたいやうな一件になつたのだ。そこで『結核豫防』といふ言葉は近頃の『人類和平』といふ詞のやうに世界の流行語となつたが、我輩の信ずる所ては、此二つのことは、人間の唯今の智恵と根性ては、双つとも出來ないことだ。だが、『人類和平』は兎も角もとして、曩にはゼンナーといふ醫者があつて、天然痘を騙遂し得た歴史もあることだからして、『結核豫防』だけは片付けたいものだといふ、凄まじい意氣込の男も、そんぢよそこらに、ゐるやうだ。

我輩如き大軍の強敵を人類世界から驅逐してみやうといふ醫學者共の意氣を我輩とても愛しないことはない。それに我輩はすでに數千萬年來、歡樂と罪惡を仕盡くして來てゐるので、一足先に不自由な運命に陥つた天然痘君の後を追ふことになるとも、最早聊かの未練もない。從つて我輩は何時でも潔く首を授けてやる覺悟を持つてゐるんだが、實はコホ以來の最大多數の醫學者や、社會衛生當局者のやつてゐる結核豫防の方策は、我輩から見れば悉く『的外れの鐵砲』だ。偶我輩の急所を狙つた者も無くはなかつたが、機關が萎弱かつたり、火藥が足りなかつたりしたので何の役にも立たずに終つたんだ。智恵があるやうても人間もまだ〳〵淺墓なものだ。

我輩を目の敵にして研究三昧に入つた醫者が世界を通じて幾十萬人あつたか、我輩とても覺えては居ない。中には名もなき雜兵もあるが、なかには我輩のお蔭て大に名を成した奴もある、博士も、ドクトルも澤山出來た　此意味に於いて我輩は世

界第一の博士製造者だ。

この博士やドクトル共が今日迄仕上げた功績といふものを一括りにして我輩が批評して見るなら、『世界の醫學は結核に關して知る所最も多く、得たる所最も少し』と、まづ恁んなものだ。但し斷つておくが此の言葉は我輩の爲めに大に有名になつたさる獨逸の醫學者の言ひ草であつて、彼等醫學者共が自己を罵るの聲であるが、これこそ卽ち我輩肚腹の叫ひだ。そして、結核研究によつて、博士やドクトル共が、所謂『得たる所』といふのは、精々その治療的方面であつて、彼等近視眼の醫者共は本當の結核豫防の爲めに百年を透視する巨眼を有たないで、手近に苦しんでゐる病人を治療することにのみ蹋蹐してゐるんだ。下手な鐵砲も數打ちや中るとやら、いろ〳〵に考へ上げたもので、治療の方面では年々多少の進歩をして來た、そして『結核は治癒すべき病氣なり』てな、知れ切つたことを今更らしく言ひはやすやうに醫者の誇りを增して來た次第だ。

が、然しだ、結核治療が少々進歩したからとて、それで醫者共がよい氣になつたり、人類が我輩の前に枕を高うして眠ることは廢さねばならぬ。我輩からこれを覬れば、醫者が病人を治せば、從つて多數の人間に憑り附いて病人を作つてやるに何の造作もない。

見給へ、我輩は歐米や日本なぞの所謂文明人共が我輩を追立てやうと焦つてゐる間に、彼等の仕上げた交通機關を利用して、それ迄は我輩の勢力圈の外に在つた世界の人類征服に向つたのだ。英獨人に喰付いて阿弗利加に渡つた。英人に着いて印度、土耳其に渡つた、和蘭人や英人に着いて太平洋の沿岸に悉く擴がり蔓つて行つた。大和民族が生存競爭でアイヌ族を驅逐したと結果に於いて考へてゐるのは、我輩の力が最大部分である。彼等憐むべきアイヌ人や阿弗利加や印度の土人共は我輩に取つては先祖傳來喰ひ荒した黃白人共に較べては、全く以て新鮮無比な膏餌なのだ。今にこれ等の劣敗人種は我輩の威力によつて全然滅亡に歸するであらう。お

なじ人種の中でも、京大阪邊の人間は我輩には少々鼻についてゐるんだが、飛騨の山奥や、日向大隅あたりの原人生活に近い連中は我輩大好の珍味だ。近年都會地商工業の發達に釣られてウカ〳〵と流れ出た此山中人類の若い者共に憑り付いて、初めて山奥深く珍味の郡に這入り込んで見ると、これまた、我輩に取つて天與の樂土だ。此處では、人間は先祖以降我輩等とは出會したことがない。從つて都會人のやうに我輩に對する免疫性が無い。金がなくて、食べ物は粗末である。コホもゐない北里もゐない。つまり個人的にも社會的にも我輩に對しては、一切開けつ放しの無抵抗だ。我輩の威力は擅に發揮して、それが爲に殪るゝ者は紛々して落花の如しだ。これが人類の文化、産業發達の犧牲だ。御傷ましき限りにこそ候へ。

治療醫學の發達が人類の幸福に寄與する範圍は國民中の文化に浴することを得る僅な部分に限られて、其恩惠は人類間に最も不公平に頒たるゝものであることは我輩の語る所を以てしても已に明かなことだ。それ故に人類の間に醫學の權威を示さうとするには怎うしても、豫防醫學の發達を期しなければなるまい。我輩全体の勢力の上からは治療醫學の發達は屁とも思はないんだが、若し今後に結核免疫的豫防法が完全に成就することありとすればそれは我輩の最も怖るゝ所だ。近頃我輩も餘程あきらめてゐる、我輩の内心に怯えがある。モー年貢の納め時らしい。といふ譯は世界醫學の氣運がおひ〳〵完全なる結核豫防免疫の發見に近づいて來たやうである、そんぢよそこらにも、この豫防免疫の完成に憂身を瘦してゐる者がゐるやうである。これが完成の記錄は卽ち我輩滅亡史の始まりだ　思へば永い夢であつた、最早悔はぬ御運命かね。

16 子供の結核

結核菌の身の上噺を暫らく御預かりして、私は今日は子供の結核に就いてお話を致します。

子供の結核は大人の結核とは餘程違つた點が多くあります。大人では結核はその最大多數肺結核であつて、其經過は御存じの如く極く慢性です。大人でも腸結核だとか、喉頭結核とかはありますが、それは殆ど總て肺結核に續發するのですから、臺は皆肺結核です。子供では結核はいろ〳〵の發病部位と經過とを取ります。一番多いのは『腺結核』で、肺結核、結核性腦膜炎、骨關節の結核、腹膜結核等があります。

その中で乳兒や、生後二、三年迄の幼兒の肺結核は隨分多いものであると私は思ひますが、日本では子供の解剖が少いもので、多くは肺炎又は毛細氣管枝炎等の診斷で片附けられてゐるものと思ひます。實際乳兒幼兒の肺結核は急性ですから、臨床上では加答兒性肺炎や、急性クローブ性肺炎などと區別がつかないのです。

小兒の結核性腦膜炎は又可なり多いもので、是も亦非常に惡性で、それと診斷のきまる時は、卽ち『誠に御氣の毒樣で』と言はねばならないのです。

骨關節の結核は大人には少ないので先づ多くは子供に限るのですが、是は漸く活潑な運動をするやうになつて初めて出て來るのであるから、七、八歲から十五、六歲迄の病氣です。是は淋く自由な運動を覺えて、飛んで、跳ねて廻りたい最中に、その運動器管たる、四肢と關節をやられるのですから、氣の毒な可哀さうな病氣ではありますが、既にこのお話の二、三回の頃にも申したやうな理窟で、重力と刺戟の加はらないやうに合理的な注意と治療法を施すならば、容易になほる筈のもので

す、肺の結核は發病しても容易くは氣附かれないやうに出來てるので、手後れするとも無理もないとも言へるのですが、骨關節の結核は發病間もなしに氣附くべきものであり、子供でも苦痛が伴ふのですから、十分に早期に治療に委ぬべき筈です。私の信ずる處では、骨關節の結核で不具になつたり不治に終つたりすることは醫者の不名譽であつて、患者又は親其他の保護者の不覺であると謂へませう。

子供の腹膜炎――俗には脾肝の蟲又は子供の脹滿――は痩せて、骨立して、お腹だけが膨れてゐるよく繪などにあるやうなので、詰り腹膜並に腸間膜及び腸間膜腺の結核で子供の五、六歳から十歳前後に可なり多くある病氣です。但し此腹膜結核で殪れることは餘り多くは無いもので、大抵は良くなほり、そのやうな子供は成長して却て非常に達者になるものです。脾肝の癒つた後は達者になるといふことは素人でも言ふ事です。子供の脾肝が治つたらば、此時こそ親達は赤飯でも炊いて祝ふべきです。學問上には『結核に免疫あり』てふ論據を造る一好材料です。

子供の結核で一等多いのは前にも申す通り『腺結核』です。俗に腺病質と申すのに二た通りあります。雙方共頸すぢや、腋の下等にぐり〳〵の出來てゐることは御存じの通りですが、二た通りといふのは『過敏性腺病』と『痴鈍性腺病』との二つです。

過敏性腺病は日本に多い型で、先づ細作りで、顔貌や頰は膨つとしてゐるやうでも、軀幹や四肢はヒョロリとしてゐる、皮膚は蒼白くすき透るやうであるか又は少々どす黒い風のもあるが、兎に角菲薄で脂肪が少い。顔貌はキリリとして、眼は白眼が蒼白くて、黒眼勝に、如何にも賢こさうに見える。一体に神經質で、聰明大人を驚かすといふ風である。その代り一つ御機嫌を損ねると始末が悪い、さうかと思ふとまたキョロリとなる、詰り氣分が變り易いのです。たび〳〵風邪を引いては治りにくいのです。

痴鈍性腺病は日本には割に少いが、貧民窟などや、改善されない特殊の部落など

には稀ではない。西洋の貧民階級には非常に多い、つまりは皮膚が不潔で、住居に光線の極めて少い場合に出來る型です。其容體は、前の過敏性のと反對に顔も軀幹もてぶ〳〵として重くろしい、眼は腫れて涙と眼脂と鼻汁と涎とが顔貌を一層に穢らしくてゐる、頭部といはず、軀幹、手足といはず、彼所此所に赤く腫れたやうな所があつて、押せば潰れさうに思はれる所がある。

過敏性でも、痴鈍性でも、その儘で置けば、追々膿や、腋の下の腺が軟化して、皮膚に向つて破れて來ます。そして年中膿と漿液を出して難儀をします。偶に一つが癒ほると思へば二つ三つ、次ぎ〳〵と破れて哆開く、歳が經つて大人になるに從つて、しばしば肺結核になる、又自然にても癒りもするが、醜い瘢痕を殘します。

腺病質の子供を改善する爲には光線と新鮮なる空氣と、滋養を規則正し　與へることが親の義務であり、時節柄海水浴をさせることは、皮膚粘膜の鍛練に兼て光線と空氣を與へる爲めに最も有効です。醫療としては免疫療法が最も肝腎で且有効で

す。それに兼て新陳代謝を整調にするやうな持藥を與へます。このやうな注意を持續すれば腺病は一年乃至三年許りにして大抵は癒り、屢々腹膜炎の後のやうに免疫的健康體となることが出來ます。

17　家族結核とは何か

昔は結核は遺傳病だと思つてゐました。その譯は一家族のうちにしば〳〵多數の患者を出すことがあつて、時とすると、おなじ病氣の爲に一家全滅するやうなことがあるからです。唯今では醫療が進んで來たから餘り多くはこのやうなのを聞きませんが、十年二十年前には、彼所にもこちらにも結核家族といふ聲はあつたものです。肺病系統といふ言葉の今に絶えないで、往々結婚の妨げになつたり、交際を水

臭くしたりするのもこのせいです。

結核菌が發見されて結核は傳染病であることが知れてからも、矢張り黴毒のやうに傳染もし、遺傳もするものと思はれてゐたのでしたが、現今では『結核が父親の精蟲から遺傳したり、又は母親の胎内にゐる間に子宮の中で傳染したりすることは無い』ときめられました。若し母親が重症の結核に罹つてゐるが爲めに、その子宮に宿つてゐる間に子供に結核が傳染するやうな場合がありとすれば――そのやうな場合は實は極稀にはあるのですが――子供は十箇月の胎内生活を完うし得ないで、途中に流産するか、八九箇月又は臨月頃に死産するか、萬一都合よく生れて出ても育たないものです。ですから、結核家族といふ言葉はあつても、家族の一員として認められる年齢の人には遺傳した結核は無い筈のものです。

そこで、その後になつてから、結核の病氣そのものは遺傳しないが、『結核に罹り易い體質が遺傳するのである』といふ說が出て、親なり尊族に結核になつた人が

あれば、その子とか卑族は、所謂『結核性體質』といつて、詰りは、結核に罹り易い體質を享けて生れるものであると說明するに至つたものです。乃で此類の體質を持つて生れた家族が所謂、惡い星の下に生れた人々であつて、しば〳〵親子同胞相踵いで結核の犧牲となるやうな悲慘な事實を現すのです。この說明は、結核が傳染病でありながら、誰人でも此病氣に罹ると限らず、同一の場所と條件の下に生きてゐる人々でも譬へば甲内は病氣なるが、乙丁戊は健全に過して一生を終るといふやうな場合が多いものであるからして、此場合甲丙が結核性體質であつたのであらうとするには、誠に都合よく說明が出來るので、昨今迄も此『結核性體質說』は廣く承認されてゐるものです。卽ち結核は傳染病であつて、同時に體質病である　體質さへ良ければ、縱へ怎のやうな傳染の機會に遭うても結核に傳染したり、發病したりすることは無いものであると考へるのです。

この說は其前後に於て動物試驗上にも結核菌の遺傳せないことが證據立てられて

一層有力になつたのですが、説其物が有力になつただけで、人生の實際には格別の役には立たない説であります。病氣その物は遺傳しないものであると聞かされて、親が結核であつても、その子や孫に結核は無いものであるやうに思つて、ヤレ安心と一息つく所ですが、後門の方からは、體質が遺傳するのであつて、此體質の人々は他の強壯な血族よりも結核に罹り易いのであり、同樣な體質は親子同胞と相連生するとすれば、矢張り家族的結核といふ怖ろしい結果は現れるのであるから、疾病の遺傳が體質の遺傳と變つたゞけて、中身は依然たるものであつては一向に難有くも何ともなく、況んや此體質と申すものゝ內容は今もなほ貌乎たるものて大體取りとめもないものなのです。

私自身の考へてはこの結核性體質なるものは隨分怪しいものだと思ひます。素より弱い兩親に非弱い子供が多く　頑强な人の子弟に强壯な人が多いことは、出張つた顴骨、低い鼻、美醜、長短それ〴〵が遺傳するやうに、決して否む事の出來ない事實であります。併し結核性體質の遺傳は許しなものです。その譯は私共永年の觀察では、――結核の病人は殆ど外觀の一瞥でも分かるやうに大抵非弱い體格體質が多いことは申すまでもないが――結核患者皆が皆此のやうな體質であるとは限らないて中には堂々たる體格て、筋骨隆々たる人も隨分尠くないのです。斯ういへば體質說を贊成する側の學者は『結核性體質は何も外觀の大小厚薄によるものてはなくて體內部の生理醫化學的成分機能によるものだ』と言ふのでせう。勿論小異を數へ立つれば、多少そのやうな事實もあるてせうが、結核のやうな、洋の東西、古今人種を超越して地球の全表面に略ぼ一樣の流行を重ねて來てゐる傳染病に在つては、恁のやうな小異は殆ど問題にならぬと思ひたいです。私の觀る所では、結核に罹るのは矢張り傳染が主てあつて、親や同胞、同居者なぞに結核患者がある家に子供があれば極めて容易に之に傳染するのに所謂結核性體質といふのが出來上るものてあらうと思ひます。恁うして『結核家

族』なるものも出來るのであるが、兎に角『傳染が先であつて體質は後である』と考へます。

ですから隨分弱々と生れ附いた人でも結核病にはならない人も隨分に多くあり、堂々たる體軀の人でも尠からず之に罹患するのだと思ひます。

此觀方で行けば、前に述べた體質説の捉まへ所も難有味もないのとは違つて、

『體質の弱く生れた子供でも、生れて間もなしに濃厚な傳染の機會から遠ざけておけば結核に罹るとなしにすむ』といふことになり、彼の慘憺たる結核家族といふやうなものは其跡を絶つに至るであらうと信ずるのです。そこで、西洋では兩親又は片親が結核患者である場合の子供は兩親の下で育てずに、公共の育兒所で育てることにしたいといふ運動があります。

結核の個人免疫法が發見され、完成されて、天然痘に對する種痘のやうになり、國民全部を一人一人結核免疫にする方法が出來るならば此上なしであるが、即今未

だそれの出來ない間の結核豫防策としては

『結核家族の子供を出來たその日に他の健康人の手に渡して相當年齢まで育てさせる』が最も有効な方法であると、私は思ひます。併しさういふことが社會的に行はれるやうになることは未だ程遠いことであるからして、今分の所では、せめては醫者と、産婆とが此の心得を以て病親に諭し、子供を持つ病親は速かに覺醒して、子供の養育を健康人に委ねるやうにしたいものであります。

18＝ K夫人への消息

拜啓しばらく御無沙汰致し候。暑中休暇がついのびく〳〵て、づぼらの蟲が筆もつ指まで喰ひ入りたりけん、何卒御容赦被ト度候。是よりはッと心を入れかへて、

幾分にても世間と皆様のお爲めになることに心がけ申すべく候。

さて、今日は小生の親しき友人のいとし妻にして、三人の子供の母たる、あなたの過ぎにし養生のことにて、思ひ出のまゝを、おなじやうなる人の妻の爲めにと書き綴り可申候。

げに光陰は矢の如しとは、ウマいことを云ひたるものにこそ候へ、をとゝしの春牡丹咲く庭の離室に、K君の愁はしき依頼につれられて、あなたを見舞ひ候てより、はや二ヶ歳となかばに相成候

その頃あなたは、今はかぞへて三歳の百合子を身にもたれて、八月なりしと覺え候。しかも熱に臥し玉うてより、三月にして、晝夜に咳嗽さへあり幸なるかな、榮養はまださまで衰へ玉はざりしが、妊娠といふ重役をもちて、二豎の見まひのすてに輕からねば棚に上る前の蠶のごと、透きとほるやうに血に乏しくなり玉ひたる御痛ましさは、小生にはわが心を毒蟲の螫したるごとく疼を覺え候ひけり。

その頃主治醫のH醫學士にきくところては、それまでにあなたの御身の持ち方を繰り返し〳〵申上げたれどもあなたはこれを御取りもちひなされずはては彼の人はあなたを醜き、頑なる心の持主なりとさへ思ひ居りたるらしく候ひき。

長男の太郎坊は、はやひとり遊びに人の手はかからぬとはいへ、次郎坊はその前の秋に乳母をはなれたるばかりの、まるにては、二つにならぬいたいけなり、K君は家とあなたを顧みるに暇なき忙はしき役目に在りたり、折から女中拂底の頃とて醫者の言葉にのみ從ひ玉ふことの困難なりけるもむりからぬことにてはありけれども、さなきだに、蒲柳の質のあなたの御身にて、たてつづけに三度目の身おもとありては用慎に用慎を重ねなければならないものを、さるにても、その頃のあなたはあまりにいのちの安賣をし玉ふ方のやうに見受けられ候ひき。——づけ〳〵しきひ草は小生の持ちまへなりと御勘辨願上候。——

その頃、をとゝしの五月初め、小生のはじめて診察致し候折の、あなたの御容體

は、今更繰り返すやうもなきことながら、實は肺結核もはや第二期のやゝ重き方にて、あのまゝ、あなたの意志にまかせたらんには、その結果や今頃はたしていかゞなりけん、想像するだにも怖ろしくこそ候へ。小生の立てたる治療方針は、まことにしあわせにも、人なみならぬ妻おもひのK君の全部賛成するところとなりて、ひとつには、感染の危險太だしき太郎坊、次郎坊の爲め、またひとつには、痼疾に惱み玉ふあなたの御身と精神を、しばらく家事より遠ざけ候はん爲めに、強ひて郊外靜閑の地に移しまゐらせたるに候。熱心なる主治醫H醫學士をそのまゝ日々そこまて煩はすことゝして。

妊娠と、肺の疾患との關係は、いろ〳〵なことにて、まことに都合わるきものに候。もと〳〵妊娠は、『生理的の疾病』とも申すほどにて、達者な婦人にとりても、なか〳〵の大役に候。ましてや、身體に何かその餘の故障ある時、此大役を、芽出度仕果せ候はんことは、餘程の用心を要することに候。

むかし、神功皇后さまには、筑紫の濱にて產氣つき玉ひ、いとやす〳〵と御產の紐をとき玉ひて、皇子をばそのまゝ濱の眞砂の中に遺しまゐらせて、三韓征伐に打ち向はせ玉ひぬとやら、または、畑の什事の傍らに嬰兒を產みて家に抱き歸り、臺所の仕度そのまゝになしたる農夫の妻ありなど、嘘の如き實の話も、なきにはあらねどかゝるためしは、ひとゝほりならぬ强壯な五體のもち主の、萬己み難き場合のこと、かよわき質の婦人にとりては、おもひもよらぬ無理のかぎりにて候。

お腹のなかなる胎兒が、母親の血にはぐくまれ、肉にやしなはれ、したがつて、多くの養分と力とを母より奪ふものなるは、申さずもがな、四月五月となりて、胚兒の骨組の硬まりはじめ候頃より後はことに母親の骨の成分たるカルシウムを多量にとり去るものに候。カルシウムは無機界にあつては石灰と稱せらるゝ、石ころの主成分たるに過ぎず候へ共、有機界すなはち生物界にありては、なか〳〵に重要なる成分にして、殊に動物界にては、食鹽のナトリウムとならびて、まことに大切

なる作用を有つものにて候。妊娠にては母親の生きるが爲めに、さほど大切なるカルシウムは遠慮會釋もなく、胎兒の體内にうつり行くものにて、これも彼の所謂『生理的疾病』てふ言葉のおこりの原の一つなりと可被思召候。

折もわるく、結核性疾患は、また、このカルシウムを、齡にもかまはず、男女のきらひなく、奪りうしなはしむるものにて候。あの疾にかゝりたる方々が、身も細り行く上に、ことに骨の細くなり給ふは、おもに、骨格の主成分なるカルシウムを病の菌に奪り去らるゝによるものにて候。

かくてこそ、妊娠と結核の病とが一つになりてかよわきからだを襲ひたる場合にいかに危險なものなること、おほかたはお解り遊ばさるべく候。

あの頃、小生もし、いま四五ヶ月も前にあなたを診察したらんには、屹度人工流産をお勸め申すべかりしにて候、妊娠の二三月にて子供を母より取り去ることは産科にては、たとへば朝飯まへのことにて候。しかし、五月を過ぎての人工早産は、

なか〳〵の難事業にて候へば、八月の身重にて、疾すら輕からぬ、あなたの身に、産科醫の尻ごみしけることの道理さは、あなたの其後、K君より聽き玉ひたることに候。

さるにても、そのあなたを治療して、無事ならしむべき大役を、K家と小生より推し附けられたる、H醫學士の責任の重かりしことよ。彼はほと〳〵泣き出さんばかりにて候ひき。

其後の二月、郊外の清舍に、T産婆を迎へて、今の百合子の勇ましき初聲を聞きたりける迄の二月が、夢とは疾く過ぎさりけることは、互の記憶に昨日のごとく新しくは候はずや。

白狀しませう、小生はあなたを、あれほど憂らしとは、それまで思ひがけざりしにて候。

郊外の清居定まりてより、百合子出産の前後七、八ヶ月のあなたの生活はよそ目

にさへも氣の毒なりしほどなれば、本人たるあなたにとつて、いかに辛らくも苦しかりけん、それは『忍耐と克己の化神』にて候ひき。改めていま一度褒めて上げ候。

喰べ物にすきゝらひ多きは、身に病なき人にても、自らにつらく、傍の目にては面にくきほどのものに候。性來滋養物といふほゝのものは皆お嫌ひなりけるあなたには、K君も、H醫學士もそれまていかにそれをば持てあまし候ひけん。お身に厭はしき疾の起りたるも、あるひは、なかば以上は、食物がお身の榮養に不適當なりけるより兆したるものなりとは、Hがあなたに面晤してはゞからざりしほどにて候、又、女學生時代には、はや食ひの競爭にて、負けたることはなしてふお自慢が惡癖となりて、疾に臥し玉うても、その癖は少しもあらたまらず、胃の擴張と弛緩をさへもち玉ふ身にあられもなく、毎食はせこんどの針の三たびまはらぬ、三分以内にてかたづけ玉ふにて候ひけり。そのやうなことしては、鵜とまをす烏すらも、胃病を起し候はんと小生の申し候ことまだお忘れはおはすまじく候。

ついでだから申してしまひませう、あなたのその頃の神經は食物のわがまゝよりも一層はげしきわがまゝにて候ひき。他人の申し候ほどのことは、ほとんど皆、逆にとりて、わるき方にばかり解釋し玉ひければ、さしもやさしきK君までが、日々困りぬきゐたるにて候。

だが、郊外に移り玉ひてよりは、それほど名高き食物の好惡も、競爭向きなる早食ひの癖も、さしも拗ねくれたる神經過敏も、たとへば神樣がとりかへ給うたりとおぼゆるほどにあらたまりて、H醫學士の薦むるもの、看護婦の理りたるもの、何ひとつの小言もなしに攝りいれ玉ひたる『一椀の米飯には十分以上を費して、嚙みこなすべし』てふ掟をば堅くも守り玉ひたる、狂へるかと見ゆるまでに激しくなりにたる精神の駒の手綱をいみじくもおのづからひかへて、菩薩の如く柔順しくなり玉ひたる、ましてや、太郎、次郎の可愛し子をも半歳は見せまゐらせずと、小生の申しけるは、心にもなき夜叉の行爲なるを、聰くもきゝわけて、とりわけ、子供等

に危険なる咳嗽と痰の出でずなりける、その年の十一月首め、大阪にてK君が慈愛の下に、乳母にて育ちたる、百合子と倶に、三たりの子供打ちつれて、あなたを郊外に訪ねさせるまで、顔見たしともいはで辛抱し玉ひける、いづれのひとつを行ふも、まことにお豪らきことなりけりと、小生今に感服致居候。

おなじ頃、時をりは、あなたとK君の前にて噂をも致し居り候M氏の夫人は、齢ばへもあなたとおなじほどにて、肺のいたづきもあなたのその頃とくらべて、やゝ輕き方ぐらゐにて候ひき。M夫人は、もとは如何なる生立ちにて候ひけん。つねに煙草を嗜み給ひ、時をりは、酒のかをりさへも致せしことにて候ひけるが、幸か不幸か、夫婦のなかに子供は持ち給はで、まことの養生に入り給ふには、あなたとかはりて、いとたやすきことなりしにて候。心ばへやさしくも、いと氣輕き方にて、小生の進言に從ひ、一時は酒はもとより、煙草もまた、さそくに、やめ給ひて、小生もまことに感服してゐたるに候。一時がほどは、疾もいちじるしく懈りて、血色

も、身の目方もともに、まし氣味にならせ候所、其後いかなることにや、やゝ急激に悪き方に陥りて、小生共が、いかほど骨折り候にも、良きめは見えがたきにて候ひき。小生はそが悪變の原因をたづねあてんとて、いかほどか心を苦しめ候ひけん。後に到りて、M夫人の養生は、いはゆる『一日温めて十日冷やす』の類なるに氣附きたる時の小生の腹立たしさ、おのが身に痼疾をもてる人のおこなひの愚しさ、御推察下さるべく候。

服藥と、すなほなる禁慾のおかげにて、咳嗽も懈り、熱すらはやく去りて、意外に快よくなりたるM夫人は、輕率にも、肺の疾は與し易しとこそ見絞りたるにて候。間もなく、煙管に親みはじめ時には盃さへも取り上ぐるほどに無用心になり、その上、子なき夫婦に無理からぬことにはあれど、夫人の熱の去り初めて間なき頃よりは、夜の掟の、まゝ、緩みがちなりしことゝ推察したるにて候。同棲のたのしみしげきことは此の疾にとりては女子にも男子にも大の毒にて候。

M夫人の病氣は、その後より、昨今に至るも、まことに一弛一張にて、本人はもとより、M氏も、主治醫もみな、心の張りのつゞきかねたる樣、氣の毒至極に候。

梧桐の葉風婆娑として秋深く候。北時雨吹き送る木枯らしは今より何處の野を通りやゆかん、あなたの其後には、始終春風駘蕩として、をゝしの十二月末つかた郊外の家をとり擴げて、其處に睦じき家庭——K君の其時の言を借れば、蘇生せる家庭——を作り玉ひてより、やがて二タ歳を迎ふることに候。それよりの御生活振りも、その以前とことなり、著しく改造のまゝを持せられ候やに傳承、かげながら、常に御歡び申し居り候。愈々御加餐御揃御清榮祈上候　草々

19＝『啖ふ』といふ事

食事のことを『御飯』とは一體何時ごろから誰が言ひ出したのでせうか。朝は朝飯晝は晝飯、晝御飯、夕食、晝食といふ塲合もあれど、多くはまた、晩めし、ばん御飯と云ひます。太郎さん、花子さん御飯ですよ、と下女もお母さんも申します。食慾はおありですかと訊くかはりに、御飯はいけますかと、くだいたつもりで、醫者までがいひます。馬鈴薯と、蕪菁を主食とする、歐羅巴の下宿の婆さんは、私などに機嫌をとる積りで、時たまには、米で菓子を造つて、それ、これが貴方のお國の主食で、懷かしいでせう、などといふ。考へて見れば、それもさうである。堂島の相塲の高低は、私のやうな生れ附きの呑氣坊は別として、日本國民の、生産、費消原被両造の頭にピン〳〵と響くのださうですから。ツイ數年前には米が圓に二升買へないとて所謂米騒動、大阪あたりでは、泰平の世に、天保の大鹽騒動ほどの大騒動を起したのですから。

お米に御飯。これはそも〳〵どういふものなのでせう。大は五間八間の大きさを

もつ鯨の肉から、小は、先頃暴利征伐てさん〳〵に苛められたちりめんざこや、佃煮の棘鰭に至るまでの魚介殼蟲、さては此世の地獄さながらに、内地だけでは足らずとて、支那朝鮮からまで輸入して屠り喰はれる、牛、豚、羊、馬の膏肉脂胖、野に遊ぶ狐、狢や、猪、穴熊、空をかけるは雁、鴨、鴫、つぐみ、大地に生えて日に育つは、稻はお米のなる木だから、申すまでもないとして、その他の青いもの、殆ど何とて一つ人間の食べぬものとてはないほどに、みな〳〵人の口にはいつて行くありさまの怖ろしさ、色卽是空は昔のこと、食卽是空、食べることを誰が『くう』とは言ひ出したのやら。

私は今からすこしのあひだ、この『くう』ことを申してみませう。結核の話もだいぶん流れ〳〵て、この所、一寸『くひ』に引つかゝつた態です。

その先づ手初めに

『お米の御飯』を平げてかゝりませう。

私など貧乏人が大阪から京都まで用向て旅をするとして、三等汽車に乗るかはりに、一二等にのるとすれば、それは、身分不相應な贅澤だと言はれませう。その上に、餘けいな見榮をはるつもりて、一人の旅に一等の切符を二枚三枚買ふとしたらばどうてせう。氣狂ぢやと誰でも言ひませう。しかし、私の觀る所では、三等切符一枚のかはりに、一等二三枚を買ふ氣狂よりも、作付段別三百幾十萬反、年產六千何百萬石、長の夏中、國民の最大多數が汗と脂を絞つて作り上げる瑞穗の米をまだ足らずとして、不味いの候のと小言たら〳〵て、支那、臺灣、朝鮮、印度米を輸入して、六千萬石に疋をかけてそれを一年中にペロリと平げて終ふ、日本の同胞全體の方が、遙に上手の氣狂じみた贅澤者ばかりてあると、私は思ひます。

なぜといふその譯を、あまり六かしくせぬために、手つとりばやく、結論から先に申して、それから實例を申してみませう。結論に曰く、

『米を主食として育つて來た日本人でも米はたべなくても可い。よしんば、ご飯

を食べるとしても、一日四合の六合のと食べる要はさら〳〵ない、一人が一日に五合の、八合のと食べることは汽車の切符を一人て三枚五枚買ふと擇ばぬ、ことほど左樣に馬鹿氣切つて居る。何も外に食べるものがないとしてからが、米だけ食べるは尙更惡いりようけんなり。』

實例に曰く。洋行を思ひ立ちたる男ありけり。――これは、男は一人てもよし、百人てもおなじことなり――船にのりても、遽かに御飯に放るゝは惡しかりなんとて、日本郵船會社とやらの船に乘り込み、その中にて時をりは米食をも食べさせて給はれやと約束して出て立ちける。船にては約束をば違へず、一週一食位は米飯をも捧げ供へけるが、名にし負ふ、船の食事は、朝のむくおきに燒パン、珈琲、朝食、晝食、午後の三時にスープを飲ましめ、五時のお茶には甘く美味しかるべき果子があり、七時に夕食、その上夜食とて、何のことはない食ふ爲めに生きてゐるやうな次第にて、週に一度の米飯は待ちも焦れず、四十五日の海上生活を『くう』

につぶして佛國に上陸し、オペラに時を俟つて、急行汽車も音高く獨逸へこそは着きにけり。

この下手な紀行文もこれては、まづ以てお腹に別條はないのてすが、伯林あたりて、貸間を漁つて、サテ勉强に取りかゝるとしてからが、一入大變なのてす。朝はとうから水のやうに薄い珈琲を二三杯に、二つをかためて拳骨ほどもありやなしやの圓パンをバクリとほり込んて敎室へと急ぎます。それから午後の一時まては講義を聽いたり、研究をしたり、圖書室へ出たり這入つたり、なか〳〵に活動します、また隨分と氣も遣ひます。朝から膨くれてはゐないお腹は、たまから減りやうはありません。如何に船賃で拂つてあるのだからとて、あゝも阿漕に食べなくてもよかつたものを、七遍、八遍鱈腹喰ひ拔いた罰は覿面に酬うて來ました、一時がうつてから、モー眼が見えぬと言ひたげな貌をして、晝飯屋へと驅けつけます。晝食は道に獨逸人の本膳だから、餘ほど奴等も食べるてあらう、そのつきあひをするなれば

小柄な瑞穂の國民には、ハチケルほどになるてあらう、と思し召すのは御尤ですが戰爭前の一馬克、四十八錢にボチを加へても五、六十錢ですます晝食はその後になつて馴れてからこそ、お腹の蟲も承知しますが、船でさん〳〵食べ擴げた胃の袋にはなか〳〵これては足りそめもしません。先輩や、傍の見る目に氣を兼ねるでもなし、兼ねないでもなしして、人並なところて切り上げて、公園あたりを散歩して、獨逸人の午睡の時間をやり過ごして、モーハヤケロリとなつたお腹を抱へて教室へと參ります。それて晩の八時がうつまては、何のわき目もふりません。電氣燈は北歐の冬ならば、モー三時からついてゐるのに、晩の食堂はセメテ晝よりも、と初めのうちは思ふのですが、偶にビールの一盃を二三にする位のことはありとも、食べ物は、晝のよりも通常は劣るのが、おきまりてす。これてカロリーはチャンと二千と何百、ブフナー、ツンツの計算て衞生學上、況んや小男の分際で、この上食ひしん坊をやることは、ソレ一人に二枚の汽車の切符だとあります。

四日六日はこれぢや命が續かぬわいと思ふほどですが、八日十日と日が經つにしたがつて、妙なものてす、格別痩せがみえるてもなければ、このうへ、眼がへつこむてもありません、かへつて身も頭も輕々と覺えて、いや〳〵食べてはグツタリとして暮したりける船の上にゐた時よりも、氣分も、身體の具合もズンと良くなりました。

尙一つの妙不思議は、ぴらうな話てすが、後の方の排泄物です。それが一日一回小指ほどの大きさて、ころりと出るのがお極りになつて終ひました。色とて何の山吹色なものてすか、くろずんだ不氣味なものてす。『花百句きばり出したり窓のうち』とて、小僧が圃て油をとつてゐる圖に巴扇さんが賛を加へたのを思ひ出しますが、此句の値打のあるところや、一氣にして黄金の山を築き、などいふのは、まつたくお米の御飯をサラ〳〵グツと嚥み下す大和民族にかぎつた現象であるんてあります。

大は小をかねるといひ、何事ても多きは少なきに優ると思はれ、ことにほんもの

の黄金なれば敢て多きを厭ふことはありませんが、排泄物としての黄金の山ばかりは多きを以て誇ることはてきません。一體に排泄物の多い譯は胃腸の消化の不十分なことを意味するので、不消化物を攝べた時に限りそのかさを增します。ですから乾草や、ほし藁だのゝ不消化物を澤山にたべる牛や馬は御覽の通り澤山の山を築きます。モットひどい排泄物を出すのは乾いた材木を食べる白蟻で、これは食べる古材木のうちには滋養分が少いから食べたかさと殆どおなじほどの糞を出します。そこて、白蟻の寄生する建築物は彼等の糞の堆積するを見て發見する位です。モ一つひどい奴は蚯蚓てす、蚯蚓の體の內部は殆ど皆腸てあつて、土を食べて、その中から幾らかの養分を吸ひ取るのてすが、土ほどの不消化物は類がありません、裏門から出るものは大かた奴さんの體ほどの大きさがあります。かうなると日本人の排泄物の嵩の多いのは白蟻や蚯蚓のお仲間なのてお氣の毒とも何とも譬へやうがありません。それが皆お米を無暗にたべる結果だとすれば、お互に何とか考へなければな

らないてはありませんか。全く以て國辱問題です。

私の考へては、我同胞が米飯を主食とすることを改めるならば、いろ〳〵の難問題が、從つて容易に解決がつくと思ひます。詳しくは別の機會に讓るとしても、早い話が、米を食べることが、私の考ふるやうに現在の半分か三分の一て可いとしたならば、所謂食料問題は一遍に解決します、信越以北の寒い國々ては稻田を廢めて冬作を主とすることになれば、頻々と起る東北地方の米の饑饉は無くなりませう。稻を作るが爲めに年一作しか出來ない其他の日本海に沿ふ地方ても、雪の下て根を張る麥を作つて、夏は相應の作物を取ることが出來、そして國產を增すてせう。榮養學上ては米飯てお腹を膨らすことは所謂『偏倚食』てあつて身體を完全に養ふことは出來ないのてすから、之を適當量に改めて、他のいろ〳〵な物を混食するの習慣になれば日本特有の風土病たる脚氣は其迹を絕つてせう。おまけに、上に申すが如く排泄物が減少するのてすから、差當り大都會の屎尿問題なども大いに樂に解決

するてせうし、都市計畫の如きも是れて以て速に捗るてせう。お臺所の仕事が簡單になつて、女中の手が省け、國の生産力を增すてせう、女中拂底を歎くことも減ります。

かゝる世間的な問題を別としても、個人の體に取つて、今迄に知れてゐるまたは是から知られなければならぬ、生理病理學上の障害がお米を搔き込むがために、實際幾らあるか知れません。日本人が西洋人にくらべて、早く老耄するなども、米を主食とすることに與つて居ることが餘ほどあるやうに思ひます。なぜといふその譯を少しく申して見ませう。

人間が生きるが爲めには養分としていろ〳〵の成分が要ります。六ケしくいへば蛋白質、脂肪、含水炭素とそれにヴィターミンです。蛋白質――往々淡白質と間違へて、あつさりした食品のやうに思ふ素人たちがありますが、さうではありません――と申せば、肉類、魚類、鷄卵等の主として動物性食料品を申しますが、之の生體に

必要なことは勿論として、脂肪類、之は種々のものに含まれてあつて、例へば、肉類、魚類の脂肪、植物の油類、等があつて、皆相當養分となります。ヴィタミーンは之もいろ〳〵ありますが、生の野菜類にある壞血病を防ぐヴィタミーンや、穀類の皮のうちにある所謂脚氣ヴィタミーンだの、脂肪類に含まれる、發育ヴィタミーンだのがあります。含水炭素は重に植物性の成分であつて、人間は穀類から之を攝るのてすが、日本人は之を米を食べることてゐます。

筋肉勞働をする人々てもよくいふことてすが、麥飯を食べ又はパンを食べてゐれば、お腹がすいて仕やうがない、ドウしてもお米の御飯をたべてゐなければ力仕事は出來ないと。私の子供の時に、チョイ〳〵家の仕事に來る、年寄つた木挽さんが若い時には日に三升の飯をたべなければ、仕事が思はしく出來なかつた、などゝいつて、大食の自慢をしてゐましたが、要するにお米の御飯は胃袋の中に長く滯在するといふことに歸着します。そして胃袋が懸命に働いて漸くに少しかたづけた頃に

は、人間は、殊に筋肉勞働をする人々は、空腹を覺えます。そして、また、直に詰め込まなければ働けないやうに感じます。筋肉勞働をする人々は、マアそれても可いとしませう。おなじやうなことを、筋肉勞働をしない人が、日々行ふとしたならば、その結果はドウでせう。それも、ホンとにお腹が空いてからなればまだ可いでせうが、實は此頃のやうに日の短い時候ですと、お腹は空きもせぬのに、食事の時刻が來たとて、例の消化しにくい米飯を掻き込むのですから、胃袋の中には、絶えず幾らかの食物があり、胃は絶えず、消化の仕事をしなければならぬことになります。仁王さまのやうな體格の人でも朝から晩まで幾日も〳〵ぶつ續けに仕事をするとは出來ません。

頭腦のはたらきも休養を要します。胃袋の消化の仕事もまた、それとかはりはありません。必要な時に十分な働きをさせんが爲めには、適當な休養を與へることが大切な條件です。胃袋が、いかに現今の勞働者達のやうに不平を言はないからとて

毎日々々朝から晩まで、のべつ幕なしに働かせては、堪りつこはありません、そこで胃袋も時に盟休をやります。本人のつもりでは、さほど惡いものを食べたとも思はぬのに、むねが惡くなつて、ゲロゲロと突きもどして來ることのあるはそれです。さうして、三日も四日も、長い時は一週間も十日も、思ふやうには、必要な量も食べることが出來ないやうになり、初めから食べなかつたよりも惡い結果になります。かやうな塲合は、ことに御飯をたべる人に多いので、つまり米が、飯としてたべる時は、甚だしく不消化だから起ることです。

私の考へでは、日本人全體が平均米五合を一日食とする必要はないと思ひます。せい〳〵三合か、筋肉勞働をやらぬ人では一日二合以内で可いと思ひます。その代り、いろ〳〵の副食物、例へば、野菜類、果物、汁物類等を同時に食べるが可いです。そして、御飯は

『必ず。良く咀嚼して食べると』

にして、丸粒の飯は決して嚥み下さないことにするのです。或る人は、一口の食物を
ば、卅二回咀みこなしてから嚥み下すべしといひましたが、米飯は、餘ほど良い齒
の人でも五十回咀嚼せねばまる粒なしにはなりません。
多くの人々の食事を眺めてゐますと、ことに米飯を食べるには、齒を使ふ人は稀で
す。自然が人間に齒を何のために與へて置いたかを聞いて見たい位です。ひどいの
は、殊に京阪地方では、常食には副食物を鹽からい香の物か何かですますものだ
から、多くはお茶漬のサラ〳〵で片づけてしまひます 子供も大人も若きも年寄も齒
のない足駄を穿いて歩きます。足駄は齒があつてこそ足駄であると、同じやうに、
口腔は齒があつてこそ、食物攝取の門であるんであります。天の與へてくれた折角
の齒を使はないで、茶漬でサラ〳〵とやらかす事は、天の妙理に背いたやり方で、
身體の爲に佳からう筈がない。
しかのみならず――まだお米の小言がいひ足らん――おさんどんの言前によれば

飯にならぬは浮き世でござるとかで、時には中に骨のあるゴッ〳〵飯をあてがはれ
て、矢ッ張りそれをサラ〳〵やります。驚くべき強靱無比な胃袋の持主で日本人は
あるなあと思つて感服してはいけません。お互の胃袋も、此やうなものは、實は眞
平御免と申してゐるのです。それでいよ〳〵の時には間もなく返納と出かけるので
すが、普通の時でも、無理な仕事に堪へ切れないのです。乃で、食べた口には内々
で、不消化のまゝ順繰に下の方へ押しさげてゆきます。さて結局、都市計畫や、尿
屎處分問題に大議論の種となる黄金の山を築くことになります。
元來含水炭素と申す養分、すなはちお米の御飯は、口中に溜まる唾液によつてこ
なれる筈のものであつて、その唾液を十分にはたらかせるためには、齒でもつてよ
く嚙みこなして、唾液とよく〳〵搗きまぜてやらなければならないのです。それを
よくも嚙まないで兎に角、咽喉を越すからとて、サラ〳〵グウとやらかして終ふの
は、譬へて見れば、割もしない大材木を竈の中へ押しこむやうなものでせう。良

く燃えるはずがありません。

諸君何時か試みに決して齒にさはる飯粒のなくなる程、よく嚙んで御飯を食べて御覽なさい、素より普通の食べ方よりも少しは暇も要るが、齒の惡い人々には尙更のこと時間はかゝりますが、平生諸君がお上りの量の半分以内で、それでお腹は十分になります。さうして、物をよく〳〵咀嚼してゐると諸君がふだんやつてゐ給ふことは違つた事に遭遇いたします。それは外でもありません。諸君の大多數の方は、平生物を口中に投り込んで、間もなく、おしまるめて、ぐつと嚥み込む癖をお持です。所が、私の申すやうに、十分に嚙みこなしてゐると、食物は自然と口中の奥の方へいつて、齒にさはらないもの丈が極めて自然に食道の入口が開くにつれて、胃の中に流れ込むのです。かやうにすると、お茶で物を流し込んだり、お汁で口を濕ほしたりする必要は少しもありません。お腹は自然に膨らんで來て、食べ過ぎる氣遣ひはありません。況んや、さゝらの竹や、義齒などを嚥み込む虞などは毛頭ありま

せん。

唯今まで申してゐる事は、達者な普通の生活と活動をしてゐる人々に當て篏まる自然な、生理的な原則なのですが、これが病人となると一層切實に必要になります。

たび〳〵申したやうに、身體の弱つてゐる人々は何の箇所よりも眞先に胃と腸が弱くなりますが、身體は大儀なれば休養をさせて置きながら、胃と腸には決して休養を與へない。イヤ〳〵寧ろ平素よりも餘計に、ヤレ滋養物だの、ソレ食べなければ痩せますぞ、などゝいつて、のべつ幕なしに詰込ませやうと致します。

以前にも申したことがありますが、疲れた馬に重荷を負はせて、無暗に鞭を振りますと、その結果はドウなりませうか。

私共の診る病人の最大多數は、申し合せたやうに、胃の擴張と弛緩症を持つてゐます。胃の袋はまるで護謨袋のやうに大した伸縮性を持つてゐるのですが、護謨の袋でも、あまり普だんに一ぱいにしてばかりおくと伸びきりになつて終ひます。

病人の胃袋を虐待することが周圍の人々の親切であつて、それて病氣が治ると思はれてゐるのですからお話になりません。

結核に食餌榮養療法といふことが最も古くから行はれてゐて、現今でもこれの一本槍で結核を退治しようとする傾きが一般に浸み渡つてゐます。さうして、食餌榮養療法とは、美食膏餌をたんと無暗に押込み、嚥み下すと許り考へてゐる人が極めて多いのです。食物といひ滋養といふは、口腔、胃腸で十分に消化され、必要なる成分が悉く吸收されて、身體の各部に隈なく行き渡つてこそ、初めて滋養であり榮養であるものを、さりとは御無理な無駄費ひ、あたら寶を餘計に使つて、それてかへつて身を毀す、たはけた仕方と申す外はありません。

獨逸人が、英佛米露日伊等の大敵を引受けて、五年に亘る大戰爭をした時に、全國内では食料が缺乏して、國民は皆法律の規定で食糧節約をしましたが、口に入れた程のものは無駄に肛門から排泄すべからずとあつて『食糧節約の第一條件はよく

咀嚼するにあり、嚙みこなす事が十分てあれば、極少量ても身體を支へるに足る』と敎へました。その結果嘗て獨逸の醫學者達が敎へた榮養量、カロリー量等は甚だしく、その根柢がぐらつきました。學說や醫學はグラついても、國民の榮養はそれて餘ほど長く持ちこたへました。

兎に角食物はよく咀嚼して、よく消化さへすれば、從來敎へられてゐたのよりも餘程の少量で健康を保ち、疾病に打勝つことが出來るといふことに違ひありませぬ。

元來天が吾々に齒を生やしてくれたのは、虎や犬のやうにお互に咬み合ふために與へたのではないので、全く食物を嚙みこなすために外ならないのですから、之を飽迄利用せぬのは天の攝理に背く譯です。早飯早糞早走りは戰爭ばかりしてゐた野蠻時代の健康人の事であつて、身體の弱い文明の人達がそんな眞似をする必要はありません。

乃て齒の惡い人は五割損てあり、一倍不幸てす。齒牙を大切にしなければならぬ

事は健康を保ち、疾病から恢復するための第一條件です。砂糖を食べ出してから、人類はだん〳〵この天與の武器を破壞して終ひます。そこで、現に惡い齒牙を十分に整理し、子供の時から朝は勿論、大切なのは夜の就寢前に齒を磨くことです。米國のある州では、學校の體操を廢して、その代り兒童に毎日一時間宛齒を磨かせたらば體操を課してゐた時よりも兒童の榮養は佳くなつたと傳へられます。

『齒の上下內外を朝晩によく磨く事は』廉價で容易な事であつて、慣れさへすれば、忘れる事の出來ない事ですが、これが大人にも子供にも健康保持、疾病退散の神符です。兎に角『消化の良いこと』は身體榮養の第一條件で、消化を良くするが爲めには

『良く咀嚼すること』が是非是非必要なことを忘れてはなりません。

20二　病室は何うすれば良いか

時候がらですから、是から後の寒いあひだの慢性呼吸器病患者の病室をドウするがよいかを少しお話しませう。

元來住居殊に寢室の容積、六ケしくいへばその空氣容積と人數の關係は、寒い中北歐洲あたりの、堅い建物で、二重の硝子戸を締める家屋に在つては非常に重要な衞生學上の問題です。何故となれば、その地方てはドウても寢室をば暖めなければならないのてあり、これを暖める以上は、締め切つておかねばならず、締め切つてしまへば、室內の空氣は外氣と交換することはないので、大勢が一室內に閉ぢ籠るか眠りに就くかすると酸素は刻々に缺乏し呼吸に依つて排泄せらるゝ炭酸瓦斯のため

に、室内の空氣が甚だしく汚染されるので、衞生學上定められた、許容範圍以上に空氣汚染度が高まるから住まふ人々の健康に有害になるのです。

日本式の室でも、極上等の普請であつて、障子は硝子てあり、緣側にも硝子戸がはめてあり、その外に雨戸があるといふやうな、御丁寧なのには、いま申したやうな心配がいります。ところが、幸か不幸か、日本の家屋の構造はこの點では、安心してよいやうにできて居ります。殊に所謂借家建などゝ來ては、例へて『ぎす籠』と申すほどですから、室内の空氣と外氣とは、宵から朝まで頭から區別はないてせう。よしそれほどでないとしてからが、紙障子は、換氣には、まことに都合よくできてゐるので、障子一重が、外氣とのさかひならば室内の空氣はなか〳〵汚染しない、酸素にも缺乏はしないのです。その上紙障子は、割に、保温力があつて、室内を暖める場合には外氣の冷たいがために温度を奪はれることが硝子よりも少いのです。日本の紙障子は、このやうな最新の衞生學上の見地から發達して來たものでは

ないのであるが、兎に角此點ではうまい具合にできてゐると思はねばなりません。

ところで、こゝまで無難な紙張障子は、その外の條件が惡いがために實はメチャ〳〵なのです。第一は非常に破れやすいことです。第二はたてつけの惡いことです。室内を必要に應じて暖めるとしても、障子が穴だらけてあつたり、建附の間が拳骨がとほるほどもあいてゐたりしては、折角日本障子の効能を說いたことが臺なしになります。この邊の注意が行き屆いてゐれば、日本室でも病室にならないことはありません。

さてその次は暖房ですが、如何に紙障子が換氣がよいからとて、室を暖めるに木炭をドン〳〵たくことは、何としてもいけません。以前には、紅くなつた炭火を用ふるならばよい、と申したのですが、炭が燃える間は、それで可い譯はありません、最近本邦の學者の研究では、炭は火として熱を發する限りは、毒瓦斯を放出するといひます、瓦斯や石油ストーヴもおなじくいけません。つまり一切の燃料を煙突なし

の仕かけて、室内で焚きはなしにすることは、酸素を消耗し、炭酸や酸化炭などいふ毒瓦斯をつくることになつて衛生に不適當です。若し經濟上に厭ひがなければ又たは、水力電氣が非常に安價に供給されるやうになれば、電機暖房は實に理想的でせう。しかし、現今では都會地の便利のよい處でも、看護にも適當な廣さをもつ病室を、嚴寒の夜半にも電熱でもつて七十度位に暖め置くことは、近ごろの辭でいへば消費經濟上可なり高い負擔になるでせう。中庸を得た、頃合のもので、極新しい式では、獨逸製ユンカー式やら、アメリカ製ピース式等の石炭ストーヴがあつてその値もあまり高くない上に、石炭の消費量は極めて少量で、温が長く保ちますが、之れには煙突をつける必要があります。病室の隅に煙突を附ける覺悟だにあらば、私はこの石炭ストーヴをお勸めします。これならば暖房のために室内の空氣を汚染することは斷じてありません。

これは假りに室を暖める場合のことを申して見たので、小兒の急性の呼吸器病な

どには暖房に注意することを必要と認めますが、肺病などの慢性病には素より暖かであるに越したことはないとして、必ずしも暖房を必要としないやうです。

空氣は汚れても暖かにしておくがよいか、慢性呼吸病ではドチラかと、訊かれるならば、私は猶豫なしに、後の方がよいと斷言します。さうなれば、吝ん坊もよろこべば、無精な看護人も喜ぶでせう。ところが、慢性呼吸器病患者の病室を暖めないですまさうためには、吝ん坊も、無精者も、倶に喜ぶ譯には行きませぬ。

それには先づ、寢床の詮議からしてかゝらねばなりません。私の知る限りでは、關西地方、殊に大阪市内及びこの附近の、多くの家庭の寢床は、縱へ一夜の眠りのためにも、安息の場所として、なつてゐませぬ。況んや、三月も半歲も寢てゐなければならぬ、剩へ骨立した病人の寢床としては、多くは甚だ不親切に出來てをり、病人もそれと心附かずに寢てゐる一事があります。それは敷布團の薄く、堅くして

掛布團の厚く、重いことです。お醫者すらが、――我家もそれですましてゐるのか――寢床の注意を與へてゐない場合が多いのには驚きます。私の欲する所は之と反對で、敷をウンと厚くして、掛を輕くフワリとさせて欲しいのです。出來得るならば、柔かい藁布團を敷いてほしい。さうした後の病人の體の樂なことは、その前と比較にならず、病氣の經過に佳いことも申すまでもありません。藁布團が手に入らなければ、あり合せの大布團を五枚許りも重ねてお敷きなさい。――この敷布團の儀は夏でもおなじことに願上度候。さうして、もしそれが、暑さに堪へぬ節は、布團の上に薄莫蓙を一枚おしき遊ばされ度、さうすれば決して暑苦しきことはゴザなく候――今は冬だからその上に毛布を一枚又は二枚、それを折り返して狀袋のやうにし、お尻の方から這ひ込ましめ、上には輕い布團を一枚置きます。いよ〳〵寒い時に、せい〳〵小さな湯タンポでも一つ押し込んでおき、肩かけやうのもので首をまいておけば、たとへ吹き曝らしのぎす籠のなかでも、體温がある以上は寒くはあ

りません。これなれば、縱し暖房裝置がなくとも、慢性病では差支はありません。唯だ、かうした場合に今一つ注意を怠つてならぬことは、病人が、兩便のためや食事のために、寢床を出る時に、オ、寒いと思はせないやうに、別に温かい衣類を用意してゐることです。

冷たい空氣を慢性呼吸病の患者が、吸うて差支ないかといふことですが、之れは鼻で呼吸をすれば、さらに差支がない。

かやうな用意と理解がついたらば、病室の一箇所は、ドコかで必ず外氣と交通するやうにしておく。雨や、嵐のひどい時には、風が直接に病人にあたらぬやうに氣を附けてやる。

こんなにしてまで、しかも寒さ、冷たさをもかまはずに、呼吸器病に外氣が必要であり、市内に住ふよりも、郊外清新の空氣が適良であるのです。

21＝肺患と轉氣療養

清澄な戸外の空氣が肺患に特に有効である譯を今日はお話致します。日本で轉地療養といふかはりに獨逸では轉氣療養といふことや、空氣の成分にもいろ〳〵あつて、そのうちに我々地上動物に必要なのは酸素であることなどは、嘗て一ト通り申しました。

そも〳〵人體に禍害をなす黴菌類卽ち病原菌はチーフス菌でも、コレラ菌でも又は昨今大阪市民を大いに脅かしてゐたペスト菌でも、乃至は赤痢、破傷風その他何の病原菌でも、或は又人體は病原をせない普通の黴や腐敗の菌類でも空氣が劇しく流通する所、言ひ換ふれば酸素が盛んに接觸すれば、勝手な發育ができず、多くは

亡滅します。だからして健康住宅の理想を說く場合には第一、日あたり、第二、風通ほしと誰でも申します。是から始まるお正月のお餅でも風通しのよい室に列べておけば黴の生えるのを防ぐことが出來るし牛乳屋が牛乳の消毒をするにも、普通にやるやうに高熱蒸氣で蒸上げて終ふかはりに、特別な裝置て以て、牛乳を瀧のやうに何遍も繰返し流してはまた流して、反復空氣に接觸させると、熱して壞さるべき大切な成分は壞されずに殘りて、黴菌だけが死んで終ふから、是で以て消毒はできるし、榮養價は完全に保存されるし、剩けに牛くさい臭ひまでが除かれた上等の牛乳が供給されることになるのです。昨今大阪のペスト流行區域て家屋の消毒をするに、いろ〳〵な藥品を用ひて消毒する外に、屋根瓦や床板をめくつて、襖障子を取り拂ひ、床の下の土までも空氣に曝し、日光に當るのは全くは空氣中の酸素を利用して、消毒を一層完全にしようとするに外ならないのです。

黴菌のうちには嫌氣菌といつて、發育增殖するために空氣を絕對に嫌ふ破傷風菌

のやうな奴もあり、空氣はあつてもなくてもかまはぬチーフス、コレラ、ペスト其他の化膿菌のやうな菌もあり、又は空氣のない塲所卽ち水の底や、――研究室でいへば――培養液の底では發育し得ない好氣菌と名づくるものもあります。

結核菌はこのうちどれに屬するかといへば、妙な具合に、此好氣菌のうちなのです。卽ち結核菌は空氣のある塲合にかぎり發育することができ、空氣のない所、たとへば、培養液の底などでは發育し得ない菌であります。空氣の成分は前にも申した通り、大部分は窒素であり、酸素が五分の一をなし、殘りは少量の炭酸と極微量の不純瓦斯體と塵埃とであり、そのうちて窒素は普通にはたらくことのない瓦斯であつて、生物界にはたらきを持つものは酸素と炭酸瓦斯が主なものですから、結核菌は矢張り酸素を好むものであると思はれてゐます。そこで患者の痰や唾と一しよにほかに出て空氣中に散らばつてからでも容易に死なず、從つて空氣傳染もするのであり、肺は人體中で最も空氣に接する部分であるから、結核病は他の臟器に少

くして、肺に多いのであると思はれてゐます。

この理窟から推してゆけば、結核患者には空氣を呼吸させないがよい、呼吸をせずには生きてゐられないならば、致し方がないから、なるべく酸素の少い、密閉した室内でおほ勢が密集する汚れた空氣を吸はせておく方がよい、郊外清新な空氣などは肺結核には寧ろ毒である、新しい空氣卽ち酸素の多い空氣を呼吸すれば、肺に寄生してゐる結核菌は、得たりかしこしと旺に發育增殖して、患者の壽命は縮まる一方であらう。

實際どの細菌學の書物にても『結核菌は絶對好氣菌にして、空氣を排除したる酸素なき塲所にては發育せず』

と書いてあるのだからして、理窟は正に上の樣に申さなければなりません。

然るに事實は大にこれに反します。肺結核は、農村僻陬よりも都會地に多く、戸外勞働者よりも室内執務者に多く、廣い家に住む人々よりも狹い室に密住する人々

に多く、普通の住居にゐる人よりも、工場内など汚れた空氣の酸素の少い場所に働く人々に多いのは、そも〳〵これはドウいふ譯であるか　また肺結核の病人は都會地から郊外に出るなれば、すでにそれだけでも非常に住くなり、郊外でもなるべく室をあけはなしておく方が密閉しておくよりもよろしいと經驗され、何處の肺專門の病院にでも臥廊又は仰臥室と稱して、外氣の直接するやうに戸も障子もない建物が造つてあり、事によると、他の治療は一切ぬきで外氣療法の一點張でやつてゐる病院までが外國にはある。

これはそも〳〵何といふほことんなことでせう。經驗が間違つてゐるのでせうか學問が嘘をついてゐるのでせうか。

細菌學の書物に書いたことは結核菌の發見以來四十年、有名無名の細菌學者、醫學者が、結核菌を研究もし、培養もし、いろ〳〵さま〴〵にして持ちあぐんでゐるのではあるが、まさか、これほどにしつくした學問が、嘘を吐いてゐやうとは思はれず、研究室内に培養する東西古今の結核菌はドウ考へても好氣菌であるに疑ひはない。

さりとてまた、結核患者に酸素の多い外氣の有効であることも、戸外に働く人々に肺病の少いことも、既に二千年三千年來經驗されてゐるところの經驗とはいひ條、動かすことのできぬ事實である、これも問違ひてはないらしい。さうして、學問の教ふる所を推した理窟と、三千年來の經驗とは裏とヘラのまるつきりの反對である。

この解決はドウなるか、コホ先生の結核菌發見以來の細菌生物學が捷つか。三千年來人類の間に知れ亘つたる經驗が負けるか。この勝敗をきめる軍配は誰の手に握られてゐるのか。

これは世界中の學者も誰もまだ知らないので、コホも素より知らずに死んだのですが、諸君にだけは、私がそのうちいゝ機會にソッと内々でお話しませう。

22　乳兒の急性肺結核

法律上では子供は國家の所有物(？)であるのか、兩親の所有物であるのか、若しくは子供自身が自身を所有するのか、私は味良うは知りませんが、生物學上では、子供の生成に對して始めはほんの一瞬の作用を父親が爲すに過ぎないのに、母親は其瞬間から十ケ月の胎内化成と一ケ年の哺育をするのですから、大體に子供の所有權は母親に在ると觀るのが至當かと思はれます。人間以外の動物では胎内化成は勿論のこと、生後の養育も皆雌の天職であつて、雄は一切構ひ附けない種類が澤山にありますが、これと反對に雄性哺育は先以て皆無です。詰り母親は殆ど絶對的に子供の創造者であるのですから、當然其所有者は母親であると思ふのです。恰度、作つた

米の所有權は地主になくて、これを作つた當の小作人に在るとする新しい觀方とおなじに。

世のお母さま方に申しますが、私の此申分を讀んで餘り早くお喜びになることは暫らくお控へになつた方が可いかと思ひます。

今日の多くの若いお母樣方は子供所有の權利を十分に保有なさると同時に、一般に申す如き兒童養育の義務といふものをも御理解になつてゐられることであり、これを完全に果すについての方法などは大體皆御承知のことゝ信じますが、唯醫學に關係することは實生活上屢々非常に必要であるにも拘らず、お母さまたるの準備時代にもこれを敎はる機會が少い爲に、御存じない點が多いやうにお見受けします。

私は今日皆樣の御家庭に於いて必要な醫學的智識の全般に亘つて申上げる餘裕がありませんから、相も變らず『結核問題』でお話しを致しません。

『結核とお母樣』これは甚だ對照の禮を缺いては居りますが、まことにお氣の毒に

も此二つの詞は非常に密接な關係を有つ對語なのです。すでに前にも申上げた如く結核は人類共同の敵であつて、最も獰惡な命の簒奪者でありますが、人間が結核に感染するのは皆十四五歳迄の小兒期なのです。そしてだん〳〵齡をとるに從つて、結核菌に出遭つても感染しなくなりますが、反對に年齡の幼少であればあるほど、結核感染の危險が多く、八歳よりも五歳、五歳よりも三歳、二歳の幼兒よりも當歳の乳兒とだん〳〵にいよ〳〵感染の危險が太だしいのです。

就中、乳兒は結核に對して啻に感染し易いといふばかりでなしに、其病狀が非常に惡性なので、若し不幸にして乳兒期に結核に感染したなれば決して助かることは無いといはれます。御存じの如く、大人にある普通の結核は肺結核でありまして、その經過は非常に緩慢なものですから、私が毎度も申上げるやうに幾らも醫治を施す餘地も時間もあつて、澤山は自然にでも癒ほり醫治によつては容易に全快せられる病氣なのですが、乳兒の結核は傳染の機會に遭つたが最後で、ひどいのになると、

急性肺炎のやうな容體で數日の中に死亡する場合もあり、又は腦膜炎を起して十日か二三週間の中に『きのふまで乳房さぐりし愛し兒はひとり黃泉に旅立ちて行く』の哀愁を味はゝなければならないのです。

或人の調査によりますと、滿一歳以内で結核感染の機會に遭へば『九割六分』は必ず結核の病氣に罹り『八割』は必ず死亡すると申します。

私の極親い友人の話してですが、最近其人は怖ろしい颶風のやうな子供の結核に出遭つたといふことです。その話しに據りますと、兩親共達者で、四人目の次男が此正月に出來たのです、上三人は至極健全で、四人目も勿論お母さんの乳で育てゝゐたのですが、店の仕事の都合で、抱乳母を置いたのです、四月の首に先の抱乳母は泥棒と組打をして捉つたほどの豪の者であつたのですが、已むを得ぬ事情で暇を取つて二番目の乳母が、子供の生後滿三ヶ月の時にやつて來たのです。此乳母は外觀は達者のやうであつたが、朝々暫くづゝ咳嗽をする女でした。子供の保育は極めて

注意深く、獻身的にやるので、家の人々も大に喜んでゐたのでしたが、其喜びは束の間であつたのは返すがへすも氣の毒なことでした。

第二の抱乳母が來てから三週間――ハムブルガー博士は乳兒結核の潛伏期間は三週間以内であると唱へます――してから、子供は生れて始めて風を引いた容體になりました。私の友人が聘ばれたのは、子供が二日間咳嗽をして三日目に熱を始めて出した日の午後であつたさうです。市民舘の懸賞診査にても當選しさうな立派な發育の子供であつたさうですが、薄寒い時候ではあり、加答兒性肺炎の輕いのであるを旨を告げて、十分看護上の注意を與へて、翌日吉報を心に描いてゐたのださうです。

併し四日目五日目と病勢は奔馬の如くに進んで、まるで鼻口からして泥水でも注ぎ込んだかの如くに、肺全部を侵し切つて、六日目に腦膜炎の症狀までも加はつて發病七日目に、まるくと肥え太つた榮養が衰へる間もなしに、笑ふことを覺えたばかりの可愛い駿二――子供の名前です――は夢の如くに敢なくなつて終つたのです。

駿二坊のお父さんは土地の實業家の中でも傑出した人物であり、或信仰を有つた人で、同時に眞理の探求に理解のある人であつたが爲めに、主治醫の熱誠に酬ゆる心を以て愛兒の遺骸を病理解剖室に送つたのです――病理解剖の後は誰人に見せるとも差し支ないやうにきれいに縫ひ纏つて、家に連れて歸ることが出來ます――某博士執刀で行つた病理解剖の結果は、駿二の死因は加答兒性肺炎ではなくて、思ひも設けぬ、急性肺結核と結核性腦膜炎であつたのです。炯眼な主治醫が二番目の抱乳母の痰を檢査して結核菌の存在を發見し、嬰兒の病床に立會つた某々の博士達と均しく不審を打つた傳染の源を明かにしたのは其翌日のことでした。

お母樣方に申上げます。普通の大人はたとひ結核菌の渦まく中に――例へば私共のやうに――立ち入るとしても結核に罹ることは、先づ無いと謂へるのですが、子供達は結核菌の爲めには存分な發育をするに持つて來いの培地なのです。而して子

供の身を燒く火事の火元は咳嗽をする人間なのですから、乳母だの子守だのに限らず、親い親類の伯母さん伯父さんでも、孫は子よりも可愛いと仰しやるお祖父さまお婆樣でも乃至は女中雇人の如きでも、事によると、お母さま御自身でも、乳呑兒の側で怪しい咳嗽をする機會は、假令半日數時間であつても、取り返しのつかないことになるかも知れないのです。萬一にも乳兒を抱いた母親が感染の源を自身に有つてゐる場合がありとすれば、片時も速に子供と隔離することが所謂焦眉の急務です。若し又姙娠中母體は肺患のあることが知れてあれば、出産に先つて豫め乳母又は適當の準備と手筈を整へて置いて、出産の日からして他の健全なる人に養育せしむることが、子供といふ人格の持主に盡くすべき義務でせう。呱々の聲を揚げたる第一日が結核感染の危險最も甚だしい日です。

滿一年を經過すれば、子供は既に著しく結核菌に對する抗力を增して來るので感染發病の危險はだん〳〵に薄らぎますが、それでも滿二歳迄は感染の機會に遭へ

ばその罹病率は非常に高いので、或る人の調査では、滿一歳より二歳迄の間に咳嗽ある患者に接したる小兒はその八割迄感染發病し一割は急性結核で死亡するとの事です。

人間の美醜長短は朝顏の花の色、金魚の鰭とおなじやうに、偉大にして微妙なる造化の藝術によつて、親から子に、子から孫にと遺傳するものですが、傳染病は黴毒以外は、親から子供に遺傳することはありません。ツヒ十四五年の前迄は一つの家族に結核患者の簇出することの多いのに驚いて、結核は遺傳するものゝやうに思つた時代もあつたのですが、其後いろ〳〵研究觀察した結果『結核は遺傳せず生れたばかりの赤ん坊には結核なし』といふのが近頃の學者達の一致した意見です。極稀には胎内感染と申して、母體が重症の結核である場合には往々にして、生れた時既に結核を有つてゐることがありますが、このやうな子供は大抵育ち難いものですから、普通には『赤ん坊には結核なし』と見てよいのです。

若し生れた儘にて五年又は十年間子供が傳染の機會に出遭はなければ、其間に結核菌に對する抵抗力が非常に鞏固に出來上りますから、其後は學校に行つても、世間へ飛び出して行つても割に危險は少くなります。幾ら弱い、病的な親達の子供でも、生れるや否や感染の憂のない人達の手で育てるならば、結核には罹ることなしに濟むことは請合です。

跳ひ上りの亞米利加人は優種學の教ふる所だとあつて、結核患者の結婚を州の法律で以て禁制し、結核の子孫を殖やさないといふ亂暴極まつた事を實行してゐるさうですが、今一歩を進めて、出産した子供を適當の方法で他で養育することにすれば、禁婚の如き冷やかな鎖をもつて個人の幸福を縛る必要はないと思ひます。亞米利加人の頭痛を疝氣に疾むことは、お互の全く要らぬことですが、差當り日本の社會衛生施設でも結核感染の惧ある子供等を、都合よく安全の場所で養育する方法を立てるならば、社會が結核の慘害に苦しむことは最も著しく減ずるであらうと信

じます。が、これは私共現在の社會人に取つてはまだ見ぬ夢を說くやうなものです。だから今分では病親が眞に子供を愛し、その健全なる發育を希望するならば、生れる前から準備をして置き、生れたその日から健康な人の手に養育を委ねることが必要不可缺です。

現在のお母さま方に取つて今一つ大切なことがあります。それは『肺病の新しい觀方と豫防的治療』のことです。

佐多先生は數年前から肺病の成り立を三段に分けて觀察することを唱へられました。——此佐多學說は西洋でも近頃これと同意見が出て、今では承認された學說です——。それによると、結核菌が子供の時に人體内に飛び込んで、先づ頸部や、腋の下や、氣管支のぐるりや、肺の門口だの、腸間膜腺等の淋巴腺に留まつて數年又は十數年を經過します、所謂『結核の潛伏期』であつて此際には未だ肺には故障はありません。年齡でいへば知春期前迄です。これが結核の第一期です——肺病の一、

二、三期といふ昔の言ひ方とは違ふことに御注意を願ひます――。

それから、體内にある結核菌の爲めに、菌に對する免疫性が其人體内に、漸々に出來て參ります。又其間に妙な具合に身體の變調が起ります。前に『子供の結核』のところで申述べたやうな腺病質といふのも多分此時期の變調です、此時期が肋膜炎だの、腹膜炎だのゝ起り易い時期で、これが佐多先生の所謂第二期です。此第二期は人間の幾歳位の時に當るか、又は何ケ月幾年續くかは人々によつて違ひます。それに續いて、或は此第二期と前後して、肺に故障を起して來て『初期の肺病』といふ順序になります。

詰り、結核の經過全體を、菌が人體内に侵入した刹那から大きく別けて見れば、肺尖加答兒といふ肺病の初期でも、全體の經過から見れば第三期に屬するといふのです。本年になつてから、佐多先生は此次に今一期を附加へて第四期即ち『治癒期』といふのを唱へました、これは第三期即ち肺病を起したものでも、良く治癒するも

のであるからです。今一度此分期の一覽を作つて見ると、

一、結核菌侵入して淋巴腺に留まつてゐる潜伏結核の時期……第一期

一、潜伏結核あるが爲めに多少の免疫性も出來、同時に身體變調を起した時期……第二期

一、肺に故障を起し又は腸結核喉頭結核などを起す時期……第三期

一、それからして肺病の治る時期……第四期

諸君、此時期の分け方を御覽になるなれば、結核菌が人體に這入つてから肺病を起す迄には隨分永い間を人體内で費すものであることに氣附かれるでせう。此長い年月の間隔のあるといふ點が大切な眼の着け所です。而してこれは皆知春期迄の子供の間であつて、未だ肺病をこそ起さないが、菌は『恰も盗の夜行くが如く』にこそり〳〵と體内を潛行しつゝある時期であつて、矢張り病氣であるに違ひないのです。そして病氣の最も輕い、從つて最も治療し易い時期なのです。

『禍の芽は嫩にして除かざれば終には斧鉞を用ゆるとも及ばざるに至る』

唐人の寝言ですが、しかし甘いことを言つたものです。

人類の公敵、代ふる物なき大切なる人命を、最も大切にして多幸なるべき青春期生産の時期に啖ひ荒す人類幸福の害賊、都會病であつて、部落病であり文明病といはれて、アイヌ人や黒ン坊をも好み、貴族病で、貧民病で、乳兒病で、小兒病で、青年壯年老年皆倶にこれに殪れる。此大賊を剿滅し盡くさずんば、文明の先驅を以て誇りとする醫學の權威は抑も何處に在るか。

豪い罵詈氣で啖呵を切つた次第を次の如くに、お母様方に申上げます。

『成人の結核卽ち肺病は、其根源を小兒期の傳染に發するので、永い潛伏期を經て肺病になるのであるから、小兒結核の豫防と治療は結核豫防剿滅の最大眼目である。而して此時期の結核は、恰度禍の草木を二葉にして抓み除くとおなじやうに、容易且完全に治癒し、治癒の後には免疫性を胎して、却て安全なる人間を造り上げる

ことが出來るのである。』

お母様方よ。序に小兒科醫諸君よ、結核を怖るゝが爲めに『結核の名』を怖れてみす〳〵大切なる時期を逸し給ふなよ。親達よ、小兒科醫よ、諸君は、敵の名を怖るゝが爲めに、押し寄する大軍の前に、故意を閉目塞耳の苟安を貪ることの愚なる國民を眠らせて置きはせぬか。今年先月、卽ち大正十一年七月十一——十三日、白國の首都ブラッセルに開かれたる『國際結核豫防聯盟會議』の主題を

『就學前及學齡兒童の結核豫防』

に置きたるの深意が奈邊にあるかを看よ、爲政家よ、社會衞生當局者よ、宜しく心眼を瞠いてこれを看取せよ。

23 三　安靜平臥療法

今日は安靜平臥療法といふお咄を致します。この療法は讀んで字の如く、身も神も安靜にして、仰臥の位置に、動かざること霜降る夜半の泰山の如くにしてゐることが、肺病治療の方法になるといふ次第です。かう申せば、或る人々は、それは何とも、六ケしい苦行を病人に强るものではないか、人間は病人とはいひてう、もとを質せば脊推動物であつて四足動物である、動かざること泰山の如くにしたならば人間が動物たるの資格を外れる。呼吸の根のとまつた後ならばいざ知らず、苟くも五欲の熱が、攝つた食物のカロリーによつて燃えてゐる間は、君のいふやうな工合には得は出來まいと、仰しやるかも知れません。一應まことに御尤もです。が併し

此處が御相談です。お說のうちに動物學が出ましたから、私もそれを拜借しませう。なるほどお說の如く、人間は四足動物には相違ありません、しかし、おなじ四足動物にも御存じの如くいろ〳〵あります。卵生があり、胎生があります。胎生の動物は多くは乳房を吸うて育ちますから哺乳動物といつて卵生のものよりも一段の進化と見ます。胎生類は母體內では胎盤にくつゝいて育つからして、胎盤類ともいひます。この哺乳類のうちでも、まさか、兎や、狐などゝ、人間とは區別しなければなるまいといふところから、後脚で歩くものどもを選り出して、これを靈長類と名づけました。猿公のともがらとお互人間とが、忝くもその同類です。動物學者は、以上で大體を別けてしまつたつもりなんですが、人間も火食を知つて、鹽氣を用ひ穴居を棄てゝ、家を作り、寒さを防ぐに衣類を纏ひ、燃き火から、蠟燭、ランプ、電氣燈、さては無線電話、飛行機とまで、漕ぎつけて見れば猿公と御同列では恐れ入る次第であるといふ見識が出來て、人類といふ綱目を勝手ながら新設して、項の

毛が三すぢ多いがさゝるとはちがふ、いはんや昔ながらの四足動物とは異なるところのものであるぞよ、と納まりたいほど高等なるものであり、面壁九年を頑張りとほした先輩もあることだから、觀念の極めやうては、四足動物であるなどと品の悪いことをいはずして、塲合によつて、必要があるならば、身も神も平かに、安らけき安靜平臥療法に賛成して貰ひたいのです。それも、若い身そらの一生を寢たきり雀て暮らしなさいと、無理な註文を出す所存では更々ない。なほりたがつて　なほりたがつて、それと知つて見ると、涙がこぼれるほど、癒ろ〳〵としてゐる肺の瘡痍が、ピタリと喰つゝいて、癒つてしまふほんの僅の間のことです。

私はこの結核の咄の初めの頃、結核は不治の疾ではない、否な寧ろ、甚だ治りやすい、しば〳〵目然にても治つてしまふごく性の善い病氣である、これを治す秘訣の要點は病氣のある箇所を刺戟しないやうにして、安靜にしておくに限るといふ意味のことを、隨分しちくどく咄しました。肺の病氣を治すが爲めに、今日更めて安靜

平臥療法を唱ふる趣旨は、全く冀に申した意味と違ひはありません。

そこで、なぜそのやうに安靜にしておくことが病氣の箇所に佳く響くかといふ譯を例によつて少しく解いてみませう。

諸君、試みに諸君の指尖に釘か何かで、ちよつとした引掻き瘡をでかしたと想像して御覽なさい。そして、それてゐて、手先の仕事をするに繃帶も何もせずにおいたらば、どうなりますか。知れたこと、瘡面は日に〳〵大きくなり、穢くなつて、はては膿をもち、それでも構はずとすれば、指は終には骨も露はに腐つてゆき、黴菌はだん〳〵に全身に蔓こつて、醫者の辭では敗血症や膿毒症を起すにきまつてゐます。それを最初のうちか、まだ酷くならない内に消毒して繃帶を施しておけば、二三日か、一二週間で譯もなく治つてしまふ筈ではありませんか。

肺に出來た結核の瘡痍とて、これと理窟において何の相違もありません。否むしろ、指先の引掻き瘡よりも肺の瘡の方が治ほりやすい傾きをもつてゐます。その證

據には、指先の瘡などは唯今もいつたやうに、打ちやらかしておけば一週間か十日を出ずして、生命をも奪る敗血症等にもなるのであるが、肺の結核の瘡は、三年經つても、五年經つても、急には生命をとる段には到らぬのでも、いかに治りやすい性の善い瘡であるかゞ知れませう。

ところて、指先の搔き瘡は、醫師に診せると數日で治るが、肺の結核は五年も十年も治りつこはないではないか、よい加減な與太を言つては困る、と諸君は仰やるでせう、そこが卽ち指先と肺臟との異なる所以であつて、平臥療法の必要なる所です。肺の瘡は指先のやうに、消毒して繃帶を施しておくことが出來ない塲所であるからです。若しも肺の瘡所に繃帶を施して、しつかと括つて動かぬやうにしておくことが出來るならば、四足動物だの、靈長類だのと動物學の講釋めいた長談義は徒事もないこと、平臥療法など、何も要りません。困つたことに、肺は四六時中休むことのない活動の臟器なのです、四肢や筋肉が、働いて疲れたとか、傷ついて疼む塲合は

柔かい布に包んだり、白い繃帶を纏うて安靜を與へることができるのですが、傷ついたとあつても肺の官能は一と呼吸毎に伸縮し震動するのであつて、たとへ秒の針のひと廻りまはる暇さへ絕對安靜は、之また絕對的に許されないではありませんか。

絕對安靜が與へられるならば、肺の結核は手もなく治る。世界中の結核は一月も經たずにその跡を絕つにきまつた。結核療養所などは今晩のうちにたゝき潰して終つてもよい。てはあるが、生きてゐればこそ生き物だ、靈長類だ。靈長類が生きる爲めには、呼吸をせずには居られない、呼吸をするが爲めには、肺の運動を休むることは絕對に出來ぬ。肺の震動を靜かにして置かねば結核は治り難い。寔に餘儀ない事情であります。

乃て絕對的安靜はできないかはりに、せめては比較的安靜ても與へてやらう。

これが安靜平臥療法の本願です。

さてその安靜平臥療法を怎のやうにして行ふかといふ段取ですが、これは何も手

間ひまの要らぬことです。多少の準備としては、厚い敷蒲團が必要です。出來ることならば藁蒲團が一つあれば尙結構です。霜降る夜半の泰山の如くあらしむるには煎餅蒲團では、生身は疼い。疼いところがあつては安靜は苦行になる。疾ある身に苦行を强て身も心も平かなれとは氣の毒なことだ。敷蒲團は出來るかぎり厚くするが可い。さうして上蒲團は柔かに輕くありたい、毛の散らぬやうに白布で包んだ毛布なれば一層よい。近頃は新發明とかで、極廉い眞綿の上蒲團もある、贅澤が許されるならば毛蒲團も可い、毛蒲團の上に毛布をはふれば、身に添ふ具合が更に佳い。萬一その上の費用を厭はぬ人々は、上體の方を心もち斜にあげた寢臺があれば理想的だ。

しかし、そのやうに大げさにしなければ安靜平臥が出來ない譯では更にない、要は神身の平穩を保つがその主眼です。

次には、それを行ふ時間をどう取るかですが、理想としては食事と、兩便の用の

外は、朝から晩まで、夜も晝も平臥するが可い、若しそれ血痰が出たり、咯血したり、劇しい咳嗽や、高い熱のある人々は、食事も兩便も床上安臥でなさねばならぬ。咳嗽も痰も多からず、熱もさほどに高くない人々は朝から晩までさうしてゐなくとも、一日の中に時間をきめて平臥をとるも差支ない。さういふ時は、例へば食時の前後三十分づゝ、または一時間づゝ位は靜かに起きてゐて、その餘りの時間は平臥に移るとしても可い。西洋では何でもかでも、病が輕からうが、重からうがお構ひなしで、寢たきり起さぬといふ主義の療養所などもある。極端なことの好きなアメリカ人では、醫藥一切なしで、素よりその他の療法をも施さず、醫者と看護婦は居るが、それ等は平臥の監督をする見張人にすぎず、何でも平臥の一點張でやつてゐる病院さへある。もとより、それには輕症だけより入院させぬ。そんな氣樂な病院は日本にはない。が兎に角安靜平臥は肺患の養生法として一番簡單で、又た一等有効なものであることを忘れたくない。

これで要點はお終ひです。しかしまた、實行にあたつて多少の注意は要ります。例の四足動物の末孫である人間が、平穏不動の生活をなすのであるから、例のやうな日本人一流の滿腹主義は根本から改めてかゝらねばなりません。それにつれては前に掲げた私の食餌についての話を參考になさるがよい。

その外なるべく無言がよい。獨逸の養生訓には、

『無言は肺患の良藥』

といふ言葉がある。私共の作つた新標語には、

『無言の行、注射するより藥より』

といふものもある。談話をなし、或は泣き叫び、若しくは高吟歌誦一切の發聲は身體の運動よりも、より以上に肺の癈所を刺戟する。噴火の前の地震のやうに肺の傷所を震動させる。無聊のまゝに絶えず傍人と高話をなすやうては平臥の効目はないと申さう。

『高ばなし肺を燒く火に風おくる』

また咳嗽をするにも、痰を吐くにも、出來得るかぎりおだやかにするがよい。せぬですむなら咳嗽などなるべく儉約せよ。

さてかうなると平臥療法も可なりに難かしい辛抱である。これを無難に行るには人によつては多少の修養が要ります。そこが前にもいふ萬物の靈長たる人間の覺悟の極めどころです。勿論極く輕い讀み物など仰臥のまゝで自身に持つて讀むもかまひません。それにも飽いたら、考へなさい。穢土と淨土の境やいかに、キリストの愛、釋迦の悟道、敬天愛人これまたよからう。生物、人類、宇宙の哲理、牽牛織女の戀の解剖、何を考へても暇をつぶすに不足はない。まだも足りないその時は、一歩を高踏勇進し、あらゆる人生の羈絆を絶つて、無念無想の境に遊べ。この境は浩蕩無邊であつて、清風匝地明月水中に浮ぶの天地だ。

實にや安靜平臥療法は願うて得難い人生修養の絶好機會であります。

24＝いろ〳〵な結核療法

結核ほどいろ〳〵な容體を現す病氣もないが、また結核ほどいろ〳〵な治療法をもつた病氣もありません。俗に萬能膏藥は一病にも効かぬ、といふ詞がありますが、一つの病氣で餘りいろ〳〵な療法のあるといふのは、詰りその病氣にはほんとうに効く藥も療法もないといふことを語るものです。だから、結核は謎である、なぞといつて困りぬいて來たのです。私はこの謎を解く約束でこの咄を始めたのであり、大ぶん長ばなしになつたので、モーよい加減にお終ひにしなければならないので、いよ〳〵謎の解決に入る前に、そのいろ〳〵の療法を今一しきりならべて見ませう。

日光療法――之は太陽の光線がいろ〳〵の病原菌を殺す力を有つものであると知

れてをつて、又研究の結果太陽の光線中でも殊に紫外線がその作用を有つものであると知れるに至つて、人體内の結核菌を日光の力で殺さうと考へたのが、そも〳〵の初まりです。戸外で働く人々には滅多に結核患者はない、これ日光が結核菌を殺すに因るのである、乃で結核患者を出來得る限り日光に曝らして置いたらよからう、體内に日光を透徹させる爲には厚い衣類を纏うてゐるよりも薄い着物がよからう。裸體で日にあたればなほよからうといふやうな次第で、唯今では殆ど誰教ふるとなしに日光浴は裸體でやるやうになつたのです。皮膚の蒼白い人々が日にあたつて、ゆで蛸のやうな色になり、又は銅色になるのは見ても氣のよいもので、それだけでも丈夫になつたやうに思へるものです。そこで、これもまた何でも、極端なとの好きなアメリカ人の企みですが、一日が夜と晝にわかれてゐて、折角日のあるうち日光にあたつても、間もなく夜になつて終つては思はしくいなとあつて、晝夜ぶつとほしに明るい場所はないものかと考へた結果、地球の兩極の近くは一年を折半して

夜と晝てあるから、夏は北極の近くへ冬は南極の近くへ行く結核團體を組織して、大きな船に一切の食料や日用品を積み込んで、甲板の上て半歳づゝの日光浴をやつてみたならば、其うちに結核は治ほつて終ふであらうといふ譯て、これを實行したとか實行する計畫を立てたとか云ふことを聞いたこともあります。また西洋では澤山に、

高山療法――といふのがあります。これもこの日光療法と同一の考へから來たもので、空氣の層が厚ければ厚いほど、つまり水面に近い低地であればあるほど、日光のうちの紫外線が空氣に吸ひ取られて日光の治療的効能が減る、だから空氣の層の薄い高山の巓に行けば紫外線が多いからよく効くてあらうといふ考へてす。卽ち成るだけ高い山の巓を撰んて療養所のやうなものを設ける仕組です。

高山にも行くことは出來ない。北極や南極には素より出かけられない、しかも西洋のやうに冬は日光が極めて鈍くて、日はまたきはめて短い塲合に、日光の代りに

なるやうな光線はないかと、考へた結果、人工太陽燈だの、石英ラムプだのこれにあたつてゐれば必ずしも太陽を焦れる必要はないなぞと人智の發達と機械工業の進歩を誇るやうな事になつてゐます。さうしてこれさへあれば、朝日の出るを樂み待つ必要もなく、西に日のかくれゆく夕べを歎くにも及ばぬといふ太平樂な譯です。

それから一層進んでは、

エキス光線療法――となつて、日光や、人工太陽燈では人體の內部まて光線の力が達することは出來ないが、エキス光線なれば人體をばブツとほして終ふのてあるから、體內の結核菌などは手もなく死んて終ふであらうと考へた次第です。

果してこれが皆な人間の註文どほりに甘く行つたてせうか、朝から晩まて根氣よく石の上の龜の子のやうに甲羅を日にあぶつた氣の毒な人々が、皆よく結核の病から免れ得たてせうか、大金をかけて、南船北馬ではない、南極北極をさまよひ廻つたはてが、皆全快の歡びを味はひ得たてせうか、下界をはなれた高山療養所が獨り

結核菌剿滅の手柄をあげ、太陽燈を獨占して背中をこれに晒した人々がみなこの人智の發達に感謝したでせうか、骨をも透ほすエキス光線が、人體の細胞よりも抵抗力の強い結核菌を、人體を害ふことなしに、殺し得たでせうか。

近頃の學說――これもどの程まであてになるやら判りませんが――によれば、この日光からエキス光線までの一切の光線療法は一括して之を刺戟療法と申して、東洋に舊來からある、鍼灸術と同一原則に這入るべきものであると論ぜらるゝに至りました。大船を艤裝して地球の極地に陽光を追ひ、エキス光線を浴びて電氣光學の發達を感謝する効能が、伊吹山の蓬に皮膚を燒くのと同一原則に這入るとあつてはしづの小田卷くりかへし、昔を今もはなはだしく、また情ない次第ではありませんか。迷へる者よ。汝等の暗は果して何時あけるのか。

外科的療法――近來の內臟外科學は非常に發達したもので、心臟の外科手術までやらうといふ勢ひなのですが、殊に過ぐる世界大戰の經驗からして、肺の外科手術

は大々的に進歩しました。そこで近頃獨逸では肺に出來た結核菌の箇所をメスを振つて切り除いて終へば結核も治ほすことが出來るといふので、その專門外科醫者が出來ました。そしてその手術の方式だの、器械だのも澤山に出來、手術後の經過も可なり良いのもあつて、治癒した後の寫眞なども澤山に私共の手許にもありますが、殆ど片肺を切除した後の創痕など、隨分慘憺たる光景を呈して居ります。或人は私共の處でその寫眞を見て、これほどの片輪になつてまでも、生きなければならないものかといつて嘆息しましたが、どんな醜容となつても生きたいがこれ生の慾であり、それを滿足させるが醫術の眞目的でありますから、このやうな手術の發達をも促すに至つたものです。これほどでなくても、肺の外科的療法には、

人工氣胸療法――といふのがありますが、これは空氣又は無害の瓦斯體をその側の肋膜腔內に注入して惡い肺を壓迫固定して、彼の安靜平臥療法の目的を直接に且強力に行るものであつて、時に危險は免れぬが、よく適應を誤らぬならばなかな

か卓効ある新療法であります。

なんといろ〳〵な治療法があるではありませんか。

兎角、溺るゝ者は藁をも掴みます。

嗚呼、奇想天外より落ち來れ、妙計地底より湧き出てよ。

25 結核の化學的療法

この化學的療法といふ言葉は餘り諸君には耳馴れてゐない言葉ではあるが、古くからあるものであつて、どういふことかと云へば、黴毒に六〇六號といふ化學的純粹なる藥品を用ひてその病原であるスピロヘータを殺して終ふ、または、マラリア熱、俗に瘧といふやつを、キニーネだの、メチレン青等といふ化學藥を用ひてその病原

蟲を殺すやうなのを云ふのである。詰り草根木皮のやうな不純な藥でなしに、人間の智惠で化學的に純粹に製造した藥で、病氣の原因をなす黴菌又は原蟲といつたやうなものを都合好く人體内で殺して終ふことが出來、それて人體には成るべく無害であるやうな藥品を發明することが大切な前提條件である。諸君御存じの昇汞水だの、石炭酸水だのはどんな猛烈頑强な黴菌でも殆ど瞬間にこれを殺して終ふほど優秀な消毒藥であつて、無論黴毒菌でも結核菌でも之に出合へば直に死滅して終ふのであるが、そんな消毒藥は皆また人體に猛毒であるので、人體内の黴菌を殺す目的でそれを注射したり、飲ませたりすることは出來ないのである。結核菌を殺すために昇汞水を注射すれば、結核菌が死ぬる前に人間が死んて終ふのである、角を矯めんとして牛を殺してはならない。

乃で結核の化學的療法を行はうと思へば、人體に無害又は無危險で結核菌にだけ有毒な藥品を造り出すか、發見するかしなければならぬ。これは可なり無理な註文で

はあるが、そのやうな場合が全く無い譯ではない、先にも云うた、黴毒に水銀劑や六〇六號を用ふるが如き、マラリアにキニーネを用ふるが如き例もある。コホが結核菌を發見してから、第一に手を着けたのは、結核の化學的療法であつた、が併しその頃の化學方面の智識と進歩は未だ幼稚であつたから、この注文は果されなかつた。世界中の化學的智識ある醫者が隨分これには腦漿を絞つた、初めて稍目星い研究をやつたのが、先づ結核の化學療法の先祖だ。大體に重金屬類の化合物は結核菌を殺すに可なり有力である。銅だの、鐵だの、金銀等の化合物がそれだ。中でも銅と金とがさしづめその代表者で、古くから、今日でもまだいろ〳〵に研究されてゐる。現今世界で一番有名なのはリンデンといふ人の作つた銅の製劑である。このリンデンといふ人は女で、大學教授で無論博士で、おまけに伯爵である、私は面識はないが、餘程の變り者であらう。リンデンの藥は肺病にも、皮膚や其他の結核にも

餘程有効であるといふことであるが、日本には恐らく來てゐないであらう。日本でも十年許り前にこれを眞似て、これとは全く異つた銅の結核化學藥を造つた人がある。一昨年大連で客死した古賀博士である、大阪にも古賀博士の眞似をして、それと全くおなじ藥を造つた人があつた。

金の化合物を造つた人は西洋にも幾らもある、三四年前にも獨逸で可なり喧しく持てはやされたのもあるが、さ程にもないと見えて近頃は頓とその聲を聽かなくなつた。線香花火だ、結核の藥にはこの手が多い、日本にも金の特別な化合物を工夫して結核に用ひてゐる人がある、極最近にも大阪か、京都邊の某博士が金で工夫したものて專賣特許を取つたとか聞いた。黄金で菌を殺して、金を儲けやうといふ算段である。

これ等のものは何れもかなりに强力に結核菌を殺す力がある。併しそれは多くは試驗管の中や、人體外での話であつて、人體内では菌を殺すことが出來難い、詰り

結核菌にも有害であるが、人體の細胞にも亦有害であつて體内の菌を殺すに足る分量を用ふれば人體にも亦毒であるからだ、兩刃の刀である。よし敵を倒すとも殺人の刀は駄目だ、活人の劍はなきか。私共の研究室でも數年來結核の化學的療法に沒頭してゐる若い醫學士がある。その製劑はリンデン伯爵女博士のものよりも數等上なものであることは間違ない、まだ人間には用ひない。これの動物試驗が完成すれば餘ほどなものであると思つてゐる。願はくは活人の劍であれ。

結核の化學的療法は恐らく今後に拓けねばならない一の分野である。今一度繰返さう。

嗚呼、奇想天外より落ち來れ、妙計地底より湧き出でよ。

ツベルクリン療法――數年前まではこの療法の咄に一等力を入れなければならなかつたであらう。今はこれに力瘤を入れる興味もなくまた勇氣もない。兎に角この藥はコホ先生の創始してまた全力を捧げたものであり、それに類似の製

劑は現今では二百種類に餘るといはれ、世界中の結核治療界に最も廣く用ひられたものであり、私共も永らく注射器に盛つて來た馴染の深い特殊療法である――特殊療法とは結核ならば結核だけに用ふるが、外の病氣には決して用ひられぬ療法をいふのであつて、ヂフテリア血清はヂフテリアには非常に有効であるが、他の疾病には一切無効であるからこれを用ひず、即ちヂフテリアの特殊療法である、ツベルクリンは結核にだけ有効な筈であつて他の病氣には一切用ふることは無いから結核の特殊療法である――だから義理にもこれに言及しない譯には行かぬ。

だがこのツベルクリンは今となつて見れば實はさ程なものては無い。コホが化學的療法の研究に手を燒いて、ツベルクリンを創製した當時はなんといふ素晴らしい勢ひてあつたらう。世界人類はこれによつて結核の慘害から救はれたりと思はれた、救世主來の聲は遠雷の響となつて結核治療界に鳴り渡つた、醫者はこれを知らざるを恥とした、病者はそれの惠みに浴せざるを憾とした。が併しそれは思はしくは行

かなかつた。コホは新ツベルクリンを造り、軈てまた最新ツベルクリンを造つた、死に面してまでその研究を忘らなかつた、而して遂に無蛋白ツベルクリンを造つた。その前後三十年を通じて彼れの顰みに倣ひ、彼れの影を逐ふ者は競ひ起つた、ツベルクリンの類似藥は二百有餘種も出來るに至つた。中の一二は眞にツベルクリンの改良であつた、他の多くは改惡でもあつた、使用法も種々に研究され討議された、素より實際爭ふべからざる治効も擧つた。併しツベルクリンは結核に有効ではあるが、一面患者に對して餘りに猛毒である、從つてその使用法は甚だ難かしく治療期間は無暗に延びる、短かきも半年、長きは一年、二年とかゝり、その間に少なきも五六十回、多きは百回もそれ以上も注射せねばならぬ。これを使用する醫者は非常なる經驗と熟練を要し、患者は絶對的なる忍耐を要とする。その上重症には殆ど用ふるに堪へず、多くは無効である。コホ在世中の盛名と熱心とを以てして他に取つてこれに代るべきものゝ無い時代では已むを得なかつたが、私共は今はこれを用ひ

ぬ。

26＝ カルシウム療法と炎症

唯今では一ぱん行きわたつて、且ありふれた結核療法となつたこのカルシウム療法は、もと〳〵わが邦殊に大阪が世界中での發祥地なのは餘り多くの人が知らないてせう。今から十年ばかり前ですが、カルシウム卽ち普通の石灰の主成分が炎症と申す疾病現象を抑制する力を有つものであることを研究してその學理を公にした人がオースタリアの都、維也納の大學にあつて、それが一二箇月して、日本に傳はつた時に、その炎症を抑制する作用を利用して、肺結核の惡い性質を取り除いて見ようといふ考を立てた第一人は、現大阪醫科大學長の佐多先生であつたのです。

私はその頃佐多先生の創設された大阪病院の肺癆科で働いてゐたので、その佐多先生の考へを最初に實行したのは私達、肺癆科に働いてゐた者共であつたのです。それが現今では世界中の文明國に行き亘つて肺結核その他の治療に用ひられ、結核以外の炎症性疾病にも極めて盛んに用ひられてゐるやうになつたのです。

カルシウムの生物界に有用なる成分であつて、これがなければ、人間は素より、如何なる動物も、植物も生きてゆけぬといふ大切なる成分であることは、誰でも知つてゐることではあるが、その生物が生きて行くが爲めに必要な成分である所のカルシウムが、肺病の大妙藥として今では世界の隅々までも行き亘つて盛んに患者に用ひられるやうになつた、たゞに結核ばかりではなしに、種々の炎症性の病氣にも盛んに用ひられるやうになつた譯を例によつてまづ少しお咄ししませう。

諸君。肺結核にもそれを細かに別けると種類がいろ〳〵あります。先づ非常に性

質のよい、十年でも二十年でも一向に酷くはならずに、普通の働作をするには少しも差支のないやうなのもあり、さうかとすると、私が前にお咄し致したことのある駿二といふ子供のやうに、僅か二三週間で、敢へなくも露と消えゆく類のもあります。それほど甚だしい相違でなくとも、大體に固まり易い傾きがあるのと、惡くなりやすい性質のとありますが、その固まつて治ほりやすい傾きの肺病は、その病の箇所に石灰が作用くものであることが知れてあつたのです。またその反對に惡くなる傾向を持つた肺病の人々は身體内にカルシウム分が缺乏してゐることも亦前から略ぼ知れてあつたのです。さうして、性質のよい方の肺の病所には、前に申した炎症が少なく、性質の惡い方の肺の病所には炎症が酷どく現れるものであるのです。乃で炎症といふものと、肺病との連絡がつき、カルシウムが炎症を抑へる力を持つならば肺病の藥となるであらうといふ所に橋渡しが出來る譯でせう。

それを表にして見るとザット次のやうになります。

結核病――カルシウム缺乏――炎症强し――惡性
結核病――カルシウム多し――炎症なし――善性

結核病に善性などは訝しな咄ではありますが、素よりこれは比較してのことで、泥棒をする奴にも、比較的性質のよいのと、極く獰猛なのとあるやうなものです。結核でも性質の善いのは生命を取りませんから怖るゝには足らずそのうちに毎度私の申すがやうに、知らぬ間にても幾らも治つて終ひます。

佐多先生は病理學者であり、結核病の大家でゐらせられるので、このやうな關係を疾くから御承知であつたので『カルシウムが炎症を消す作用を有つ』かやうな研究が出來たことを知られて、そこですぐさま

カルシウム――消炎作用――結核の良藥といふ風に、恰も電光石火の勢ひで先生の腦裡に閃いたのであらうと私は想像して、今でも感服してゐる次第です。

それからして肺病と石灰、セメント工場や、石膏の出る鑛山には肺病患者がな

い、あつてもすぐ治ほる。糖尿病には石灰が減る、それが結核に罹ると性質が惡い妊娠や、授乳時には母親のカルシウムが減る、妊娠や、授乳時に結核が發病するその結核は惡性である。子供が壁土を嘗めるは石灰が欲しい本能の露はれだ、食物にカルシウムが乏しいからである、さういふ子供には瘰癧が多い、瘰癧は結核である、昔から肺病に効くといはれて多くの患者の集まる特別な温泉場では水質が非常に硬い、水質の硬いといふことは、その土地の水中に石灰分が多く含まれてあることを學問的に言ひ表はした語であつて、即ちカルシウムが多量に含まれてあるといふことであり、カルシウムを多量に含む水を常に用ひて生活してゐれば、結核に罹ることが稀であり、病人がそのやうな地に移れば、割に良く治るのである

それからそれと、結核とカルシウムの關係は、恰ど蠶の口から糸の出る如くに佐多先生の腦味噌から迸ばしり出て、直にそれが實行に移され、一鞭萬石を動かしてその後さま〳〵なカルシウム研究を促し、問題は問題を生み、また研究者を出し、

研究は成績を生み、その應用となつて現今の如くカルシウム注射として最も廣く用ひられるやうになり、はては、所謂ヨード療法——ヨード療法と唱へられて何種の病氣にても用ひられるものは皆主もはカルシウム療法です——黒燒療法、骨灰療法などといふものまで出來るやうになつた。これがカルシウム療法の歴史です。

27＝カルシウム療法

カルシウム療法はこのやうな次第で、大阪がその發祥地ですが、現今では啻に醫藥としてばかりでなしに、素人藥としても中々旺んに用ひられてをり、これほど僅かな間に、これほど廣く世界中に行き亘つて用ひられた藥品は絶無といつてよいほどです。近頃獨逸あたりから來る醫學上の經驗的な報告などにても、結核患者にフ

リードマン氏免疫療法——この療法は現在の結核免疫療法では先づ一等喧しい新療法です、私共の免疫療法はこれとはモツト上等なものですが、そのことは後して御話し致しませう——を施したが、効がなかつたので、カルシウム療法を以て治した、など云ふ風なのもある位で、あちらでも、カルシウム療法は餘ほど大した勢ひであるらしいのです。だから、その云ひ出し兵衛たる佐多先生の鼻の高さ正に三千丈といふべきです。日本でもカルシウム製劑は醫藥として出來てゐるものだけでも數十種もあり、それに素人向の賣藥や、賣藥と醫藥との合の子やうなものを入れると恐らく百種以上もあらうといふ狀況で、石灰とも云へない、空前の盛況です。

茲に諸君に御注意を致さなければならぬは事、その濫用を慎しまなければならぬことです。カルシウム劑は概して云へば、利益の多くして、害の最も少いものゝうちではありますが、何物にも表裏と利害のあるもので、唯良いとさへ云へば無暗矢鱈に用ひても差支ないといふものではありません。

カルシウム劑は醫藥としてもそれほど有用なもので、それのお蔭で多くの人々が種々の疾病から免れることの出來るのではあるが、今も申すごとく、素人用の藥も少くないのであり、一方では、學者の説を惡用して利益の吸收に許り趁る者もあるので、中には隨分如何はしい品物もないとは限らないのです。醫者すらが、時とすると無暗にカルシウムの效顯に心醉して、不老不死であるとか、二百年長壽だとかいふやうな駄法螺を吹き、素人を瞞着し、尤もらしいことを云つて己れの財囊を肥やすことをやつて居る者までもあるさうですが、いくらカルシウムが生理的に必要な成分であり、疾病治療の效があるとしても、人間の生命を二百歳に延ばす力は無いと私は思ひます。萬一人間が皆二百年の生命を保つことにでもなれば、それこそカルシウムの大害と申すべきではありませんか。

カルシウムもその化學的の組織によつては、内服して便秘を起したり、又は反對に下痢を促したり、若くは食慾を減じたりすることもあります。ひどいのになると

詰らない廣告などに欺されて、無暗にカルシウムの賣藥を用ひ、それが爲めに食慾を損ひ、便秘したり、又は反對に下痢を起したりしてゐて、それがカルシウムの效であるかの如く心得、ます〳〵身体の衰弱を招いて、それてまだありがたがつてゐるやうな人までも見かける位です。非常識な結果だとは云へ、お氣の毒な次第です。兎角は常識の判斷の上に立つて、陽光を浴びんと欲して、却て日蔭に立たないやうに心掛けるべしです。

カルシウムに關係したことを咄してゐれば限りがありませんから、大體是れ位で止めますが、終りに一つ附け加へて申したいのは妊娠と結核の問題です。

結核に罹つた婦人が妊娠すれば、結核が重くなる、さほどにもない肺尖加兒答位が、妊娠してから急に重症の容態を現し、その儘に放置すれば往々生命的危險がある、妊娠は幸に無難に經過しても、産後乳を授けるために重症になる、というやうな經驗は昔から隨分お互が苦く嘗めさゝれてゐるところです。

カルシウム問題が起つて、種々の研究と考案が出るやうになつてから、此の妊娠授乳が結核病に悪い影響を與へるの理由が、はつきりして來ました。カルシウムが體内に不足すれば結核が悪くなる、これを適當に十分に與ふれば結核は治ほり易くなる、といふことを頭に置いて、妊娠と授乳の場合を考へたのです。

子供が母體内で榮養を母から貰つて育つ、殊に三、四箇月以後になつて、子供の骨格が發育する頃になると、骨の主成分はカルシウムであるから、それを母體から遠慮會釋なしに奪ひ取る。强健な母親は、こんな場合には二人分を喰べるんてあるといふ譯て、食物を澤山に攝り、序にカルシウムも澤山に攝つて居る、だが平生弱い母親はそれが十分に攝れない、お腹の子供は母親の食慾なぞに用捨はしない、自分の骨の組成しに必要なカルシウムはドシドシ攝る、そこて母親の體内にはカルシウム分が減る、結核性疾患に悪い影響を與へるといふ結果になるのてす。

子供が幸に無難に生れてから後も骨の發育は最も大切なのてすから、矢張り母

體からカルシウムを貰ふ積りてゐる、乳汁の中には多量のカルシウムが移入されて、やはり絶えず母體のカルシウムを奪ふことになる。

妊娠も授乳も供に母體の結核性疾患に悪い結果を齎す譯がそれて讀めるてはありませんか。

母親が子供を産み、之を哺むことは天の與へた大使命てあることは勿論てあるが、元があつてこそ子がある譯、妊娠中は、如何に子供の欲しい家庭てあつても、子供よりも母親の大切なことは判り切つた話てある、妊娠のために母體に危險があると知れた時は、申すまてもなく、お腹の子供を犧牲に供しなければなりません。此の危機に當つて無理を冒すとすれば、往々にして元も子もなくする結果となります。

結核性の母體に人工流産を施すことは醫術上殆ど爭ふ者のないことて、而もそれを成るべく早くすることが必要てあり、人工流産を五ッ月以後になつてから施こすことは、殆んどお産をするほどの苦しみてある。だからして弱い母體ては之は必

ず四箇月以前に施すことが原則です。また、妊娠三、四ケ月の頃に、熟練した産科醫の手にかゝつて人工流産をすることは、臀へて見れば、灌腸をして、硬便を排泄するとかはらぬほどの簡單な仕事です。

幸に月滿ちて、無事にお産の紐を解いた後では、弱い母親の乳を用ひず人工榮養で子供を育てるが、親にも子にも必要不可缺の處置です、そんな時に古い頭の姑さんなぞが、間違つた喙を容れてはなりません、よくある奴です。

28 結核とはどんな病氣か

結核とはどんな病氣か。卒然としてかう問はれたらば、解らない病氣ですネ。

といふのが、今日までの醫學の返答である。だから『結核は謎だ』といふ。

或る者は結核は小兒病だといふ、結核は普通では多くは小兒時代に傳染し、小兒では殊に急性の肺結核が多く、瘰癧や、骨や、關節の結核は多くは子供に在るからである。或る者は結核は中年病であるといふ。知春期頃から二十歳、三十歳位迄に肺結核で殯れる人々が最も多いからである。されどまた七十八十になつてからでもこれに殯れる人は決して稀ではない、老人病でもある。老人に結核が少いと見えるのは一體老人が少いからであつて、老人に結核が少いのではない。結核は都會病であるといふ。三四十年前までは事實それで可かつた。併し世界産業の勃興以來山間僻地の子女を驅つて都會に誘ひ、それ等が病氣になつて歸國する者年々增加するに至つては、今は却て山間僻地こそ油斷がならぬといふ場所もある。かういふ所を結核處女地といふ。結核處女地の結核病は、都會地の大人に見る普通の結核よりも猛烈で、卽ち急性惡性の結核である。普通では、交通文化の旺なる所に結核が多いか

ら文明病であるといふ。阿弗利加の遠征隊はアフリカ黑人には結核患者はない、彼等は結核に免疫であると報告した。土耳其の內地からも同樣の報告が出た。豈圖らんや、アフリカや土耳其に白人共が追ひ〳〵侵入するに至つては、土人間に結核は年を逐うて猛烈に流行して、多くは急性惡性の經過を以て斃れて行くやうになつた。日本のアイヌ人も大和民族と接觸しだしてから、結核が急に蔓延して、アイヌ人種は遠からず結核の爲めに絕滅して終ふであらうと氣遣はれてゐる。結核は人類を襲ふに黑白黃赭の嫌ひはない、だから國民病であるといふ。結核は多くは肺を侵す內科病である。されどもまた、骨や關節にも少くない、外科病でもある。皮膚や、泌尿器系統にもある、喉頭結核があり、腸結核があり、生殖器にもあり、腦をも、耳をも鼻をも侵す病氣である。醫學の專門といふ專門で結核を頭痛に疾まぬ分科はない、卽ち醫者の頭痛も亦結核に因つて起ると謂へる。貧民に多い、貧民病である、されど金殿玉樓の中にも結核に苦しむ人々は少くない、金持病でもある。白ん坊から

ら黑ん坊に傳染し、大和民族からアイヌ人に傳染した、一女工がこれを齎して故鄕に歸つて、その家族から村內に傳播した、則ち傳染病である、が併し亭主が肺と喉頭結核であつて、妻がその看病に當り、身を以てこれに盡したが妻は少しも病氣にならない、同居した親も同胞も何の事はない、傳染病とは嘘であらう、結核が誰にでも傳染するならば肺病專門の醫者は生命の掛替が幾打あつても足らない筈だが、さうでもない所を見ると、傳染は嘘であらう。同じく傳染の機會に遭うて甲內は感染發病し、乙丁は感染せぬ、これはその人々の體質に因るのであらう、結核は體質病である。郊外淸澄の氣を吸ひ、日光に面を晒して勞働する人々には少くして、室內陋巷に蟄居する人に多いから、これは住宅病である。營養不良なれば惡くなり、營養佳しければ良くもなるから營養病である。乳兒か又は二三歲の幼兒が結核に罹れば怖ろしく急性で且惡性である、アイヌ人や土耳其人や、アフリカ黑人の結核も多くは急性病であり、日本內地の山間僻地に近年發生したる結核も亦多くは急性で

且悪性である、だから結核は急性傳染病である。以前から結核の多くある都會地で見る結核は、肺結核にしても、骨や關節や其他の結核にしても皆甚だ長わづらひをする慢性の病氣である、だから結核は慢性難治の病氣である。

諸君。結核の異名調べもモーこれ位で澤山でせう、私ももう嫌になりました。抑もこれは何たる病氣であるか。

結核を見物する醫者の眼は果して確かと明いてゐるのでせうか。私は少しく觀方を換へて見よう。

靜かなる春の水に一石を投じて見る。一波は忽ち百波萬波を生じ、小波は中波、大波となる。一莖千生の瓢がある、千瓢は大小と正歪があり、千態を呈して相等しきは二つない。しかしこれを生じたるの粒子は一つである。隣家に杉の生垣がある、何れも六尺を越えざる倭木俵樹であるが、伊勢の神苑や、日光の社路に在る杉は皆な大幹巨木であつて、亭々森々として雲際に聳えてゐる。隣家の生垣をなす倭樹と

神苑を飾る老杉も、元は皆一粒の核子より生じたる苗杉であつたに外ならぬ。結核が細菌に因つて生じ人体に在つて、急性、慢性、善性、悪性の別を呈するのは是等に似寄つたことはないか。

人體は波紋を畫く水であり、千瓢を生ずる蔓であり、杉を育つるの土地である。結核菌は水に入る石であり、瓢の種子であり、また杉の核子であると考へるのは無理であるか。

水に生ずるの小波は皆悉く必ず大波となる、水は死物であつて投石に抗するの力を有たないからである。人體結核に抗する力なき時は結核は皆必ず急性悪性に經過する、乳兒、幼兒、山間の人、アフリカ人、アイヌ、トルコ人の結核がそれである、結核性腦膜炎もそれである、私共の試驗に用ふるモルモット、猿猴の結核もまたそれである。斯かる個體を醫學では『免疫なき素地』といふ。免疫なき個體は投石に抗力なき春の水と選ばぬ。

一莖の蔓千瓢を生ずるが、瓢に大小がある、細蔓は小瓢を着け、大蔓は大瓢を荷ふ。太蔓は瓢に抗力少くして、細蔓は抗力多しと見よ。人體に結核に抗するの力少き時は感染して發病し、抗力多き時は輕病をも發せぬ。結核免疫の多寡と强弱とに由るのである。伊勢の神苑や、日光の社路やは杉の生ゆるに抗力なき沃壤であつて、隣家の生垣を作るの地は杉の老ふるに抗力多き痞地である。小兒や、免疫無き個體は結核菌生ゆるは抗力無き社頭神苑であつて、稍長けたる少青年や成人等は結核生ずるに抗力多き痞地である。

結核菌に對する抗力卽ち免疫は月を重ね年を經ると共にいよ〳〵强く生ずるからである。免疫ある素地、言を換ふれば、少青年以後では結核の輕い傳染は怖るゝに足らぬ。これに重い傳染の機會があれば、感染し、發病もするが、それは多くは輕症となり、慢性となり、善性結核であつて、しば〳〵自然にも治ほり、醫治によつても容易に治る。免疫更に强き個體では結核は傳染せず、結核菌が如何に劇しく

飛び込み來るとも感染もせず、發病もしない。種痘を施して免疫を與へて置けば、如何なる天然痘の流行をも怖るゝに足らないと同じである。

結核感染の關係を表として見る。

一類、免疫無き素地の結核本型

結核菌が侵入する、人體は之に感染し急性進行性なる、主に肺結核と結核性腦膜炎を發病して多くは之に殪れる。結核菌は無抵抗の處に入り來つて存分の喰ひ荒しをやる結核病の本型である。本當の豫防免疫を個人々々に施さなければ一旦病氣となつては治療の方法が無い

二類、免疫弱き素地の結核變型

結核菌が侵入する、人體はこれに感染し、少しの病變を生ずる、主に腺の結核であつて、頸部のぐり〳〵やら、氣管支腺の結核といふのがそれである。普通に之を潛伏結核といふ、醫者にかゝる程の病氣ではないからである。潛伏結核の間にも免

疫は多少增强する、さうして多くはそれで治つて終ふが。少數は青年期中年期に至つて、骨や、關節や、肺等に慢性の病氣を起して醫者の手にかゝる疾病となる、此の間にも亦免疫は出來る。しかしかうなると病氣は已に小波ではなく、嫩の草木ではない。それでも屢々自然にも治り醫治によつても良く治る。がまたは治り難い塲合もある。杉の大樹は鎌では刈られない。この類では免疫があつて、病氣になる、治ほりもすれば惡くもなる、事によると治ほつて終つたものがまた惡くもなる、ぐづ〳〵として非常に慢性である。結核菌の方でいへば、思ふ存分喰ひ荒しが出來ない、だから結核病の變型である。之に潛伏の頃か、發病の初めの頃に、免疫を强くして遣る工夫があれば、最も容易に治つて、重症となることは無い。結核は早く醫治を受けなければならぬといふのはかういふ譯である。

兎に角此類には醫療の餘地がある、さうして早く醫治を受くれば早き程手輕に且つ完全に治る、雨に打たるゝ壁の孔とおなじである。

三類、免疫强き素地の結核變型二

結核菌が侵入する、人體はこれに感染しない。又は少しく感染するが潛伏結核で終る、而して免疫力はます〳〵强くなる、醫者の診る病氣にはならずに終ふ、結核菌は折角人體に飛び込んで人體を喰ひ荒らす代りに却つて之に喰はれて終ひ、加之に人體の免疫力を强むる役目を勤めて終ふといふ段取である、だからまた結核の變型である。

一と口に言へば、『結核病は人體に抗力無き時卽ち免疫無き素地に發しては急性傳染病である、弱き抗力卽ち不完全免疫のある人體、年齡でいへば學齡以後に感染すれば慢性傳染病となり、これに免疫の增强するを得れば治癒し免疫の增强し得ない塲合は、極めて緩慢に免疫が消耗して、人はこれに殪れる。免疫强き個體では疾病を構成しない所の傳染病である。』

だからして醫治によつても治るもの治らざる者あるのは、皆これ

『個體に結核免疫の有ると無きとその强弱とにこれ由るのである。結核は結核菌に因つて起り、免疫力を以て之に對抗する事の出來る傳染性免疫性、疾病である』

輕き結核の人々に强き免疫を與ふる工夫があれば結核の治療は極めて容易なものであらう、『免疫治療法』である現在の病者はこれを翹望する。一切の小兒と無病者に强き結核免疫を與ふること、天然痘に對する種痘の如きものを得ることが出來るならば、結核の慘害は地を拂つて消滅し、人類は茲に初めて結核無き樂土に枕を高うして眠ることが出來るであらう『結核豫防免疫』である。次代の國民はこれを要求する。學者はこれを研究しこれを完成しなければならぬ。

人體に結核免疫を與ふる工夫はあるのか。これは謎ではない問題である。

29＝結核の人工免疫

諸君。結核は傳染病であつて、立派に免疫の成立する病氣であります。その免疫性は個人々々に與へられなければならないのです。各人がみなこの免疫を豫め求め得らるゝならば、結核は地を拂つて消滅すること、恰ど種痘免疫によつて天然痘が無くなつたとおなじであると申します。すべての赤ん坊に種痘のやうにして結核免疫を與へる工夫があるでせうか。私はそれをお話し致しませう。

結核に免疫のあることを證明したのは矢張りコホでした。免疫と申すは、一旦或る病氣に罹りたる者は再びこれに侵さるゝことなしといふことです。卽ち結核に罹りたる者は再びこれに侵さるゝことなしといふことです。併し結核ではその證據は

薄弱です。なぜなれば、結核に罹りて、これに殪るゝ者は世界中で　年々幾百萬であつて、これに罹りたる者がまた侵されないなぞはさておき、侵されたが最後治る時がないやうに見えるではありませんか。實はこれはその人々に免疫が十分でないからであつて、免疫さへ十分なれば結核に殪れる人はなく、赤ん坊にみなこれを與へたならば、これに罹る人もなくなるに違ひないと思はれます。

私は結核免疫の歴史を少し話して見ませう。

コホの弟子ベーリングは師の免疫説を信じて、先づ牛の結核を豫防せんと企てました『牛結核人工免疫法』です。さうして人間の結核菌の生きたるを犢に注射し、程經て牛の結核菌を注射しても其犢は牛の結核にはならぬ、卽ち牛結核免疫を人間の結核菌によつて成功しました。牛結核免疫に人結核菌を用ひて成功したならば、人結核免疫に牛結核菌を用ひて見たならばどうかとは我も人も考へた處でした。しかしこれには誰しも躊躇しました。その譯は人間の結核菌は牛には無害で、免疫

を與へるが、牛結核菌は人間には無害ではなくして甚だ有害だと承知してゐたからです。

眞理は暗夜の白玉であると申します。科學の發見發明が多くして、白玉が大きくなればなるほど、暗黑に屬るゝ面を大きくして、疑問が殖えることを言つたものださうです。ベーリングの發見は結核免疫の疑問を一部解決し、一部擴大したものです。

さはれ、必要は鐵をも破るといひます。鐵をも破らんとする勇士は必ずしも乏しくはありません。人間に無害で人に結核免疫を與へる黴菌は若しや無いかとたづねられました。鳥類にも結核はあります、鳥類の結核菌は人間には無害であります。

蘯子や、蜥蜴や、その他の冷血動物にもまた結核はあります。彼等冷血動物又は人間以上の高い體温を有つ鳥類やの結核菌は人間に結核免疫を與ふることが出來ないてせうか。

これを式に書いて見ればかうです。

一、人結核菌は牛に無害――これを犢に接種する！――犢に免疫が出來る――その犢に牛の結核菌を接種する――犢は結核にならぬ。

二、鳥類や、冷血動物の結核菌は人間に無害――これを人間の身代りとしてモルモットに接種する――モルは結核に罹らずして免疫になる――そのモルに人間の結核菌を接種する――モルは人間の結核菌に侵されぬか？

この答へが『モルは人間の結核菌に侵されぬ』と出れば、人間は萬歳です。

が、さうは問屋が卸しませぬ。馬は鹿とは交りません。生物界の約束は、さ程ズボラなものではありません。人間の結核免疫には人間の結核菌を必要とします。だからして、實際では、先に申し上げた、牛結核の豫防すら、まだ實用とはなりません。鳥や冷血動物に寄生する黴菌は人間の結核免疫を與へません。疑問の暗夜はおなじ白玉の面を繞らして居り、結核は依然として人類の公敵であつて、相變らず年々歳々多數の犧牲は拂はれてゐます。學者は疲れました。世間は忘れました。

十一年の昔です、突如として、結核免疫療法を伯林の一角に發表した男がありました。その名をフリードマンといひます。彼が結核を患ふる一寡婦の飼ひおきたる鼈子の内臓から取つた一つの結核菌は、結核に感染してまだ重い病氣を起さない子供の發病を豫防し、また、結核に罹つた人々を的確に治療するの効力があると吹聽して大に世間の視聽を聳てしめました。併し惜い事にこの男は、それ迄に學界の信用がなかつたのと、自身に確實な學術上の根據を築き上げて、十分な證據を示すことが出來なかつたので、獨逸國内は素より、アメリカなどに於いても、賛否こもごもで十年を經過しました。これに學問上の根據を與へるためには次のやうな式が要ります。

フリードマン菌をモルに接種する――モルは結核に罹らずして、免疫になる――

これに人間の生きた結核菌を接種する――モルは結核に罹らぬ。

ところが彼れの免疫劑――このやうなのを私共は免疫劑といひます――ではこの

答案が出ません。

つまりそれがために不完全な免疫劑であり、曖昧なものであるとされます。

結核菌を今一度根本から調べて見ませう。

結核菌は普通に免疫劑を造り得るコレラ菌やチブス菌とは違つた點があります。

そのために結核菌は抵抗力が強く、免疫が出來難く、免疫が人體に出來ても、容易に體内で死なゝいので、結核といふ病氣が治り難くいのです。その彼れの他の菌と違つた點といふのは、彼れが菌體内にリポイードといふ蠟又は脂肪やうのものを有つてゐてそれが爲めに抵抗が頑强であり、人體にも免疫が出來難く、免疫劑としても十分自由に使用することが出來ないのです。つまり、そのリポイードが結核免疫の邪魔物です。

乃て其リポイードを取り除いて免疫劑を造らうと企てた人々は幾らもあります。さうして、菌を殺してならばこれを取り除くことは何ほどの苦勞でもありません。

日本にもそれをやつて、免疫療法を改良した人があります。併し惜しいことには殺した菌ではホンとの免疫劑は出來ません。結核免疫を與ふるが爲めには菌は生きてゐて、而も無害であり、リポイードなしてありたいのです。菌を生かした儘で、そのリポイードを除いて終ふことは、生物學上では、例へて見れば、骨のない脊椎動物を造らうとするとおなじやうな難事です。

結核菌のリポイードを菌を殺さずして取り除く方法は困難な仕事ではありますが全く出來ない相談ではありません。それは私共に七年ほどの苦心で出來ました。さうして、四年このかにぽつ〳〵にその成績を報告しましたが、昨年末に至つて、その研究は略完結しました。

それによると寔に都合の好いことには、從來多數の學者が長年苦勞をして未だ曾て出來たことのない成績が出ます。例によつてそれを式にして見ませう。これに出來上つた材料を一般には『結核豫防接種苗』と申すべきですが、チト長すぎますから、

假りに『瘵苗』と名づけます。

一、瘵苗をモルモットに病氣に罹らぬ程度に接種する――モルは結核に罹らずして免疫になる――ほど經てそのモルに普通ならば必ず感染するほどの結核菌を接種する――モルは免疫があるからして全く結核に罹らぬ、確に免疫は出來た。

二、家兎に瘵苗を接種する――程經て、その家兎に結核菌の、普通ならば必ず傳染して重い結核になる量を接種する――その家兎は瘵苗で免疫になつてゐるからして、結核にはならぬ、確かに免疫が出來た。

これだけのことが、從來誰人にも成功しなかつた出來事です。

そこで、第一の問題は、

人間の赤ん坊に、痘苗を用ひて種痘を施すとおなじやうに、瘵苗を用ひて結核の豫防接種――これも長すぎるから、『種瘵』とでも申しませう――を施さすことが出來るか、それが出來るならば、私が先にも申したやうに人類は結核に對して枕を

高うして眠ることが出來る譯です。私の考へではそれは、唯今擧げた、動物試驗からの推理によつて十分に可能性があります、推理の仕方は次のやうに致します。

一、人間は如何なる人でも結核菌に對してモルモットより強い、赤ん坊でもモルよりは強い。

二、人間は如何なる人でも結核に對して免疫になり易い、モルモットは結核に對して最も免疫になり難い。

三、モルモットを結核免疫にする工夫があるなれば、どんな赤ん坊でも、たやすく結核免疫にすることが出來る筈である。

四、私共の瘵苗はモルモットでも、家兎でもを、確實に結核免疫にして、その免疫動物は、結核菌を注射されても――言を換へて見れば、どんな重い結核感染の條件に出遭つても――結核には罹らぬ。

五、結核菌に對して一番敏感な動物であると知られてゐるモルにすらも豫防免疫を

與へることが出來るのであるからして、元來容易に免疫になる抵抗力の強い人間は、假令、赤ん坊でも、この種療法で免疫になる筈である。

かういつたやうな譯です。私共は、私共の研究成績を信じて下さる人々と共に、この推理の間違ひなきことを疑ひません。

第二の問題は、

近親や、同居者又は親しい交通のある人々の中に結核を有つ人があつてそれに接した人々――主に子供――が、未だ病氣ではないが、事によると感染してゐるかも知れぬ、この後何年かを經て、肺病や、骨や關節結核になるかも知れぬ、といふ虞のある場合に、それを防ぐ工夫はあるか。

といふ點です。醫者の言葉で申せば感染後の『發病豫防法』です。この豫防法は第一類の急性結核（結核とはどんな病氣か參照）では出來ないとですが、普通の結核感染であつて、子供がはや、四、五歳以上にもなつてゐるのであれば、最も安全

に目容易に出來るものと思ひます。現にこの發病豫防法を如何にして行ふべきかといふことが、獨逸、墺太利あたりの重要問題となつてゐます。それには學齡前から十四五歳迄の兒童を全部檢診し、結核感染の反應の有無を檢査して、その反應のある子供は全部ツベルクリンを以て一年餘りもかゝつて、百回ばかりも注射し、發病豫防をしようとする立案です。ツベルクリンにはモルモットの結核豫防力は無いのですが、人間の發病豫防力は、一年餘りもかゝつて百回も注射をすれば、これあるものと信じた次第です。何としても、窮せりと謂つべきかなです。

理想的な療苗を用ふるならば、そんな大層な苦勞と手數は要りません。第二類の結核で、未だ潛伏中のもの――（結核とはどんな病氣か）參照――ならば、三回か五回位、療苗を注射すれば、安全且簡單に發病豫防をすることが出來る次第です。これは推理ではなくして、既に多數の經驗からして間違ひはありません。但し百人が百人同じ狀態の人はないからして、同一條件では行けないとしても、此目的にッ

ベルクリンを用ひやうとするのとは比較にならないほど、簡單で、且確實です。

潜伏結核の特徴は、手短に申せば、頸部や、腋の下にぐり〳〵のあるのや、弱手な子供が氣管支腺腫のために重に夜間刺戟性の咳嗽をするのがそれです。第三の問題は、

『牛の結核豫防』

です。以前は内地産の牛には結核は無かつたさうですが、洋牛の種が這入込んでからは、殊に乳牛の結核は可なりに多いもので、兒童衞生上牛結核問題は可なり喧しい問題であり、牧畜業者の利害からも等閑ならぬ問題です。前に掲げた、ベーリング氏が牛結核を、人間の結核菌を察苗として豫防するといふ方法は、實は可なり不完全であつて、未だに實用の域に達しません。私の考へでは次のやうな、式によつてこれを完成することが出來る見込です。

リポイードなしの牛結核菌で察苗を造る——之を家兎又は犢に接種する——程經

てその家兎又は犢に普通ならば確かに結核を起すべき牛結核菌を注射する——家兎又は犢は確實に牛結核に罹らぬ。

と見ることが、これは推理によつて略ぼ慥かであると思ひます。此方の研究は唯今施行中ですが、若し注文通りの答案が出たらば、面白いとでせう。

免疫法は私の考へではおもに豫防のために用ふるものであつて、種痘のやうにして、すべての赤ん坊か、學齢前後の子供に注射して傳染しないやうにするか、又は傳染した虞があつて、まだ病氣にはならぬ人に、卽ち發病豫防に用ふるのが、その眼目です。

しかし、すでに病氣になつた人にも用ひられない譯ではありません。其場合はこれを『免疫療法』と言ひます。

但し『免疫療法』は結核のどんな種類にでも、又はどんな時期にでも用ふる譯には行きません。この場合は嚴に時期と種類を選びます。所謂疾膏肓に入つてはこの

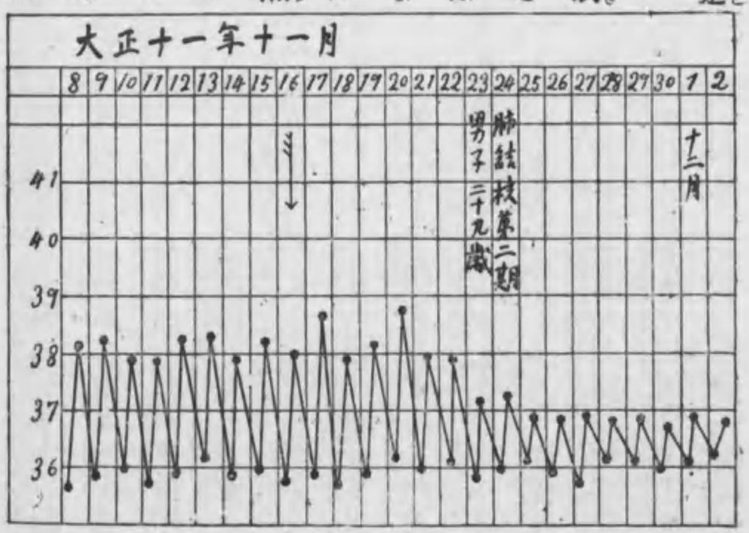
免疫療法を施すことは出來ません。てすから、肺結核なれば、肺尖加答兒と申す第一期が最も宜しく、稍進んだものでも先づ二期迄てなければなりません。第三期になつては免疫療法の効果は擧がりません。私が度々申す如く、結核は壁に開いた孔のやうなもので、手を着けることが早ければ早いほど、手輕に、簡單に治ると言ふのは茲のことです。病氣が初期なれば殆ど他のいろ〳〵な治療法を加へずして、單にこの免疫療法ばかりて治つて終ふのを私共はたび〳〵經驗します。が併し、雨にうたれる壁の孔がすてに年經てひどくくづれた場合にはそんな簡單な手當て修繕が出來ないことは申さずともものことです。だからして免疫療法が如何に理想的に出來上つても、期を後れては殆ど何の役にも立ちません。そこて、肺結核なれば先づ二期のなかばまてなれば大丈夫治ると思ひます。この場合は免疫療法に兼てカルシユム療法だの藥劑療法だの、いろ〳〵な外の療法をも加へます。

こゝに御覽に入れる圖は十八歳の男子て、肺結核第二期の人の體重を、私共の免

疫療法を始める前から毎週はかつて一週に一個づゝ丸點を打つて見たのてすが、圖の左の方の免疫を始める前は三十八瓩以下てあつたのが三回の免疫療法を施して卅三週間卽ち七ケ月餘りの内に五十一瓩以上になつたことを示したものてす、矢の印は免疫注射てす。僅三十八瓩足らずの人が五十幾瓩になると人相迄も見違へるやうになります。——一瓩は昔の二百六十六匁ですから、四瓩て昔の約一貫目に當ります、序にメートル法の講義をします——肺を患うて痩細つた人が、僅な手當て、半歳位の間に十

瓩（キログラム）内外もその體重の増すことがあれば、寔に御同慶の至りです。

又この免疫療法では病氣が非常に重くない限り熱があつてもその熱も比較的容易に解れることがあります。第二圖に表はした温度表の主は二十九歳の男子で、初めは可なり性質が良くない熱を表はしてゐたのが、昨年十一月十六日に唯一回の免疫療法の爲めに七、八日にして平熱にまで降つて行つたのを示したものです。矢の印が免疫注射を行つた日です。素より何人にでもこのやうに顯著な効がある次第でありませんから、餘り買ひかぶつてはいけませんが、兎に



角、舊來の結核療法に比して格段の進歩であることは爭はれないでせう。

その外、腸結核でも、餘り酷どくないのには、また可なり有効です。腸結核の場合には食事の養生が肝腎であることは前にもお話し致したことで、諸君は御存じのはずです。肺やその他に重い容態の無い方であれば、食養生と免疫療法とで、餘程工合良くなることは、少くはありません。

また、皮膚結核でも、種類によつては、餘程速かに良くなることがあります。尤も皮膚結核は種類の多いものであり、私は專門が違ふ關係から餘り經驗はありませんが、理論上ではまた相當に有効なはずです。

骨や、關節の結核には未だ經驗がありませんから何ともお話しのしやうはありませんが、この方はすでにこのお咄の最初の頃にも申したやうに、絶對安靜を保つことによつて、比較的容易に治るものであり、それに加へて、この免疫療法を施すことがあれは、これまた理論上好都合な筈です。

腎臓や、膀胱や、その外生殖器の結核病にも少々の經驗はあり、可なり有効な場合もありましたが、あまり利かぬ場合もありました。理論上では矢張り餘り重症でない限り有効な筈です。

兎に角私共は肺結核の初期から、二期の人々には屢々餘程有力な新療法であるとを多數に經驗して、喜んでゐる次第です。私共の免疫法は結核の豫防を眼目とするのですから、治療の方では私はこれくらゐで滿足です。

要するに、結核免疫は、僥倖にも私共の研究によつてその一途を開くを得ました。

さうして、この免疫法は豫想外にも、病氣が初期なれば治療上にも役に立ちます。併し私共の眞目的は、幼兒や、學齢兒あたりの、ほんとの『感染豫防』の役に立てたいのが主であり、第二には感染した虞のある人々に『發病豫防』の役目を持たせたいのであります。私共は既に或る有力なる人々の援助によつて此發病豫防の實施に着手して居り、その有効なるべき實證は重に今後の成績に依つて實地に證明され

なければなりませんが、私共はそれは必ず成功するものであると確信してゐる次第です。聽て出來る大阪市の結核相談所は、この豫防免疫の應用によつて、世界に類例のない相談所たらしめたいと思うてゐます。

この豫防免疫法が一般の社會に認められて、多數の幼兒、學童等に無害、無危險に應用されるやうになる曉には私は卽日瞑目するとも憾みはありません　私は、この『瘵苗』の着意をなしたる同僚青山醫學士並にその製作を擔當する太繩氏と私との三人の名に於いてこの結核免疫法の前途を祝し、同時に、私共の研究に多大の同情を寄せられる恩師佐多博士や、池上大阪市長並に大阪市の主腦者達にこの機會に於いて厚く感謝しなければなりません。

30

列車中の紫陽花

時は六月梅雨季の央、ある日曜日の午後、汽車中の見聞に始まる。三人連れの一家族、父親、五十四五、半白の頭髪、無髯、蒲柳の質、身輕き和服のいでたち。客稀なる車中に、書類容れと見ゆるトランク型の小さきカバンの上に小袋やうのものを載せて枕となし、殆どたえず横になり居る。時々煙草をのみ、しば〳〵咳嗽をなし、痰を吐く。ものごし極めて靜かにして殆ど話しさへせず。

息子、せい〴〵十八、人品佳き生れ、頸や、四肢細く、肉附惡き方、脊丈けはこの年齢の普通よりもチト伸びすぎたる方。金釦霜降りの小倉制服。こて痕鮮かに筋目立ちたるズボン、稍贅澤なる毛の薄き靴下、上等のあみ上げ靴。柔順なる容態、

雜誌やら、教課書やうのものを讀めどもまたあまり話をせず、何となく寂しき姿科あり。父親の煙草ども取り上ぐれば、マッチなど摺りやり、たえず父親に注意を拂ひて、その小用を辨ずる心持あり。

紫陽花の娘　年齢十六ぐらゐ、七三にわけたるお下げ髪、項の下にて、細かき黑と紫紅色の縞の幅廣きリボンをもて括りたり。薄紫色の下地に極細かき白レエスを重ねて仕立てたる流行の少女服、腰には白のリボンを卷き、後にて結下げたり。襟と、肘きりの袖口には上品な白レエスを飾り、裾はわざと大きな襞一つ取りたる、皆良く似合ひて申し分なき上品さ。絹の黑靴下、上等の黑半靴。

顏。細面、瓜實顏、頬より、頤の姿態、額の廣さ、生え際、耳の大きさと形、生え下りの長さ、皆申し分なき可愛さ、氣尊さ、句やかな眉毛、慾をいへば今少しく大きくありたき双眸は一皮目なれども、良く顏とつり合ひ、笑顏にも、兄とのやさにらみにも、みなな〳〵によし。鼻の形、恰も刻みたるが如く、比類まれなる出

來榮え。小さき、優しき口元、難は唇の上下ともチト厚きやにあれど、小さき口の唇、こゝろもち厚きは、却て愛くるしさを增すとも醜きものにはあらず。細き頸、なで肩、白き襟のレエスとのとれ合ひ何ともいへずやさし。惜しき難は皮膚の冴え惡しく、そのためにや色少しく黑く見ゆることなり　父親も兄も色は白き方なるに、この娘ひとり黑きやうなるは恐らくは母親よりの遺傳ならんか。黑き靴下に包みたる脛、はかゝる年齡の少女としては今少しく太きが多きやうなれど、形とゝのひたる、見ても心地よき作なるが、萬金にも代へて作りなほしたきは、胸廓の見るも氣の毒なるほど狹く、肩の幅、臀の肉附き惡しく、如何にも纖細にして、肉のしまりわろき腕なり　むだ噺しも、笑顏もきはめて少きは何の故にや、英語の教科書を讀むかとすれば、兄との間に置きたるトランクの上にうつ俯して睡りを取ることあり。三人ともながら、この娘ことに寂しき容子なるは、何ぞ所以あるべし。

三人の携帶品。大小革張りトランク三個、きやうだいおの〳〵似合の雨降用洋傘、

銀の頭飾ある紫竹の上等ステッキ、その他二三。總て物質的に不自由なき家族、一等の箱あらば二等に乘るまじき要領である。こゝに一つの合點の行かないことは、この全家族の旅と見ゆる仲間に母親と思はしき人の缺けてゐることである。惟ふに母親は重い病氣でゞもあるか、事によるともう亡いのであらう。

こゝて私共の汽車は、とある中驛に着いた。チョコレートクリームか何かを食べてゐた紫陽花が、茶を買はうと言ひ出し、兄もこれに同じて、窓をあけて、茶を呼び、一人は父のがま口を請取らうとすると、なかば眠つてゐた父は、

『一つてえゝぜ、一つてえゝぜ』

と繰返して注意を發した。息子は結局三人前に茶を一つ買つた。

私はこの有福らしい家族が三人前に茶を一つ買つたことを、特に茲てこと〳〵しく書き立てることを多少氣の毒の事に思ふ。何故ならば、この父親の正當なる勤儉的精神を誤つて吝嗇と取る人々があるかも知れないからである。併し私は少くとも、

そのやうな積りでこれを書き立てるのではない。私のこの家族が三人して一つの茶を買つたことに重きをおく譯は、茶を買つてから後に三人の演つた行爲に戰慄すべき恐怖を覺えたに在るからである。

買つた茶を先づ言ひ出し兵衛の紫陽花がさきに飲み、次いで、兄が飲んだ。斷つておくが驛で賣る茶に、茶碗が一つしか附いてゐないことは知れたことであるから、このきやうだいはおなじ茶碗で茶を飲んだのである。これもまあ兄弟仲のよいことを思はせる位以外に別段怖ろしいことのやうな心持は起らない問題である。さうして父親が一番おしまひにおなじ茶碗で茶を飲んで、茶がなくなつたならばまだ可かつたのであるが、そのうちに復たクリームを喰べた紫陽花は土瓶をふつて見て父親の手から受けとつた茶碗で殘りの茶を三杯も飲んだのである。

私はこの時ばかりはハッと思つた。讀みかけて手にもつてゐたハイネをほんとうに取り落した。

父親は前にもいつたやうに、たえず咳嗽をし、痰を吐く病人であるのだ。さうしてそれが口をつけて今飲んだばかりのおなじ茶碗で娘が、氣のせいか、わざとに茶碗の緣を嘗めるやうにして三杯もの茶を飲んだのである。まるで死の神がこの娘の美しいのを嫉んで傍から手傳つて疾を盛る器で飲ませてゞもゐるかのやうに。

これだけの出來事を土臺にして私はこの家族の過去と未來を醫學的に筮して見よう。

前にも書いたやうにこのきやうだいには恐らく既に母親はない。さうして、その母親は今から長くて五六年か二三年前に亡くなつたものであらう。ひよつとすると母親のなくなつたのはまだごく最近の事であるかもしれぬ。この考察の基礎はかうである。

前にもいつたやうにこの三人は普通の家族としては寂しい風のある人々である。お父さんは半病人であるから、靜かなことは怪しむに足らぬとして、ふたりの兄妹

はたとへそれが人目のある汽車の中であるからとしても、若い者としてはあまりに寂しい。それに父親にふたりのきやうだいがついて旅をするとすれば、あれば母親も無論一緒でなければならない氣持がするのであつて、それが一しよでないのはすでに母親はないのであらう。若し母親が、餘ほど以前に亡くなつたものとすれば、行き暮れた齡ではない父親と二人しか子供のない家庭には恐らく後妻が必要であつたらう。後妻を娶つたとすれば、このきやうだいは未だ學業中であるから父親の商用か、遊覽の旅には後妻がついてゐるのが定めであり、きやうだいは恐らく一しよでないのが普通である。假令、この土曜日から日曜にかけてのこの小旅行にきやうだいを連れた事に學業中だからとて別に不思議はないとしても、全家族と見ゆるこのうちに母親を入れないのは普通ではない。またこの父親はすでに少くとも二三年長ければ六七年もこのかた半病人であるから、三四年前に母親が亡くなつたとしても後妻は娶らぬであらう。それにこのきやうだい、ことに兄と見ゆるのが、始終父

親の小用をきゝ父親をいたはつてゐる容子から察するに、慥に母親はないと觀る。三人ことに子供二人の寂しい容子が悲愁の創痍がまだ新しいものゝやうにもあるから察するに事によれば母親はツイ先頃亡くなつたばかりであつて、こんな梅雨どきにこの三人連れて可なり遠方の汽車旅行をするのは、或は母親の本葬儀か遺骨納めをこの家族の故郷で取り濟ませての歸りがけではあるまいか、とも想像される。すなはち、母親を喪つたことは極最近のことであるかは姑らく別問題として、私の氣にかゝるは、その母親の病氣が何であつたかである。

亡くなつたのは三四年前であるか、または、極最近のことにもなる。

これは正直のところ到にははつきりと出ない。乃て父親と、ふたりのきやうだいの體格より觀察し、遺傳の法則を用ひて多少附會の說を試みるならば次のやうであらう。

父親は前にもいつたとほりに、所謂上品な造りの蒲柳の質であつて、現にはすて

に輕からぬ肺患であることは爭ふ餘地はない。しかしふたりのきやうだいが、父親そつくりの細作りて、節の伸びた質であることは、父親にばかり似たものであるとしては、勿論あり得ないことではないが、遺傳の法則からして母親を無視したことになる。そこできやうだいのうち一人だけは少くとも母親の體質體格を享けたものと見るのが至當である。ことに紫陽花の皮膚の色と冴えは父親にも、兄にも似てゐないからして、これは母親よりのものと見る。さうすると母親も亦色艶の惡い皮膚を有つた病身の細い質の人であつたことになる。さうして結局三四年の前か、またはごく最近のことゝしても、まだ三十臺の盛りの年齡で亡くなつたのであるが、所謂蒲柳の質であつて、子供はこの二人が出來たが、後は出來なかつたか、出來たとしても、育たなかつたところを見ると、すでに十年內外もの長わづらひをして終に起たなくなつたものに相違ない。すなはち九分九厘まで極慢性の結核性の疾患である。さうして遠ければ五六年前、近ければ極先頃亡くなつたのである。父親もすて

に可なり長く病氣であるが、稼業が餘り陽しい方ではないのと有福で醫治養生に事缺かぬのとて兎も角業務に差支ないだけには保つて居り、兩親のまだ若いさかりに出來たこの二人のきやうだいだけは、兎に角無難に今日まで育つて來、その後ひとり、二人出來たかも知れない子供は、兩親のどちらか、若くは二人ともが病氣であつたが爲めに、極弱く生れ、恐らく乳兒又は幼兒時代に亡くなつたものであると思はれる。

これがこの家族の過去である。

さうしてかやうな悲慘なるこの家族の歷史を此まゝ推し進めて行き、一つの茶碗で三人がいとも平氣に茶を呑み合ふ無理解なる衞生上の生活を持續して行くならばこの家族の未來は、なほ一層悲慘なる運命を辿るに相違ないやうに思はれる。

さしあたり、この父親は現に罹つてゐる病氣のために遲かれ早かれ、配偶の後を逐うて行くことになるであらう。何故なれば、現今までの醫術の力を以てしては、

假令、金錢に糸目はないとしても、これほどの病氣を全治させる力はないからである。卽ち父親の壽命は恐らく最早時の問題である。私はこのふたりのきやうだいが事によるとまだ十分世に立つことのできぬ間にこの父親を喪ふかも知れないことを洵に堪へ難く氣の毒に思ふ。けれどもこれは今となつては殆ど拒むことのできない運命であるやうに思ふ。

さて、父親は假りにそれて致方ないとして、それから後のきやうだいふたりはどうなるか。

私がこの悲慘なる記述を敢てし、この氣の毒な家族の未來の卦を立てることに念を懸ける譯は、專らこのきやうだい、一は大白蓮の蕾のやうな息子と、一は紫陽花の洋服を着た、鬱金色の薔薇のやうな娘との將來の健康、その健康如何によつて岐れる彼等ふたりの未來の幸不幸を卜して、出來得ることならば普通の健康と天壽を保つて、多幸なる生涯を未來に授けてやりたいと思ふ人類愛の感情に外ならないの

てある。

淡つさり言つてしまへば、このふたりの將來の健康は到底も安坦ではない。その體質から見てすでに危險であり、一つの茶碗で三人が茶を呑むことに三人ともが平氣であり、母親もさうであつたらうと思はれるのに、父親は現に餘り輕からぬ肺患であり、少くとも父親自身は之れを知らない筈はないのに、過去すでに幾年かの間このやうな無理解な、危險な生活法を續けて來たのであるからして、このきやうだいは、恐らくすでに確かに親の病氣に傳染してゐるに相違ない。併し此ふたりは倖にして幼少の時期を無難に過ごしてその傳染の時期は漸く學齡以後であるらしいから、傳染はしてゐても、幸にまだ發病して、醫治を要する病氣にはなつてゐないのである、私がなほ別にひとり二人のきやうだいが、このふたりの後にあつたらうと想像し、それは恐らく乳兒期か幼兒期に亡くなつたかも知れぬと思ふのは、その後の子供は兩親のうちのどちらかゞ、すでに病人になつて、痰や咳嗽をするやうに

なつてから出來たのであつて、所謂幼乳兒期傳染に因つて急性の呼吸器疾患を起し、醫治を盡す暇もあるやなしやの間に敢なくなつたものであるかも知れぬと想ふのであつて、それはかうした病父を中心にして、怖ろしい危險な演り方をする生活振を睹たからに由る觀察である。

そこでこのふたりのきやらだいはその體質から見てもすでに殆ど明かに病氣に感染してゐるのであつて、父親の壽命の長短に拘はらずこのまゝで行けば早晩ふたりもまたおなじ病氣になる、兄の方はこれから中學を出て、高等學校か、高等商業あたりの入學試驗前後若くは大學への選拔試驗前後が危險の瀬戸である。幸に非凡な秀才であつて、入學試驗や、大學の選拔試驗などに何の苦勞もないならば、或はそのまゝ持ちこたへるかも知れないが、普通の能力で、皆の者とおなじやうな無理な勉强をしなければならぬとすればこの二つの峠は彼れの健康と、從つて將來の幸不幸との岐れる關ヶ原である。何故なればこの父親の現に有つてゐる病氣は、最も

多く二十歳前後に發病するものであり、入學選拔試驗の如き心身の過勞と衰弱に乘じて、また最も屢々發病するものであるからである。

紫陽花の方は息子とは少しく徑路が違はなければならぬ。この人の女學校の卒業は、よほど手强はい對手があつて、優等生としての競爭を無理にするやうなことをしないか、又は餘りたびゝ風邪を引くやうなことがない限りは、先づ無難である。何故ならば、女の子は女學校の入學試驗にはかなり骨を折るが、その入學後はこれを卒業さへすれば、まづ一人前であるから、今いつたやうな特別な競爭でもしない限り、又は特別に肺患發病の誘因がない限り、割に呑氣に卒業までは行くのが普通であるから。

さらばこの美しい上品な娘は、其後の生涯が全く父母の病氣と關係なしに無難であるかといふと必ずしもさうでない。素より私もこの娘が全くこの忌はしい病氣から離れて、いよ〳〵ますゝ麗はしい花のやうな生涯を送ることを衷心から冀は

ずには居られないものではあるが、この娘の運命は、この儘で行けば、過去の歴史の延長を辿るより外には途が無いのであつて、寔に餘儀ない艱難がその健康の上にかぶさつてゐる。その危險の關所はこの娘の結婚と、妊娠と、お産との三箇所に在る。この三ッの難所に當つて起るこの娘の生の脅威は、氣の毒にも、やはり父親のそれとおなじ性質の病氣である。

これてうらない者としての私の記述は終ひてある　私は偶然汽車の中で遭遇したこの三人の家族の狀態を觀察して、賴まれもせぬ運命判斷をなし、しかも徹頭徹尾不吉の想察を以て終始したことの無禮を幾重にもお詫びしなければならぬ。事實私自身にも、この記述をすることによつて、言ひ知れぬ悲痛を腦心から指頭髮端まで覺ゆるものであることを告白する。さうして、それだけまた、この家族の人々に衷心からの同情を捧げるものである。

そこで私は、自ら多少の先覺者を以て任ずる醫者として、このふたりのきやうだ

いが、殆んど免れ難い惡い運命から脱却するの途を攻究し、援助してあげたいと思ふ。またこの願望を成就することによつて、一はこの氣の毒な家族をこの記述の材臺とした無禮のお詫びの印とし、他は、おなじやうな運命を擔つて、之れを知らずに過ごしてゐる世間の多くの青年男女への警戒となしたいと思ふ。これが驅てこの記述をなすのほんとうの目的であることは言ふまでもない。

一ト口にこれを言へば、それはこの兄妹又はこれとおなじやうな青年子女に『發病豫防の結核免疫法』を施すことて盡きる。

結核豫防の問題は全世界を通じての人間生活の實際的大問題であつて、しかもそれに對しては權威ある學術的研究も、實用的方策も未だ曾て存在しなかつた所のものである。

由來結核といはず、一切の傳染病豫防の絶對的豫防手段に二つの途がある。その一つは病原を剿滅するの方法と、他の一つは各個人の身體を免疫性になして、如何

なる病原の渦巻く中にも平氣で出入することの出來るやうにすることである。前の場合の傳染病豫防法は例へばペストや、コレラなどの流行にあたつて、流行區域の家屋や、地域などを嚴重に消毒するやうなのを指すのであり、後の場合は天然痘に對して個人々々に種痘免疫を施して如何なる天然痘の流行にあたつても、平氣で生活してゐられる如きをいふのである。

結核に對して、どちらの豫防法を採るべきかといふことが、大切なる考察の分岐點である。而してこの分岐點に立つて、いや、まだこの分岐點までも行き得ないうろつとしてゐるのが今日までの結核豫防を口にする人々の態度である。私はこの態度に憚らぬものである。さうして猶豫と、遲疑することなしに、

『結核豫防は個體の免疫を施すこと』

によつてのみその目的を達し得るものであると主張する。しかも、この考へは私にとつては確乎不拔の考へであつて、幾分にても、あぶなつかしい分子がその中に混

じつて居り、事によれば將來考へ直して、世間に謝罪まらなければならない底のものであるとは毫頭も思はれない。何故なれば、結核の流行は今では世界人類の住まふ所には漲ぎりわたらぬ隈もないのであつて、これをペスト菌や、コレラ菌が或る地方若しくは一二の都市のホンの一局部に限局してゐる場合のやうに、家屋や、物件や地域を消毒し、日照したりして、結核菌の剿滅を圖ることは人力の企て得ない事柄であり、結核に罹つた人を、ペストや、コレラに罹つた人々を避病院に隔離するがやうに健康人から隔離することは世界人類の何割かを隔離しなければならないものであるから、これまた、未來永劫に相談にならない底の事柄であるからである。

即ち、結核の病原を剿滅せんとする方策を以て結核豫防の目的を達することは未來永劫に成し遂げ得ない仕事である。

從つて殘るは、個人々々の身體を結核免疫にして、如何なる流行の中に飛び込み行くも平氣であり得るやうにする事が結核豫防の唯一無二の手段であらねばならぬ。

さて、この結核豫防免疫は從來何人にもこれを成し遂げ得なかつた研究的事業であつたが、私共數年來の業績では間違ひなくこれが可能の範圍にはいることを得た。

この豫防免疫法を更に二つに別ける。

一は、生れて間もなき赤ん坊か若しくは學齢前までの總ての兒童に施す所の眞正の豫防免疫法であり、恰ど、種痘に類するものである。

その二は、恰ど紫陽花の娘等きやうだいのやうに、すでに非常に屢々傳染の機會に出會つて、恐らく慥に感染して居り、而も未だ、醫治を要する疾病にはならずに居る場合に『發病を豫防する』豫防免疫法である。

赤ん坊に向つて、種痘とおなじやうに結核免疫を與ふることは、或る特別な場合例へば、家族間に傳染危險な病人が同居してゐる場合を除いては、差しあたり絶對的に必要だとは言はない。但し學齢前頃の都會地の兒童にはすべてこれを施すことを以て理想とする。

紫陽花の娘等きやうだいのやうな場合には何等躊躇することなしに、私はその發病豫防の必要なる事を、誠實なる人類愛の感情の上から高唱するものである。さうしてそれは殆ど確實に成就すべき願望であることを主張するものである。

乃て紫陽花の娘等きやうだいは先づ以てこの發病豫防の惠みを受けて彼等ふたりの將來の健康と幸福を保全し、これによつて私が、彼等をこの話の材題に採つたことの無禮を赦して呉れることを切に望むのである。

しかし、この結核の個體免疫法を實行してゐる所は世界中にまだない。私共の研究成績によつて、この豫防免疫法が略完成してから未だ餘り日がないからである。これを實施してゐる所は吾が大阪において非常にその必要を認めらるゝ或る特別な團體においてばかりであるが、最近開設せらるべき大阪市立結核相談所において は必ず一般の希望に添ふことが出來るであらう。

さらば、美しき紫陽花の娘よ、大白蓮の如きその兄よ、復たの邂逅を俟たん。

附錄＝結核豫防の根本策

本論文は大正十一年十月先づ内務省衛生局に提出し、次で醫事公論紙上に登載されたものである。

一、緒言

近頃、獨墺の醫學が、餘程神秘的になつたと傳へられる。實際に其傾がある。殊に結核問題に就て、それが太だしい。結核の素因論や、體質論の復興的擡頭が、その一例である。

此傾向を産むに至つた原因を考へて見るに、二、三ある。卽ち一は、獨墺醫學者

が、經濟上の困難からして、戰前の如く、一切を實驗に訴へて解決するを得なくなつたから、已むを得ず、思索的方面で事を片附けやうとするやうになつたのである。二は戰後彼の國民生活が、內外に幾多の脅威を感ずるが故に、思想が概してデプレッシーヴになつた爲めに、此傾向を產んだものである、喜怒哀樂に敏感な彼等を識る者は、此條項を見逃すことは出來まい。三は殊に結核に就ての問題であるが、戰前は統計に現はれた事實として、僅づゝながら、結核死率の年々遞減するの傾向あるを以て、彼等の誇りとして居た。而して是は、主に國內の結核豫防法が、學術的に組織立てられてあり、且つ國內に良く行き亘つて居るの故であると、考へて居たが、戰爭中から其後、國民の生活が惡くなり、榮養が不良となるや否や、結核は頓に險惡化して、全國到る處甚だしく其慘害に苦むやうになり、所謂衞生思想の普及や豫防施設の如きは、何の役にも立たなかつたといふ有樣になつたので、

『自然に對する人力の餘りに無力であること』

を、不知不識の間に悟り、乃で此のやうに神秘的傾向を產むの原因をなしたものと思ふ　而して結核では素因說や、體質論が再び勃興して、細菌免疫學の振興以前に時代が四十年程逆轉して來たのである。

實際獨墺と言はず、其他の歐洲の數國で、戰前年々結核が遞減してゐた眞因は、專門の學者や、衞生當局者等がそれを誇りとしてゐた如くに、結核豫防法の制定實行や、衞生思想の普及によつてのみ、彼のやうな結果を產んで居たのであらうか、或は戰前三四十年彼等の一般的文化が進んだお蔭で、生活程度が向上した爲めに外ならなかつたのではあるまいか。乃で一朝彼等の生活條件が粗惡になつて來るや否や、結核蔓延の狀態が、倏ちにして大逆轉を示して、今日の慘狀を呈するに至つたのではあるまいか。私は之を疑ふ。

若し此の惡い推察が當つてゐるとすれば、それ程今日迄の世界各國の採つてゐる結核豫防の方策は、其實効を擧げる上に於て、極めて微力なるものと謂はねばなら

ぬ。而して五十年百年此努力を盡したるの報酬は、極めて尠少であつて、不幸にして一朝國民生活の脅かされることがあれば、其努力は乍ちにして水泡に歸するのである。

吾等は、それでも矢張り從來の方策を踏襲し、之に依賴して晏然として居て可いのであるか。悉くの人間に、空氣と光線と、榮養と勞働とを適度に與へなければならぬが爲めに、彼等を皆百姓にして終つて可いのであるか、農夫となることの出來ない、國民文化の中心を成す都市の住民と、その子女とは、末代まで、絶えず結核の脅威を蒙つて、身體を軟弱にして子孫の衰滅に趣くのを拱手して傍觀しなければならぬのであるか。空氣と光線と適度の勤勞とを有ちながら、最近二十年間酷だしく結核の猛襲を受け、多數の急性結核を出し、慢性結核に苦しみ、先祖傳來未だ曾て之れあらざりける慘毒に惱みつゝある、本邦各地の『結核處女地』の同胞等を救ふの途は、如何にすべきであるか。

私は此等の事を考へる度毎に、自ら重症の肺患を有つ者以上に痛みと苦みとを肺心の間に覺える。吾等は、此上晏如として、慘澹たる現狀を看過することは如何にしても出來ない。

然らば此現狀を如何にして排開し、救濟すべきであるか。

私は之に就て、私の腹案を陳ぶる前に、必要なる二三の論議を費やすことの自由を有ちたい。而して此論議の中に、尊敬する先輩や愛すべき同學の士に、多少敬意を失するやうなことがあつても、それは冀くは容赦されたい。

二、從來の結核豫防法批判

一、結核豫防協會

結核豫防協會が、縱へ或は個人の勢力の爲めに設けられた（大阪の如き）傾向は

ありとしても、事業其物に就いては、決して非難すべき筋のものでなく、素より滿腔の感謝を値するものてある。而して現に之に與る各方面の人々の誠心誠意てあることに、私は疑ひは有たぬ。

但し、誠心誠意の發動には、聰明が伴ふ場合に於て、多くは初めて感謝の價値がある、唯誠心誠意てさへあれば、如何にそれが發動し、如何の結果を生んても感謝すべきものだとはいへぬ、俗にも、贔屓の引き倒しと云ふのがあつて、聰明の伴はない誠心誠意は、往々危險なものてさへあり得る。

さればとて、私は、結核豫防協會の諸君の策が危險てあるとは更に思はない。其誠心誠意結核防滅を目的とするの熱心に向つては、感謝するに吝かならざるものてあるが、併し、其誠心誠意の發動が、今日迄に齎らした結果には――他の多くの結核研究と等しく――何等感謝すべき物を見ないのを、甚だ遺憾とする、最近の例を以て、試に本年松山市に於て開かれたる同聯合大會の建議の内容を見るに、會合

せる諸君の聰明の尺度を、失禮ながら、疑はざるを得ない。今其建議案の一てある『路面放痰を禁ずる法令を發布せられんことを其筋に建議するの件』を見、其文字の上に現はれてゐるだけの意味を以て其の可能性を考へて見るに、私は之は『出來ない相談』てあると思ふ。縱し是が、法律として現はれて、國民一般に實行出來るものと假定しても、今一つ放痰の前に起る生理病理的の出來事、即ち『咳嗽』を取締らねば、何の役にも立たぬと思はれる、法律て以て咳嗽を禁止すること――放痰も亦――は飯を喫し、水を飲み、空氣を呼吸すること、即ち個性の生の權利を奪はずば行はれぬことのやうに思はれる。――道路上の有菌痰や、開け行く交通機關等の結核傳染が、危險てあるべきは言を須ひないが、最も危險なる傳染源は、患者の咳嗽てあることは、今では誰人も疑はぬ所てある。

今一つの案たる

『圖書館内備附圖書又は貸布團、貸本等の消毒を完全に斷行されむことを建議す

るの件』

てあるが、成る程、圖書館の圖書、貸本、貸布團等が、結核やトラホーム等の傳染を媒介することもあるらしい――之は學術上の慥かな證明が乏いから、らしいといふ――ことには異存は莫い。併し此案に就て、私は、二樣の不透明點を發見する。

其一は此案の內容が、小鱗を捉へて、大魚を逸してゐる點である。何故に消毒を要する物の範圍を貸本、貸布團、圖書館の圖書に限つたものであらうか、何故に今一歩を進めて、貨幣特に紙幣を人から人に受け渡しする毎に消毒することを建議しないであらうか。何故に一切の賣買品を人々受授の度毎に消毒せぬて可いであらうか。一切の交通機關は出入口及內部の設備を一日數回消毒せぬて可いのであらうか。電車の車掌と乘客は切符を扱ふに口に銜へることは勿論、一切唾液を用ふべからざること、若し之を用ひたる時は消毒して渡すべし、とは建議せぬてあらうか。何故に總ての營業的食器は客毎に嚴重に消毒すべしとはせぬてあらうか。凡そ之に類似

した萬般の事柄を包含すべき建議には何故出なかつたであらうか。是れ其不透明なるの第一である。其二は、何故に『完全に勵行』されむことを建議するのであるか、既に今日までに不完全にでも勵行されてゐるのであらうか――若し不完全にでも勵行されてゐるやうの法律若しくは實行があれば、速に謝罪して、此文を取消さうか――私は之を知らぬが、兎に角訝しな文句である。是れ其不透明なるを云ふ第二である。

同聯合會では、其他彼是の建議があつた。世界に於ける細菌學並に結核研究の大先達であらせらるゝ北里先生は、亦日本結核豫防聯合會の會長であらせらるゝ關係上、此建議は先生の名は以て其筋に提出されたことを、其後の新聞で承知したが、先生には定めし窃に苦笑を禁じられなかつたことゝ推察した。又極最近に內務大臣から（？）各地方長官宛に、此建議の內容を傳へるの通牒があつたやうである。此文書は從來の例によれば、是から各醫師會への通牒となり、醫師會よりは更に其會

員への通牒となるであらう。而して此通牒は――少し言ひ過ぎかも知れぬが――從來の這種の通牒と同じく『通牒』として終るのが、其最期であらう。

私の望む所では、日本結核豫防聯合大會といふ如き大殿堂から出る建議なれば、責めては、

『傳染病豫防法の一切を結核豫防法に適用せよ』

位には出て欲しいものである。而して之を一層徹底的に行ふ爲めには、素より斷乎として、一、醫師には屆出義務を負はせようし、二、衞生警察では一切の類似症をも報告させようし、三、患者は全部隔離しようし、――縱しそれが人間全部を隔離することにならうとも――四、患者の職業を制限しようし、結婚を禁止しよう、怪しい子供の就學にも干渉しよう、五、之を背く者は罰金、體刑にも處しようとは、何故出なかつたであらうか。私は之を疑ふ。

而して私は、各地の結核豫防協會等が、今日までに擧げ得たりと思はるゝ效果に

見て、今後の擧功の何程のものであるかを想像して長大息を禁じ得ないものである。

二、結核療養所

從來諸種の結核豫防事業の中で最も意義あり且つ有力であると思はるゝものは、有毒患者の隔離を目的とする結核療養所である。併し私は、現在日本に存在し、又設置せられんとしつゝある程度の結核療養所に就て、多くの議論を費やすの勇氣が無い。而して縱し之が現在に倍加し、若くは三倍しても、全國の結核豫防の上からは勿論、療養所所在地都市だけの結核豫防の上にも、蓋し九牛の一毛であらう。私は多大の公費と國帑とを、此事業に費やすことの當否と其利益とを疑ふ。其他各種の結核豫防上の施設と努力等は、多くを言ふに値せぬ。

從來の方策に依る國の結核豫防法や、其施設や、結核豫防宣傳の諸團體や、其他の努力と權威とは、結核防滅の大功を樹てんが爲めには餘りに無力無能である。

三、治療醫學の力の範圍

傳染病にも其數の少きなものにあつては、特に個人的又は社會的豫防法を須ひずして、治療醫學の力に依つて殆んど完全に之を驅逐し、或は既に之を怖るゝの必要なき迄に到り得るものがある。吾等はヂフテリアに於て之を觀、此大功を、其治療血清に感謝し、北里、ベーリングの名を記念する。

併し既に稍多數に存する疾病に向つては、治療醫學の力の及ぶ範圍は、到底限局的であり得るのみである。又縱へ其治療法に極めて優秀なる方法ありとするも、之に依て能く其疾病を撲滅し得るの權威を有ち得ない。吾等は、之が實例を黴毒に於て觀るのである。

黴毒の數は統計上に於て之を知ることは非常に困難で、或は不可能であるが、其實數は一、先天黴毒は多くは生後速に死亡するか、又は醫治によつて比較的完全に治癒し、二、黴毒に感染する年齡が殆ど必ず青春期以後の青壯年期に限り、三、感染の機會が或る一定の場合に限られてあり、四、最多數は感染の明かなる場合速に相當醫療を施し、五、治療法が多く且有效であつて非常に屢々完全に治癒し六、正當なる結婚と通常の操守に依て、絕對的に傳染から安全である等に由つて、結核に比して著るしく稀少であるべきことは想像される。

夫れにも拘らず、チヴィリザチオンはジフィリザチオンと離るべからざる對語なりとされ、黴毒の絕ゆるの期は無いかの如くに唱へられて居る。

是に由つて觀ても、治療醫學の及ぶ範圍と、其威力とは、箱廣く存在する疾病に對しては、到底決定的の價値は乏いものであるを識ることが出來る。

矧んや、結核の治療法は、黴毒のそれに比して甚だ幼稚、無能であつて、臟器結

核を確實に治療し得るの方法は、未だ絶無であり、其發生の場所、卽ち主として肺、骨、關節等は消炎の爲に、最も必要なる安靜を保たしむるに、最も不適當なる器官である（有馬臟器素因觀參照）其國內蔓延の範圍は、交通機關の發達に連れ、都鄙の交通頻繁となるに從つて、年々擴大され、工業特に紡績其他纖維業の繁盛となり、僻陬の地に女工を求め、結核感染の後、之を放還するの結果、結核處女地に於て猛烈なる急性、慢性結核の新流行を誘起して（岐阜縣高山地方、宮崎縣、鹿兒島縣の僻地、其他）、滔々たる勢今や殆ど停止する所を知らざらんとするものがある。

此勢に抗せんとする結核治療法の現況は、薄弱實に言ふに忍びざる程のもので、徒らに私利を射る奸商俗醫の跳梁に委するの狀態である。

治療法が優秀であつても其數稍多き疾病に對しては既に絕對的の權威は莫い。況んや治療法に稱すべきものが一もなくして、疾病の數と範圍に際涯が莫いのである

から、結核の豫防撲滅を治療醫學の力に俟つことは、百年河淸を持つと選ぶ所は莫いのである。

四、結核の本態

こは云へ、是等一切の不透明、無策、無力は、亦決して、結核豫防協會の役員諸君や、國の法律の不備や、其豫防施設の不足や、治療醫學の無能等のみの責任では莫い。詰り、擧世咸な未だ、『結核病の本態を洞觀する能はざる』の罪である。敵の何程の者であるかを識らずして、之を謀り、之に打ち捷たんと欲するの無理であることは、必ずしも孫吳を俟たずして知るべきである。

私は數年來、此疑惑に逢著して、稍多くの苦心を重ねて來た而して何より先に、

本病の本態を洞觀し本病の概念を定むることの必要を感じて、種々の考察を爲し、稍廣く文獻を渉獵し、亦多少の實驗を積んで、次の如く、之を概括することを得ると思ふに到つた。

結核病の定義

結核病は結核菌の體内侵入に因つて、

一、之に感染し、進行性急性なる、主として肺及腦膜結核を構成して、多くは其個體を殪し（余の所謂本型、結核感染の第一類）

二、感染し、長き潛伏期（腺結核期、佐多等の結核第一期）を有して、其間に免疫とツベルクリン過敏性を享受し（佐多等の結核第二期に概當す）、後徐ろに慢性臓器結核を惹起して臨床的疾病を構成し、（佐多等の結核第三期）、屢々自然に、又は治療に依て、治癒し（佐多等の結核第四期）、若くは增惡して、個

體を殪し（余の所謂變型、結核感染の第二類）。

三、或は菌の體内侵入に感染せず、若くは感染して潛伏に終り、免疫とツベルクリン過敏性を享受して、臨床的疾病を形成せざるに終る（余の所謂變型、結核感染の第三類）。

則ち、『結核病は個體の抵抗力、即ち免疫無き素地に發しては、急性傳染病であり、弱き抵抗力、即ち不完全免疫ある個體には慢性傳染病となり、之に免疫の增强し得るあれば治癒し、其增强し得ざる場合は極めて緩慢に免疫を消耗して個體を殪し、免疫更に强き個體にては疾病を構成せざる傳染性疾患である。從て之に罹患するとせざると、罹患して輕重あるとの岐るゝ所は、繫りて一に其個體免疫の有無と强弱とに在るのである。』

而して免疫は、特殊の免疫原に對する各人通有の生物學的作用に由つて生じ、又增强せしむることを得べきものであるから、

結核豫防撲滅の眞髓は自然の法則卽ち個體の生物學的作用を利用する免疫法を講究するを以て其唯一無二の方針とする。

（此斷定に達する迄には種々幾多の論難を打ち破らねばならぬのであり、私は之に對して、略ぼ十分の準備を有するのではあるが、今は之を略す）。

五、傳染病豫防の絶對的方策

結核は免疫的事實の儼存する傳染病である。而して其防滅は此免疫を利用するに依つて、初めて完成するものである。

今私は、本論の參考とする爲めに、免疫を有する傳染病の二三に就て、其合理的豫防法と成績とを極めて概略的に回顧しよう。

一、天然痘豫防法。此項に就ては、多くを贅するを要せぬ。種痘法の發見、並に其普及迄の天然痘豫防法は、世界各國共、國家的、公共的豫防施設等は何等無かつた。其流行に遭ふて、各家庭若くは村落等で行つた豫防法は、皆唯だ迷信的なものであつた、「其病原は今日も、猶ほ未だ知られないのであるから、其當時學術的豫防法など、素より有り得よう筈が莫かつた。それが、種痘法の發見普及と俱に、倏然として絶滅に近い今日の狀態になつた。而して殆んど總ての人類を侵さゞれば已まない一大流行病を撲滅するが爲めに、之れ以外何等の議論も施設も必要としないのを敎へて呉れた。

『自然の法則卽ち個體の生物學的作用を利用した免疫法が其唯一無二の豫防的方途であつた。』

二、腸チーフス豫防法。腸チーフスは、二十年來歐洲の文明的都市に在つては、殆んど之を見るを得ざるの歷史的流行病である。腸チーフスは上口より進入し、下

門より排泄さるゝ病源に因つて起る所のものであるからして、適法なる文化生活を營み得る場所、上下水道の完成し、傳播の源たる患者を完全に隔離する事を得る場合には完全に之を豫防する事が出來る。是は社會文化的施設に依て、流行病を豫防撲滅し得る場合の例證である。

併し此場合は幸にして腸チーフス病が、一、飲食物と俱にのみ人體内に侵入するといふ簡單なる傳染經路を取ること、二、流行の區域が毎に局所性であつて、三從て患者の數も全住民に比して僅少であり、四、疾病の經過が短かくして、之を隔離することも完全になし得ること等が此文化的施設の效果を誇らしめて居るのである。併し此社會文化的施設の腸チーフス豫防撲滅力は、實は極めて不完全微力なものであつて、一度其文化生活の地を放れるや否や、其慘害は忽ちにして、猛襲し來るのである。從來の戰爭に、疫癘が附物であつたのは最も明瞭に此間の關係を語つて居り、如何なる文明國民と雖も、彼等の文化生活を營み得ざる戰場では、疫病

から免れることは出來なかつたのである。

然るに先回の大戰では、此疫病の慘害が從來に比して、殆んど皆無に近い程尠かつた。

其原因は、戰爭中各國共戰場に送る者に向つてチーフス及びコレラの豫防接種を勵行したる結果である、若し此の戰爭に此豫防接種を行はなかつたとしたならば、彼の不都合なる塹壕生活は乍ちにしてチーフス、コレラの屍を以て、塡められたであらう。幸にして此事の莫かつたのは、一にも二にも、此豫防接種の效果である。

此所でもまた、

自然の法則卽ち個體の生物學的作用を利用した免疫法が、其の唯一無二の完全なる豫防的方途であつた。

六、結核豫防の原則

則ち知る、一般豫防法の制定や、施設や、衞生思想の普及などは、――素より、有は無に勝ること萬々であるとはいへ――傳染病豫防に對しては、到底絶對的の權威は無いものであることを、矧んや神秘的思索など畢竟、何事を成し。何物を齎らし得ようぞ。吾等は結核豫防撲滅の大功を樹てんが爲めには、從來行はれて居る所謂豫防法に蹋蹐してゐてはならぬ。又曖昧なる素因論や、體質論に日を暮してゐてはならぬ。唯だ驀地に『自然の法則を活用する個體的豫防接種の研究完成』に突進すべきである。

結核は人類の住ふ處、殊に大小都會地及び之に關聯ある所に在つては、既に純然

たる地方病である。而して、總ての傳染病が、一地に永く浸潤して、地方病の形を取るに至れば、必ず常に、小兒を侵すを以て、本性とする如くに、結核感染は亦小兒期に行はれ、十五歳未滿にして、殆んど總ての人間が其感染を了し、余の呼んで結核病の本型とする急性惡性の結核は、殆んど皆乳幼兒期に在り、其死亡實數は衞生統計上に表はれたる如く、僅少なるものて莫く、我邦のみにても、毎歳恐く二十萬を降らぬてあらう。其上、其慢性型は性と年齡に關らず無數に存し、年々少くも十五萬以上の生靈を奪ふのてあり、患者の實數は略ぼ之に十倍し、且又其流行には時季がなくして、春夏秋冬增減する時すら無く、傳染の徑路は、チーフス、コレラ等の如く簡單なるものてなきこと、人類は造次顚沛其危險の中に生活してゐるものてあること、其數の多きと、經過の長きの故を以て、之を完全に隔離することは、永久絶對に不可能てあること、是れ皆周知の事てある。從來の如き方針を以て之が豫防撲滅を策せんと欲せば、國帑の全部を擧げて之に費やすとも猶ほ其及ばざるを

悔いなければなるまい。況んや一場の議論に決したる建議をや、之に依つて出て來れる一片の通牒などをや。

自然の法則卽ち個體の生物學的作用を利用して個人の免疫を得せしむる豫防接種法を完成するに非ざれば、人類は永久に結核の慘害から免れることは斷して出來ないのである。

七、結核豫防接種の材料

事實の後楯を有たない議論は、卽ち空論である、無責任である。現實に慊らない場合には、空論も時に必ずしも無益では莫い。が併し、私は少くとも――無責任なる空論を說きたくない。然らば我等は何等の根蔕に據り、何物を以てか結核豫防接

種を行はんと欲するのであるか。

ツベルクリン（數百種に亘る一切の菌毒並に死菌製劑を含む）を用ひんか、無毒抗酸菌を借らんか、牛結核菌を須んか、フリードマン製劑を採らんか、志賀氏結核ワクシンを取らんか、ゼルターの生ツベルクリンに依らんか、佐多氏粉狀結核菌を以てせんか、我等は其孰れに對しても、十二分の敬意を表し、虞みて其將來を望觀せんと欲するものである。

さて又私共は去大正九年四月大阪に於て發行したる『佐多博士在職廿五年記念祝賀論文集』に、私共の研究を敍述して、『結核免疫の過去及び將來を論じて余等が蠟質に乏しき結核菌培養に及ぶ』の一文を揭載發表した。而して其文中に、

一、ツベルクリン若くは死結核菌及其毒を以てする結核免疫の研究は已に餘蘊なく其前途は梗塞せり。

二、將來の結核研究は生菌免疫に依て其新生面を展き來らざるべからず。

三、人牛結核菌以外の抗酸菌を以てする人結核免疫法は免疫學上の根據無し（豊田）。

四、人結核免疫に牛結核菌を用ふるの可否は、將來恐らく多く論議せられざるべし。從て人結核免疫の將來は、繫りて生人結核菌を以てするの一點に在り。

五、結核患者は結核菌に對して免疫性を有するが故に、治療に應用せらるゝ生人結核菌は唯結核患者に無害（若くは無危險）なれば足る。生菌自家ワクチーン、若くは最も弱毒なる菌株を以て造れる生菌株へテロワクーチン、を結核患者に用ふる事は理論上無危險なり。

六、豫防（嚴重なる意味に於ての）の目的に用ひらるゝ生人結核菌は啻に結核患者若くは結核動物に對して無害（若くは無危險）なるのみならず、健康人に對しても亦無害若くは無危險ならざるべからず、動物試驗に依て先づ之を驗證すべし。

の六項（當時七項）を捻出して、之を以て結核免疫將來の方針となすことを揚言した。次て同論文中に私共の研究の緒口に在つたものを記述して、次の結論を擧げた。

（其の一・二及び三は上の六項に重記であるから重ねて記さぬ。）

四、結核菌の有する蠟樣質は結核免疫には無用の成分にして同時に菌免疫の桎梏たり。

五、結核生菌の蠟樣質を除去することは從來曾て成功せざりしが、無蛋白培養基に適量のサポニーン質を添加することに依りて初めて成功したるに近し。

六、殆んど蠟質を含有せざる人結核菌は、之を「モルモット」に接種して吸收され易く、又毒性極めて弱く、適量を選ぶ時は病原性を現はさゞるを得るが如し。家兎に對しては其希望更に大なり。

七、馬の抗結核血清を以て感作せられたる「サポニーン」培養の適量は、「モル

モット」並に家兎に對して無害なるか若くは極めて弱毒性なるが如し。云々

其後二年有半に亘つて私共の研究と經驗は、

一、菌の培養法を愈々改良せしめた。二、豫防的並に治療的動物實驗は屢々大小の蹉跌を經て、併し稍理想的に進捗した、三、治療的臨床應用は勿論無危險に且つ屢々太だ有効に稍多數に經驗された。四、私共は此動物實驗及び臨床的應用に依て從來曾て記載されてゐない幾多の新現象に遭遇し、種々の新事實を發見した。而して、五、結核豫防の目的に用ふる免疫接種材料にして、理想に近きものを提出するを得べきことの希望を擴大した（詳しくは今後逐次發表する業績報告等に看られたい）。

接種材料に就て今一應一般的の希望を述ぶることが、許されるならば、先づ次ぎの如きものでありたい。

一、健康なる乳兒幼兒に對して無危險なること

二、使用法簡單なること

三、接種回數多からざること、從て接種並に免疫獲得に長期を要せざること

四、勿論免疫獲得の確實にして其持續の成るべく長きに亘り得るものなること

等である。詰り、天然痘に對する、種痘の如きもので、一層無危險なるものである事を理想とする。（種痘は決して無危險では無いことを牢記せよ）。併し、結核の本型を急性症なりと觀るとしても、其免疫的性質が天然痘等の如き急性發疹性疾病とは、太だしく異なる所があつて、種痘の如く赫燿たる効果のある接種法を完成することは、將來とも出來ないかも知れぬ。吾等は先づ、嚴密なる意味の豫防接種法（後段參照）に於て

十回以内の皮下接種を以て一ヶ年以内に完成する接種材料を得ること

を以て當分の目標としたい。

八、結核豫防接種の方法と時期

接種方法奈何は、主として材料奈何に依ることてあり、大體は上段述べた所に盡きて居るが、一體私の後來唱へんと欲するが如き、結核豫防接種を、現代の學者識者が、果して如何に觀てゐるか、又は結核豫防の將來を如何樣にせんと欲するのであるかを見んが爲めに、近年に於る殆んど唯一の這種の提案を左に略記紹介する。

提案者はフリッツ、トェプリッツ Fritz Toeplitz と云ひ、獨逸マンハイムの人てあり、十一頁の小冊子て題は、Die Ausrottung der Tuberkulose alsV olksseuche und die dringend notwendige Tuberkulosegestzgebund.（國民病たる結核剿滅法並に緊急結核法案）といふ。結核病に關する近來の觀察を說いて、次の十一條より成る法案を揭げ、之

は縣又は國の法律として緊急に發布施行せらるべきものなりと云ふのてある。

（大正十一年八月獨逸國にて發行の結核雜誌所載）曰く、

第一　滿二歲乃至滿十歲の兒童は毎年、滿十二歲及び十四歲にては各一回のピルケー氏反應を檢すべし、醫師は全部之が實行に當る。

第二　該反應を現はしたる兒童には強制的に完全なるツベルクリン療法を行ふべし。本療法は皮膚反應を現はしてより遲くも三ケ月以內に開始せらるべし。これが實行を爲す者は小兒科專門醫、結核醫並に特別なる敎習を經たる醫師たるべし。使用する製劑は各醫師の選擇に委すべしと雖も、必ず微量より極大量に及ぼし高價の耐疫性を與ふるを目的とすべし。

第三　兒童は治療を家庭に於て受くることを得。但し、母親若くは看護婦等の事情が、治療上寬借すべからざる體溫測定に適せざる中は治療所に收容せられざるべからず、醫師之を撰擇し、法の命に依て効力を生ず。

第四　過渡規定に依りて、現在滿一年乃至十四年の兒童に對して上記の反應を檢し、其陽性なる者全部に之を適用すべし。

第五　兒童の皮膚反應及び治療を忌避せんとする兩親其他は嚴罰に行ふべし。

第六　新移住者には特別の規定を設けて、些かも漏洩なきを期すべし。

第七　之に要する醫師の報酬は政府より之を支辨す。

第八　他の必要なる費用は若し疾病金庫の支出し能はざるときは國庫若くは市町村費より之を支出す。

第九　既成の結核豫防協會等が如何なる程度に於て新法に加擔すべきや、又既成の結核相談所等が新法と如何の關聯を取るやは尙ほ熟考を要す、但し新法の費用に關しては是等の既成機關又は慈善團體の助力に依賴する事あるべからず。

第十　特殊の治療所を建設するを要せず、各病院に此部を特設せしむべし。小兒保養所其他は直に之が實行に當るを得云々。

第十一　總ての開放結核患者を强制隔離すべし云々。

私は今此程案の一々に亘つて、之を批評するの繁雜を避ける　唯此提案を批評せんと欲する者の、是非共識つてゐなければならぬことは、大小都會地の兒童は殆んど全部、其他の地方の兒童も亦恐くは大部分は、既に滿十四歳以下に於て、ピルケー氏反應を表はし來るものであつて、是等全部にツベルクリン療法を徹底的に施さんと欲する場合には、實に莫大なる費用と、彼の醫師も患者も到底耐ふべからずとする、煩雜にして副作用あり。而かも其効力は場合によりては甚だ曖昧なる、ツベルクリン療法を又甚だ長期に亘つて實行しなければならぬことである。

依つて惟ふに、此提案は到底實行不可能のものであり、縱しそれが實行されたとするとも、其眞價は決して提案者の期待に副はないものである。私を以て言はしむれば、是れ正に溺るゝ者藁をも掴むの活圖である。但し私は此提案者が相當なる識見ある人物であることを想像するものであり。之を提案するの勇氣に敬服し、如何

なる犧牲を拂ふとも結核防滅の爲めに盡さゞるべからざるの現狀に痛感し、何等か伸展の途を拓かんとするの態度には、切なる同情を禁ぜざるものである。

私は今假りに理想的なる若くは理想に近き接種材料を得たる場合ありとして、其實行と時期とを次の如くに定めたいと考へる。

一、**狹義の結核豫防接種**　即ち未だ結核菌の侵襲を受けざる兒童、若しくは個人の豫防接種は、出來得る限り、速に之を開始する。若し家族若くは近親の內に開放結核患者ある場合に於ては、兒女は生後直ちに此接種を受くべしと主張する。一定施行年限の後は專ら此接種法に據る。

二、**廣義の結核豫防接種**　即ち過渡期の豫防接種であつて、既に結核菌感染を了り、所謂潛伏結核であるか、若くは潛伏結核を證明し能はざるも、ピルゲー氏反應陽性であつて、臟器結核を起すの虞ある者に施す治療的豫防法であつて、學齡前及國民教育年齡兒童並に靑壯年者にして開放結核患者に接し、若くは之

に接したることありて、ピルゲー反應若くは其他の潛伏結核徵を有し、臟器結核を起すの虞ある者全部に之を施さんと欲するものである。

此實行を可能ならしむるの前提は唯だ一つである。即ち

優良なる豫防接種材料を發見し若くは之を創製すること

が是である。

九、豫防接種材料を發見し若くは之れ創製せしむるの途

自然の法則、即ち個體の生物的作用を利用して個人の免疫性を得せしむる豫防接種法を完成するに非れば、人類は永久に結核の慘害から免れることは斷じて出來な

いのである。豫防接種を國民全體に施行すること種痘法施行の如くなるに依て、初めて結核防滅の目的は達成せられるのであり、之を措いては他に決して手段と方法は無いのである。

夫れ故に、結核豫防接種材料の優良なるものを得んことは、結核研究に與る醫學者の責任であり、人道に志ある者の希望であり、社會と公共團體共同の義務であり、國民の責任として之が完成に盡すべきものであり、人類の福祉を增進する手段の最も重要なる一部である。夫れ故に、國家と公共團體と私團體とを問はず、須らく皆其歩調を一にして、速に且つ大に、之が完成に向つて努力すべきである。それが爲には

一、既に完成されたる這種の業績を調査攻究すること――是は勿論無益の業ではあるが、一應は順序として取調べて見るが可い――

二、既に着手されたる業績を調査し、大に之を奬勵し、國家又は公共團體の費用

を必要に應じて無制限に――私見を以てすれば、此費用は、現今の結核療養所事業の總費に比しても著く僅少なるものである――給與すること。

三、速に國立結核研究所を造營し、普く内外の研究者を募り、如上の目的を限りて專念の研究を爲さしむること。

四、之に關して優秀の成績を擧げたる者に對して最も渥き授賞の方法を國法に依て速に規定すること。

五、時々研究行程を監視し若くは奬勵し審議するの一機關を特設すること。

六、其他必要に應じて機宜の活動に移るを得べき法規を作制すること。

十、結　論

一、結核豫防の目的を向つて從來世界各國の採り來りたる方策は餘りに無力無能

である。

二、治療醫學の力の範圍は、狹く且つ薄弱なるものであり、縱し其治療法に優秀なるものを今後に發見する事ありと假定するも、之に依て結核の全滅を期する事は不可能である。

三、結核病の本態は免疫無き個體に在ては急性進行性傳染病であるが、抵抗力（若くは免疫力）ある個體に在ては極めて慢性の經過を採り、強き抵抗力を有する個體に在ては、傳染せず、若くは發病せざるものである。從て之に罹患すると、せざると、罹患して輕重あるとは、繫りて一に個體の免疫力の有無と強弱とに在るのである。

四、免疫性を現はす傳染病の絶對的豫防方策は、人爲を以て之が完璧を期することは不可能であつて、必ず、自然の力卽ち個體の免疫性を增强せしむるの方途に依らなければならぬ。其適例を吾等は天然痘に於て睹る、チーフス・コレラに於て

も亦之を睹るのである

五、結核豫防の原則は、個體の豫防接種を施し得ることに盡き、之を以て唯一無二の途とする。

六、結核豫防接種の材料は健體に無危險若くは無害なる人型生結核菌に之を求むべきであり、又其接種に依つて個體の免疫性を賦與し、又之を增强せしむるを得るものであらねばならぬ。

七、結核豫防接種の材料、方法と時期とは可及的安全簡單なるもので、乳幼兒に之を應用し得べき事を目標とすべきである。

八、國家及び社會は如上の結核豫防接種を完成せむが爲めには絶對的の努力を傾注すべきである。

附言　本意見、殊に『結核病の本態』の項を完全なるものとする爲には、頗る多數の文獻を引用して、是が正鵠を期しなければならぬのであり、それが爲めには、

まだ非常に多くの論議を費さなければならないのであるが、それでは餘りに長文になるので、今回は敢て之に留めて、詳論は之を他日に譲ることゝした。敢て言はんと欲する所が之に竭きたのでは莫い。要は論よりも實行であり、目標を定めて、一日も速に之に近からんとするの實行に移らんことを切望するに外ならぬ。

—（大正十一年十月十二日）—

大正十二年十月一日印刷
大正十二年十月五日發行

結核の話

不許複製
定價金一圓

著者　有馬頼吉
發行兼印刷者　荒木利一郎　大阪府豐能郡芝面村平尾七三七
印刷所　株式會社大阪毎日新聞社　大阪市北區堂島裏二丁目三六
發行所　大阪毎日新聞社　大阪市北區堂島　振替大阪四五〇番
同　東京日日新聞社　東京市丸ノ内　振替大阪四五〇番

サンデー毎日叢書

四六版・絹表紙・美装・定價一圓・送料六錢

第一編　西川一草亭氏述

生花の話

アート紙刷　寫眞版　十五葉挿入

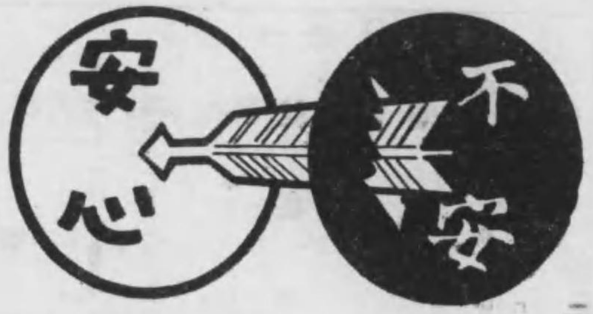
本書は新時代に適應する新花道の提唱であります。生花の藝術的價値、さうしたものが現代の生花界から殆んど忘れられて、單なる裝飾としての而も個性の失はれた切付けたやうな形としての生花が傳へられて當然視されてゐるのは寧ろ不思議とも云ふべきでせう。併し、では生花を生けたり又味はつたりするには一体何うすればいゝか、本書は現代を風靡してゐる抛入と一草亭式生花の秘訣を說いてゐます。

第三編　小鳥の話　近刊

發行所

大阪毎日新聞社　大阪市北區堂島五丁目四番地　振替大阪〇〇五番

東京日日新聞社　東京市丸ノ内四番地　振替東京〇〇五番



不安より安心へ！

体温計の選擇が肝要

農商務省計量器主任技師
渡邊理學士
講義抜萃

体温計の示度は短め正しくても時日を經過するに從ひ差狂を生ずる之を經年變化さ云ふ、經年變化の起る譯は高熱の爲め受けた硝子の膨脹は之が圓復に數ヶ月又は數年を要するのである。斯の如く變化の原因は主として硝子の質にある事は爲し得の標準硝子を用ひて作つたものには此變化が極めて微少であるのを見ても明である云々

三越、白木屋其他全國藥店計量器店にあり

正確で狂はぬ……

標準工ナ硝子製

肺結核
治療豫防免疫劑

内服ストロームン

醫學博士 百瀨一一氏創製

亡國病タル結核ノ撲滅チ圖ルニハ免疫療法ニ依ラネバ至難ナルコトハ已ニ世界一般醫學者ノ定見ナリ。本品ハ醫學博士百瀨一一氏指導ノ下ニ日、英政府專賣特許ツベルクロストローミンチ以テ製シタル内服劑ニシテ氏ハ多數實驗ノ結果免疫的治療ニ卓効アルノミナラズ全身虚弱者ニ對シテハ結核豫防ニ奏効疏實ニシテ又强壯劑トシテ極メテ適切ナルコトチ確認セラレタリ

●各地著名藥店ニアリ品切ノ節ハ直接申越チ乞フ

錠劑 百個入 貳圓五拾錢 二百個入 四圓五拾錢 五百個入 拾圓也

粉末（病院用） 廿五瓦入 四圓 百瓦入 拾四圓

百瀨博士著 養生說明書送呈

發賣元 株式會社 後藤風雲堂

大阪東區淡路町四丁目 電話穴吹四六三番三番
東京市神田區淡路町 電話東京一〇一六六番

復齋

終

發行所

大阪毎日新聞社

東京日日新聞社